

調査研究事業

「福祉人材確保・定着に向けた学生の意識調査」

報 告 書

平成 28 年 3 月

社会福祉法人兵庫県社会福祉協議会

社会福祉政策委員会

目 次

1. はじめに	1
2. 本調査研究の目的と方法	2
3. 調査報告Ⅰ 若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査（高校生）の結果	4
1－1. 調査方法	
1－2. 単純集計及び自由記述の結果	
1－3. クロス集計の結果	
1－4. 調査Ⅰのまとめ	
4. 調査報告Ⅱ 若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査（専門学校生）の結果	2 4
2－1. 調査方法	
2－2. 単純集計及び自由記述の結果	
2－3. クロス集計の結果	
2－4. 調査Ⅱのまとめ	
5. 調査報告Ⅲ 若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査（短大・4年制大学）の結果	4 2
3－1. 調査方法	
3－2. 単純集計及び自由記述の結果	
3－3. クロス集計の結果	
3－4. 調査Ⅲのまとめ	
6. 調査報告Ⅳ 若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査（進路指導担当教職員）の結果	6 2
4－1. 調査方法	
4－2. 単純集計及び自由記述の結果	
4－3. クロス集計の結果	
4－4. 調査Ⅳのまとめ	

7. 調査報告Ⅴ 福祉人材の確保と定着に関する 実態調査（社会福祉施設）の結果	80
5－1. 調査方法	
5－2. 単純集計及び自由記述の結果	
5－3. 調査Ⅴのまとめ	
8. 全体の結果のまとめと考察	94
9. 添付資料	96
調査Ⅰの調査票	
調査Ⅱの調査票	
調査Ⅲの調査票	
調査Ⅳの調査票	
調査Ⅴの調査票	

1. はじめに

介護・障害・児童等各分野における福祉人材の確保は依然として、たいへん厳しい状況にあり、喫緊の課題となっています。多様な人材の参入促進や福祉人材に対する処遇、労働環境等の改善、社会的評価の向上など、福祉人材の確保対策をさらに積極的に推進していかなければなりません。

一方で、介護保険や障害福祉サービスの利用者の増加や保育所入所を希望する待機児童の問題など、各福祉サービスに対する需要が拡大していることに加え、利用者ニーズは多様化しており、それに応えることができる質の高い人材の確保が求められています。将来にわたり、地域の中で福祉サービスを安定的・継続的に提供していくためには、福祉サービスを提供する職員の資質向上と処遇改善に努めることが重要です。

とりわけ、福祉に関する意識を高め、県民の「思いやり」の心を育むことは、福祉の仕事そのものへの理解や社会的評価を高めることにもつながるもので、いっそうのPRや啓発活動等に官民一体となって取り組む必要があります。

こうした状況の中、兵庫県社会福祉協議会では、兵庫県内各大学・短期大学、兵庫県教育委員会、一般社団法人兵庫県私学総連合会、兵庫県介護福祉士養成施設連絡協議会、兵庫県内種別協議会の協力を得て、高校生・大学生等が福祉の仕事や職場環境に求めるものや福祉職場に対するイメージ等と、雇用側である福祉事業者が実際に提供しているものとのギャップを明らかにし、各事業者における処遇・労働環境等の確認・改善に資するための情報を調査しました。

福祉人材確保難の時代にあって、質の高い人材の安定的な確保と定着、さらには育成がなされるよう、当調査がその一助になることを願っております。

最後に、お忙しい中、この調査にご協力いただきました、各学校、養成施設、教育者、福祉施設・事業所、の皆さまに厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会
会 長 武 田 政 義

2. 本調査研究の目的と方法

1990年代以降、福祉職や保育士・介護職の人材不足の問題が時代の経過とともに深刻化しつつある。1990年代には、特に、介護職は、建設業やサービス業などの3K(きつい、汚い、危険)労働の一つに数えられ、それらの3Kに加え、「休日少ない」、「休暇がない」、「給料安い」、「希望がもてない」など、6Kあるいは7K職種と考えられるようになり、その職業に対する負のイメージは現在も根強く残っている。ところがその一方で、2000年の介護保険制度導入後、わが国の高齢者人口比率が20%を越えるなど急速な高齢化社会を迎え、それに伴い要介護高齢者数や認知症高齢者数が増加し、介護サービスを提供する介護人材の必要性和人材確保は、社会の深刻な課題であると広く認識されている。また、2010年代に入ってから、保育所の待機児童問題が年々大きな問題となってきた。保育所不足の背景には、保育所に従事する保育士不足の問題があり、保育士の人材確保においても労働条件の過酷さが大きな課題となっている。

以上のように、特に、2000年以降、福祉や介護、保育を担う若者の人材不足の問題は、一層深刻化しており、これらのサービスを担う福祉人材の確保が喫緊の課題となっている。

ちなみに、これも数年前から大きな課題となっているが、兵庫県内にあるいくつかの介護福祉士養成校の教員に伺ったところ、それらの養成校の新入生は、入学定員を満たしておらず、入学者が定員の半数に届くか届かないかというレベルになっているということで次世代を担う若い介護職養成における人材不足は一層深刻化しつつある。また、兵庫県内にある福祉系の4年生大学でも社会福祉士を養成する社会福祉学部や社会福祉学科あるいは社会福祉コースの入学定員を充足することが年々難しくなっている。このように、福祉・介護業界の人材不足問題は、福祉現場だけではなく、福祉・介護教育界や養成サイドにとっても深刻な問題となっている。

こうした社会の現状を踏まえ、兵庫県社会福祉協議会では、関西学院大学人間福祉学部の大和三重教授と石川久展教授にご参加いただき、兵庫県内の各大学・短期大学、兵庫県教育委員会、一般社団法人兵庫県私学総連合会、兵庫県介護福祉士養成施設連絡協議会、兵庫県内種別協議会の協力を得て、高校生、専門学校生、短大・4年制大学生、高校及び大学等での就職・キャリア指導担当教員・職員、社会福祉施設を対象として、人材確保・定着に関する基礎資料を収集し、さらに人材確保・定着に向けた施策・事業展開を今後行うことを目的として実態調査を行うこととした。具体的な調査目的としては、まず、はじめに、高校生、専門学校生、短大・4年生大学生などを調査対象とし、学生が求める仕事・環境(労働環境、処遇、やりがい等)像を明らかにすること、次に、高校及び大学等の進路指導担当教育・職員を調査対象とし、福祉・介護に対する意識の高まりを育む機会を明らかにすること、そして、最後に、県内の社会福祉施設等の福祉事業者を対象とし、若者の雇用に際しての意識を明らかにすることの3つがある。

調査方法と内容についてであるが、実態調査は、高校生、専門学校生、短大・4年制大学生、高校及び大学等の進路指導教職員、そして社会福祉施設、と対象者ごとに5つの調査票を作成し、実施した。それらの調査票の詳細については、本報告書の添付資料を参照されたい。主な調査項目は、高校生、専門学校生、短大・4年制大学生などの調査については、基本属性に加え、周りに福祉の仕事についている人がいるかどうかの有無、職場体験、ボランティア体験、交流行事、職場見学への参加の有無、福祉の仕事についてのイメージ、仕事を決める際に重視すること、就職情報の収集源、希望する勤務地などを尋ねた。進路指導担当教職員に対しては、福祉に関する資格や職種の認知状況、福祉の仕事についてのイメージ、福祉分野への就職・進学を勧めるかどうか、勧めたくない場合の理由、福祉に関

心をもってもらうための有効手段、福祉人材センターが実施する事業の活用、進路指導を通じて重視すること、その他、自由記述などであった。社会福祉施設に対しては、施設種別、設置主体、設立年月、利用者定員、職員数などの基本情報の他に、退職した職員の人数、退職理由、欠員状況、その職種、欠員補充が円滑に行えない職種、有給休暇の取得率、育児休業の取得率、介護休養の取得率、健康管理対策の実施状況、福利厚生の実況、キャリアアップの仕組みの構築の有無、高齢者等の雇用の取り組み、福祉・介護サービスの周知・理解、その他、多くの自由記述の項目などであった。

調査方法としては、5つの実態調査すべてにおいて、質問紙によるアンケート調査法(質問紙調査法)を採用し、各学校、大学、施設に調査依頼をし、了解を得た上で、それらの調査地に調査票を郵送し、当該の調査対象者に配布してもらい、その後、一定の期間をおいて回収し、調査票を送り返してもらうという郵送による留め置き法を用いた。調査期間は、概ね2016年1月末から3月中旬とした。なお、調査方法の詳細については、各調査ごとに調査対象者の選定の方法や実際の調査期間、回収できた有効回答数等が記述されている。

なお、本実態調査の実施に際して、調査対象となる個人の名前、電話番号、住所等の個人情報を一切収集していないので、基本的にはプライバシーの保護あるいは個人情報保護法の遵守していることにはなるが、倫理的な配慮としては、調査が無記名で行われ、結果は統計的に処理され、個人のお名前やお答えが外部に漏れるようなことはないことを伝え、その上で、回答は任意とすることによって配慮を行った。

3. 調査報告 I

若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査 （高校生対象）の結果

1－1．調査方法

兵庫県内の県立及び私立高校に通う高校生を調査対象として、福祉の仕事や職場に対する意識調査を実施した。調査対象者は、兵庫県内のすべての県立高校(136校)および私立高校(52校)に通う高校2年生約5,500人とした。調査方法は、郵送による留め置き調査法を用いたが、各高校の進路指導担当の教職員に調査票を送り、調査票を送り返してもらった。なお、送付した調査票数については、事前に各高校の定員に関する情報があつたが、その定員の10%とした。調査期間は、平成28年1月25日～平成28年2月15日であり、3,208人の高校生から回答があつた(回収率58.3%)。

調査項目については、添付にある調査票の通りであるが、年齢、性別などの基本属性、福祉の仕事や進路に関する項目、福祉施設等でのボランティア経験等の有無、福祉職への就職希望の有無、福祉の仕事に対するイメージ、就職を考えるとときに重視するものなどである。

1－2．単純集計及び自由記述の結果

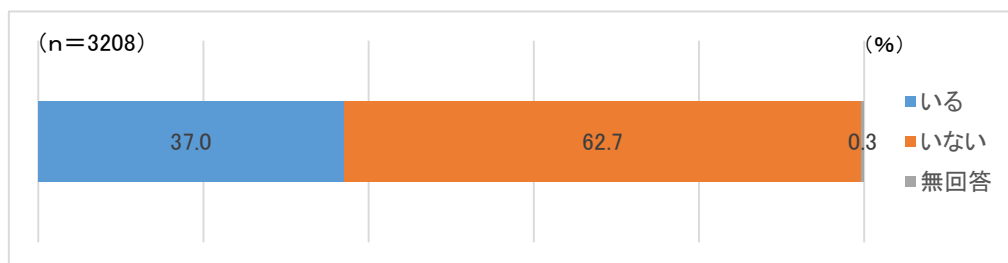
調査結果についてであるが、各質問項目に対する単純集計の結果は以下の通りである。

I 【福祉の仕事・進路について】

1) 「周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか」と尋ねた。

図表1-1の通り、「いる」と答えた人は37.0%であり、回答者の3分の1強の高校生の周りに、福祉の仕事についている人がいることがわかった。

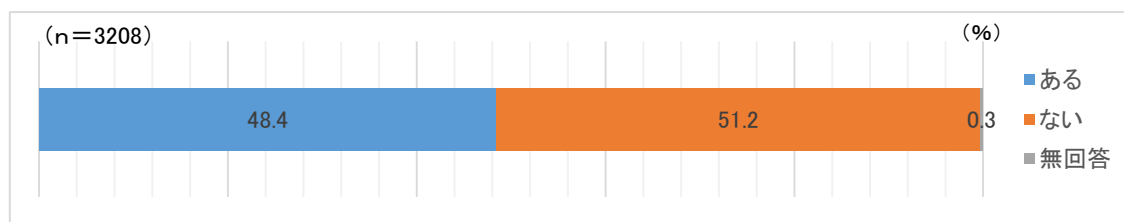
図表1-1 周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか。



2) 「福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学(社会見学)などに参加した経験がありますか」と尋ねた。

図表1-2の通り、「ある」と答えた回答者は、48.4%とほぼ半数近くであり、兵庫県の高校2年生の半分が福祉に関連する仕事やボランティア体験等に過去参加していることがわかった。

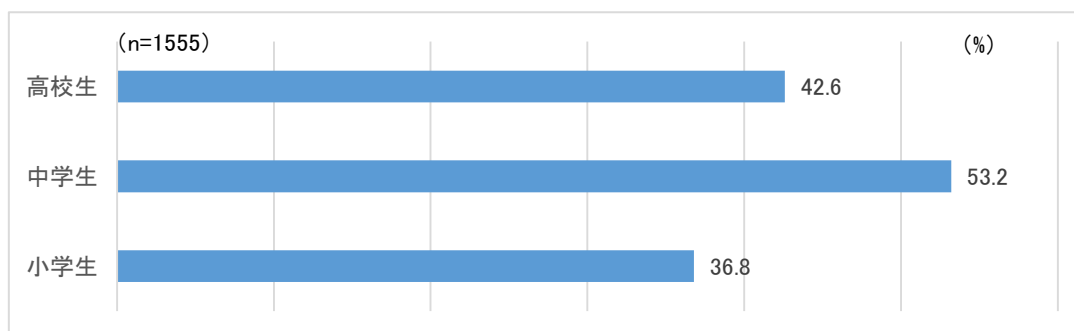
図表1-2 福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学(社会見学)などに参加した経験がありますか。



3) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「いつ参加しましたか」と尋ねた。

「小学生」が 36.8%、中学生が 53.2%、高校生が 42.6%となっており、中学校において福祉の仕事や行事への参加、ボランティア経験をしている回答者が最も多い結果となった（図表 1-3）。

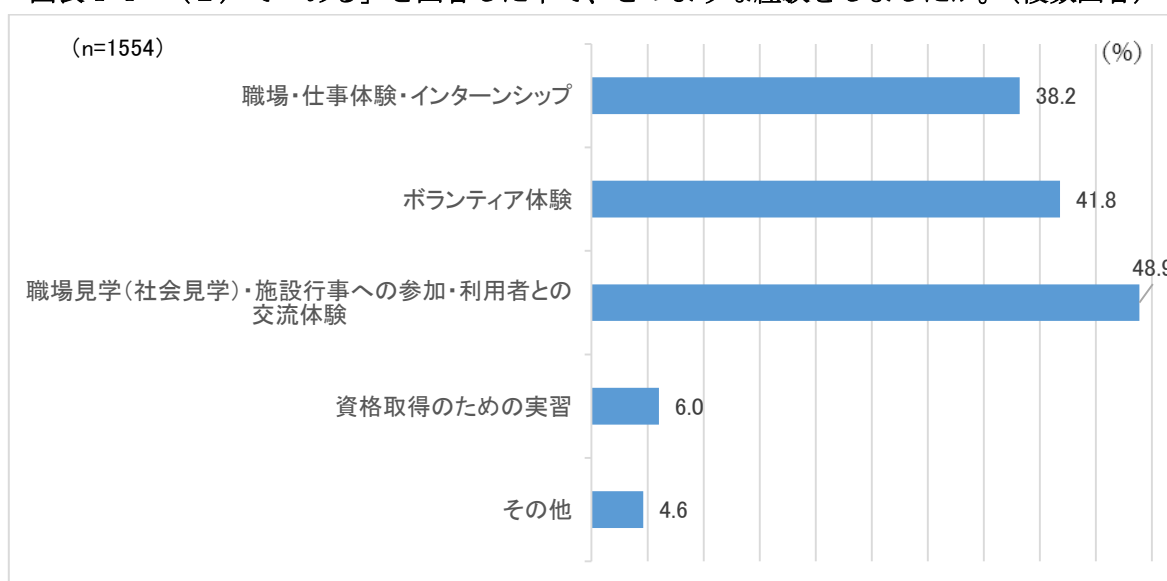
図表 1-3 (2) で「ある」と回答した中で、いつ参加しましたか。(複数回答)



4) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「どのような経験をしましたか」と尋ねた。

具体的な体験内容を尋ねてみると、図表 1-4 の通りの結果となった。最も多かったのは、「職場見学（社会見学）・施設行事への参加・利用者との交流体験」（48.9%）であり、次に、「ボランティア体験」（41.8%）、そして「職場・仕事体験・インターンシップ」（38.2%）と続き、これら 3 つの体験内容がほとんどを占めていた。

図表 1-4 (2) で「ある」と回答した中で、どのような経験をしましたか。(複数回答)



5) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「参加を決めた理由でふさわしいものを選んでください」と尋ねた。

結果は下図の図表 1-5 の通り、「授業や実習のためやむなく参加した」(50.4%)という回答が最も多かった。どちらかという主体的に参加したというよりも、受け身的に参加した高校生が多いことがわかった。次に多かったのは、「以前から福祉に興味があった」(20.8%)であり、福祉関係の活動に過去に積極的な関わっている高校生もそれなりに多いことがわかった。

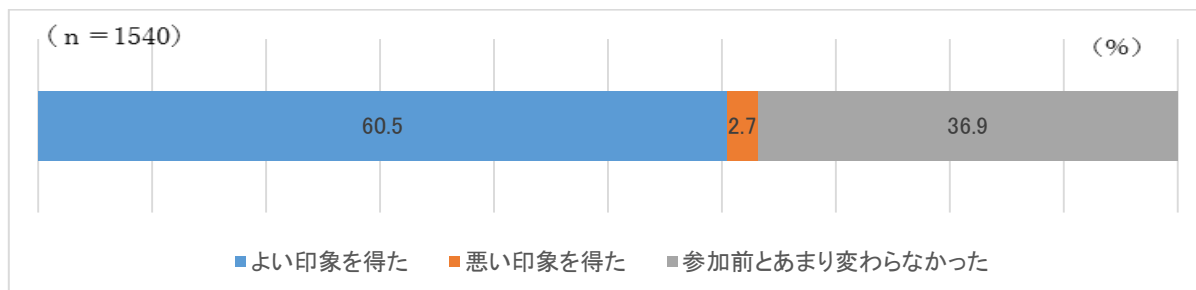
図表 1-5 (2) で「ある」と回答した中で、参加を決めた理由でふさわしいものをすべて選んでください。(複数回答)



6) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「参加した後の福祉施設への印象の変化がありましたか」と尋ねた。

半数以上の回答者が「よい印象を得た」と回答しており、「悪い印象を得た」と答えた高校生は、非常に少なかった。このことから、福祉活動への参加や福祉施設への見学は、高校生以下の若者たちには、一定の効果があることが示唆された(図表 1-6)。

図表 1-6 (2) で「ある」と回答した中で、参加した後の福祉施設への印象の変化はありましたか。



上記の項目について選択した理由について記述してもらったが、代表的な回答は以下の通りである。

- 特に何もなかったから
- もっと雰囲気が暗いのかと思ったけど明るかった

- イメージ通りだったから
- 誰かのためになっている仕事だと思ったから
- 実際に体験してみて大変さが分かったから
- 思ったとおりの感じだった
- 私には向かないと思った
- あまり老人の人とのコミュニケーションが取れなかったから
- 想像しているより楽しかった
- そこで働かしてもらってやりがいを感じたから
- 施設でやることについて視野が広がったから
- 施設で働いている人がとてもいきいきしていた
- もともと興味があったが、もっと興味が沸いた
- 利用者が楽しそうだったから
- 丁寧に対応してくれた
- たくさんの命の大切さを目の前で体験した
- しんどいと思っていたけど、みんなと仲良く仕事していて、いいと思った
- 仕事のやりがいを感じたから
- みんな明るくて楽しそうだったため
- 取り組みに興味を持った
- 楽しそうに高齢者の皆さんが過ごしていた
- 自分のした仕事で人が笑顔になってくれたから
- 達成感があったから
- よい気持ちになったから
- すごく配慮していると思ったから
- 自分の思い描いていた印象と変わらなかったから
- すごく環境が生活しやすいものだった
- 施設の方が親切にして下さったから
- 福祉施設でいただいた、たくさんのありがとうという言葉がうれしかった
- 人間関係や仕事にやりがいを感じられたから
- 授業で聞いていたから
- 仕事がハードだった
- テレビとかで見ているのと同じ感じだった
- 親からどんな仕事か聞いてたから
- 利用者とスタッフの親密さが良かった
- 精神的にしんどそうだった。
- もっと暗いイメージがあったから
- 世代によって違うものの捉え方があって面白かったから
- 介護士の方一人ひとりが周りに気を配っていたから。明るい雰囲気だったから
- 社会福祉が良いものだと知ったから

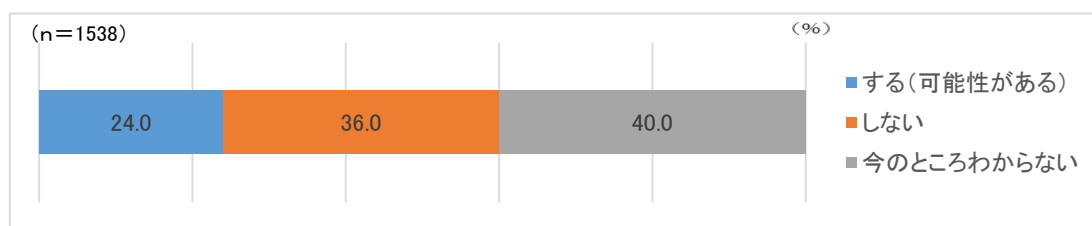
- 想像と違って、働いている人の大変さを強く感じましたが、その分、やりがいもあるのだろうと思ったからです
- ありがとうと言われたから
- 良い経験になった
- 利用者の笑顔を見たから
- とても大変そうで一生懸命働いているのに給料が安いのはとてもおかしいと思った
- 福祉活動のよさを実感できたから
- とても疲れる仕事だけど、やりがいはあるなと思っていたし、感じたから

福祉施設等の職場体験、ボランティア体験、交流行事、職場見学の参加の有無に関して、その理由についての自由記述については上述した通りであるが、「うれしかったとか」、「良い経験になった」、「達成感があった」、「社会福祉が良いものだと思った」など、肯定的に参加体験をとらえている高校生の意見が大半であり、その反面、「(悪い) イメージ通りだった」、「仕事の大変さがわかった」などの否定的な意見はあまり多くはなかった。福祉への就職や進学とは直接結びつかない、行事の参加を通して福祉という職業をみると、ネガティブな意見は少なく、福祉を肯定している意見が多いことがわかった。

7) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「これからの就職選択に影響すると思いますか」と尋ねた。

「する(可能性がある)」は24.0%と、4分の1程度であり、「しない」と答えた回答者は36.0%であった。最も多かったのは、「今のところわからない」(40.0%)であり、高校2年時点では、福祉への活動や施設見学が就職選択に直接的な影響を与えているとは言い難い結果となった(図表1-7)。

図表1-7(2)で「ある」と回答した中で、これからの就職選択に影響すると思いますか。



上記の回答を選択した理由についても自由に記述してもらったが、代表的な回答は以下の通りである。

- 特に何もなかったから
- もっと雰囲気暗いのかと思ったけど明るかった
- イメージ通りだったから
- 誰かのためになっている仕事だと思ったから
- 実際に体験してみて大変さが分かったから
- 思ったとおりの感じだった
- 想像しているより楽しかった

- そこで働かしてもらってやりがいを感じたから
- 施設でやることについて視野が広がったから
- 施設で働いている人がとてもいきいきしていた
- もともと興味があったが、もっと興味が沸いた
- 利用者が楽しそうだったから
- 丁寧に対応してくれた
- たくさんの命の大切さを目の前で体験した
- しんどいと思っていたけど、みんなと仲良く仕事していて、いいと思った
- 仕事のやりがいを感じたから
- みんな明るくて楽しそうだったため
- 取り組みに興味を持った
- 楽しそうに高齢者の皆さんが過ごしていた
- 自分のした仕事で人が笑顔になってくれたから
- 達成感があったから
- よい気持ちになったから
- すごく配慮していると思ったから
- 自分の思い描いていた印象と変わらなかったから
- すごく環境が生活しやすいものだった
- 施設の方が親切にして下さったから
- 福祉施設でいただいた、たくさんのありがとうという言葉がうれしかった
- 人間関係や仕事にやりがいを感じられたから
- 授業で聞いていたから
- 仕事がハードだった
- テレビとかで見ているのと同じ感じだった
- 親からどんな仕事か聞いてたから
- 利用者とスタッフの親密さが良かった
- 精神的にしんどそうだった
- もっと暗いイメージがあったから
- 世代によって違うものの捉え方があって面白かったから
- 介護士の方一人ひとりが周りに気を配っていたから。明るい雰囲気だったから
- 社会福祉が良いものだと思ったから
- 想像と違って、働いている人の大変さを強く感じましたが、その分、やりがいもあるのだろうと思ったからです
- ありがとうと言われたから
- 良い経験になった
- 利用者の笑顔を見たから
- とても大変そうで一生懸命働いているのに給料が安いのはとてもおかしいと思った
- 福祉活動のよさを実感できたから

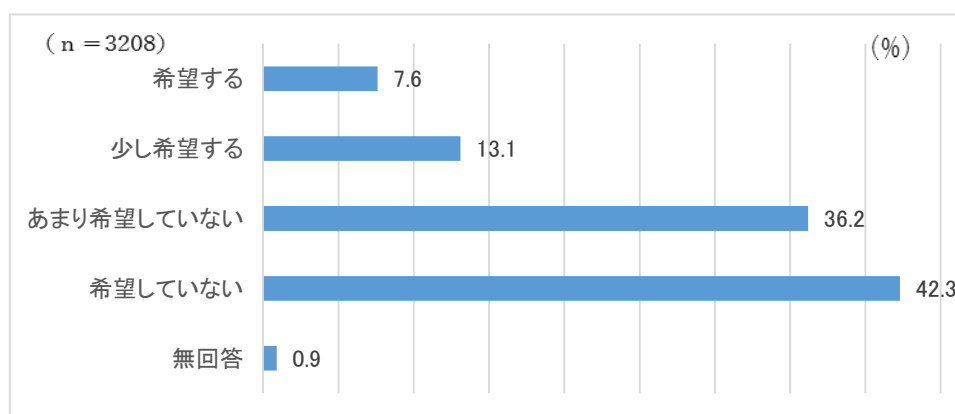
- とても疲れる仕事だけど、やりがいはあるなと思っていたし、感じたから
- 私には向かないと思った
- あまり老人の人とのコミュニケーションが取れなかったから

福祉の行事への参加についてもう少し踏み込み、福祉施設への印象の変化の理由などについて自由記述で尋ねてみると、一部、「精神的にしんどそうだった」「私には向かないと思った」などの否定的な意見はいくつかみられるものの、6) の自由記述の結果と同様、「福祉活動の良さを実感できた」、「良い経験になった」、「やりがいはあるなと感じた」、「すごく配慮している」などと、福祉施設に対する印象が悪くない記述の方が多く、総じて、これらの行事への参加前後で福祉に対するイメージがあまりマイナスにはなっていないことがわかった。

8) 「将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか」と尋ねた。

図表 1-8 の通り、「希望していない」(42.3%)と「あまり希望していない」(36.2%)と否定的な回答した高校生が 78.5%と、ほぼ 8 割を占めており、高校 2 年の段階で、福祉への就職を希望している高校生がそれほど多くないことがわかった。それでも、約 2 割の高校生は、福祉への就職の意向を示しており、全体としては、必ずしも福祉への就職意向がそれほど低くはないことがわかった。

図表 1-8 将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか。



次に、「あまり希望していない」と答えた理由について自由に記述してもらったが、代表的な回答は以下の通りである。

- 迷っているから
- 就く仕事が決まっていないから
- 決めている進路がある
- 福祉関係の道に進む気がないから
- 簡単ではないということが分かったから
- あまり興味を持っていない
- 興味は惹かれなかった
- 何がしたいか分からない

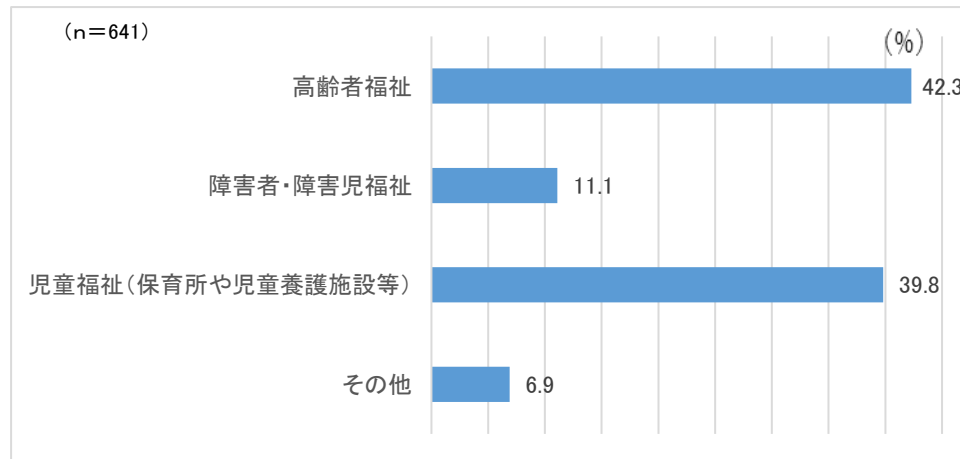
- 地方公務員になりたいから
- 高齢者の世話をしてみたいと思った
- 自分には向いていない
- 人と接するのが苦手だから
- 別の就職先を考えているから
- もうなりたい職業があるから
- 福祉の分野に興味があるから
- 経験したことを思い出して選択すると思うから
- 体験であまり良い印象を受けなかったから
- 絶対やらないから
- 人に信頼される仕事が良いなと思ったから
- 資格取得できるから
- 家族も福祉の仕事をしてるし、やりがいがあると思うから
- ボランティア体験をすることによって福祉の見方が変わるから
- 職を選ぶ時、やはり賃金を考えてしまうから
- 福祉で働こうと思わない
- 一番の希望ではないけど、福祉の仕事もしたいと思っているから

この自由記述の質問に対して、かなりの高校生が回答してくれたが、福祉行事への参加の理由、福祉施設の印象の変化などでポジティブに回答してくれていたのとは異なり、「就く仕事がきまっている」「福祉関係の持ちに進む気がない」「あまり興味をもっていない」「絶対にやらない」「賃金を考えてします」など、実際の就職・進学の実選択の影響については、福祉を仕事として選ばないという意味の否定的な回答を示す記述が非常に多かった。なお、記述として多くはなかったが「福祉の仕事をしたと思っているから」など、福祉の仕事を選択肢に加える意向を示す記述もみられた。

9) 福祉の仕事を「希望している」あるいは「少し希望している」と回答した高校生に対して、どのような分野を希望しているかを尋ねた。

「高齢者福祉」が最も多く、42.3%であり、次に多いのが「児童福祉」(39.8%)であり、現在の福祉を取り巻く社会環境を表している結果となった(図表 1-9)。

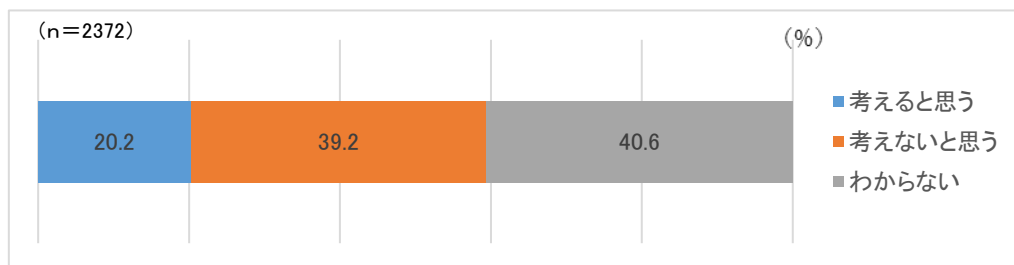
図表 1-9 (8)で「希望している」「少し希望している」と回答した中で、どのような分野(仕事)を希望していますか。



10) 福祉の仕事を「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、「今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますか」と尋ねた。

結果は、下図の通り(図表 1-10)、「考えると思う」と回答した高校生は 20.2%であり、「考えないと思う」が約 4 割(39.2%)、「わからない」も約 4 割(40.6%)と、環境や心境の変化によって、就職の希望が大きく変化しない回答者が多い傾向にあることがわかった。

図表 1-10 (8)で「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますか。



なお、上記を選択した理由を記述してもらったが、代表的な意見は以下の通りである。

- きらいという訳ではないから
- 今何も考えてないから
- 今の時代、高齢者が増えていくけど、人が足りていないし、給料は安定していると思えるから
- 家族の誰かが事故などで体を不自由にしたときには、私が介護をしてあげたいから
- 何があるか分からないから
- 興味がない
- まだ決めていない
- 精神的・肉体的負担が大きいと思うから
- 介護福祉の仕事が増えると思うから
- 別のしたいことがあるから

- なりたい職業が決まっているから
- 自分が大学で学びたいと思っていることと全然違うから
- 高齢化社会になっていくから
- 地元に残る場合、仕事の1つとして考えるから
- あまり興味が持てない
- 福祉という仕事の大変さと給料が割りに合わなかったり、国のサポートが充実していない
- 大変な仕事だけど人の役に立てる仕事だから
- 福祉の仕事に就きたくないから
- 大変そうだから
- 今後福祉の需要は高まっていくと思うから
- 震災等が起こり、自分がボランティアとして活動する中で、やりがいを見つける可能性もあるから
- あまり関心がないから、声かけに困りそうだから
- 専門的に学習することによって興味を持つと思ったから
- 祖母の看護をしている母をみていて大変そうだったから
- 将来身のまわりの人に福祉が必要になるかも知れないから

これらの自由記述の内容をみると、「介護福祉の仕事が増えると思うから」「福祉の需要は高まっていくと思うから」「将来身のまわりの人に福祉が必要になるかもしれないから」などと、福祉の仕事の重要性や必要性を記述する意見がある一方で、「何も考えていないから」「なりたい職業が決まっているから」「別のしたいことがあるから」など、自分自身の職業選択と福祉との関連性に対する曖昧な態度や姿勢の記述が割と多かった。また、完全に福祉の仕事を否定するような意見はほとんどみられず、否定するとしても自分とは関わりのないような言い回しをする意見が多かったのが特徴であった。

1 1)「福祉の仕事」(介護の仕事も含む)に関するイメージとして、図表 1-11 に福祉職の労働条件に関する項目、負担感に関する項目、やりがい、資格、能力に関する項目、社会的な評価に関する項目などの20の項目を尋ねた。

調査対象となった高校生の「福祉の仕事」についての特徴的なイメージとしては、まず、項目①、②、③、⑨、⑪、⑫、⑬、⑮などの質問の結果をみると、福祉職が社会的に必要とされており、尊く、大事な仕事であり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持つ高校生がいずれも過半数以上を占めていた。回答した若者たちは、一般論として、介護を含む福祉職の仕事の必要性、重要性、将来性を実感しており、福祉の仕事そのもののイメージも決して悪いわけではないことがわかった。次に、⑩の自分の個性や適性を活かせる、⑮の希望の地域で働けるなど、個人の特性や仕事先の希望が活かせる仕事としての認識がある項目については、3分の1以上の高校生が肯定的なイメージを持っていることがわかった。

その一方で、項目④から⑧までの給与や休日などの労働条件や仕事の負担感に関する項目、⑭の雇用形態に関する項目、⑯の仕事の安定性、⑰の中途退職の多さに関する項目については、肯定的な回答はかなり少なかった。特に、給与や休日などの労働条件に関する項目では、9割程度の高校生が否定的に観ていることがわかった。いずれにせよ、これから進学や就職を考える高校生にとっては、これらの労

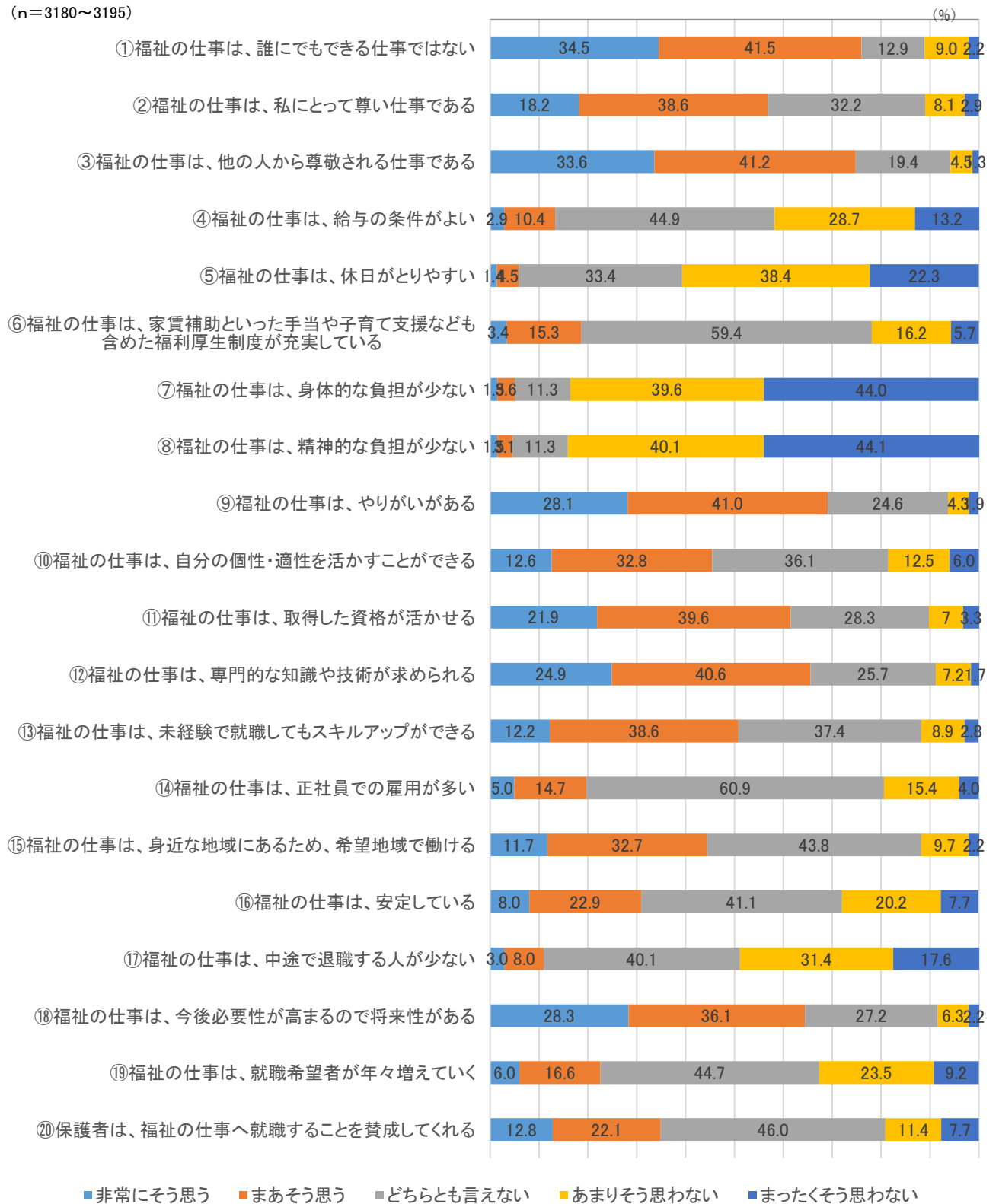
働条件や負担感、雇用形態、安定性などの福祉の仕事に関するイメージは非常に悪いことが改めてわかった。なお、これらの福祉職のイメージに関する項目は、いずれも介護職の仕事のイメージも含まれており、介護職のイメージがそのまま表れている可能性も考えられる。

最後に、⑳の自分が福祉職に就くことを保護者が賛成してくれるかどうかについては、約3分の1が賛成してくれると考えていることがわかった。これは保護者自身に尋ねた訳ではなく、あくまでも対象者である高校生自身に保護者がどう考えていると思うかを尋ねたものであるが、否定的な回答が多いことがわかった。

図表 1-11 あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～㉔のそれぞれの項目について
あてはまるものに○を付けてください。

注）以下の項目でいう「福祉の仕事」には「介護の仕事」も含まれます。

(n=3180~3195)



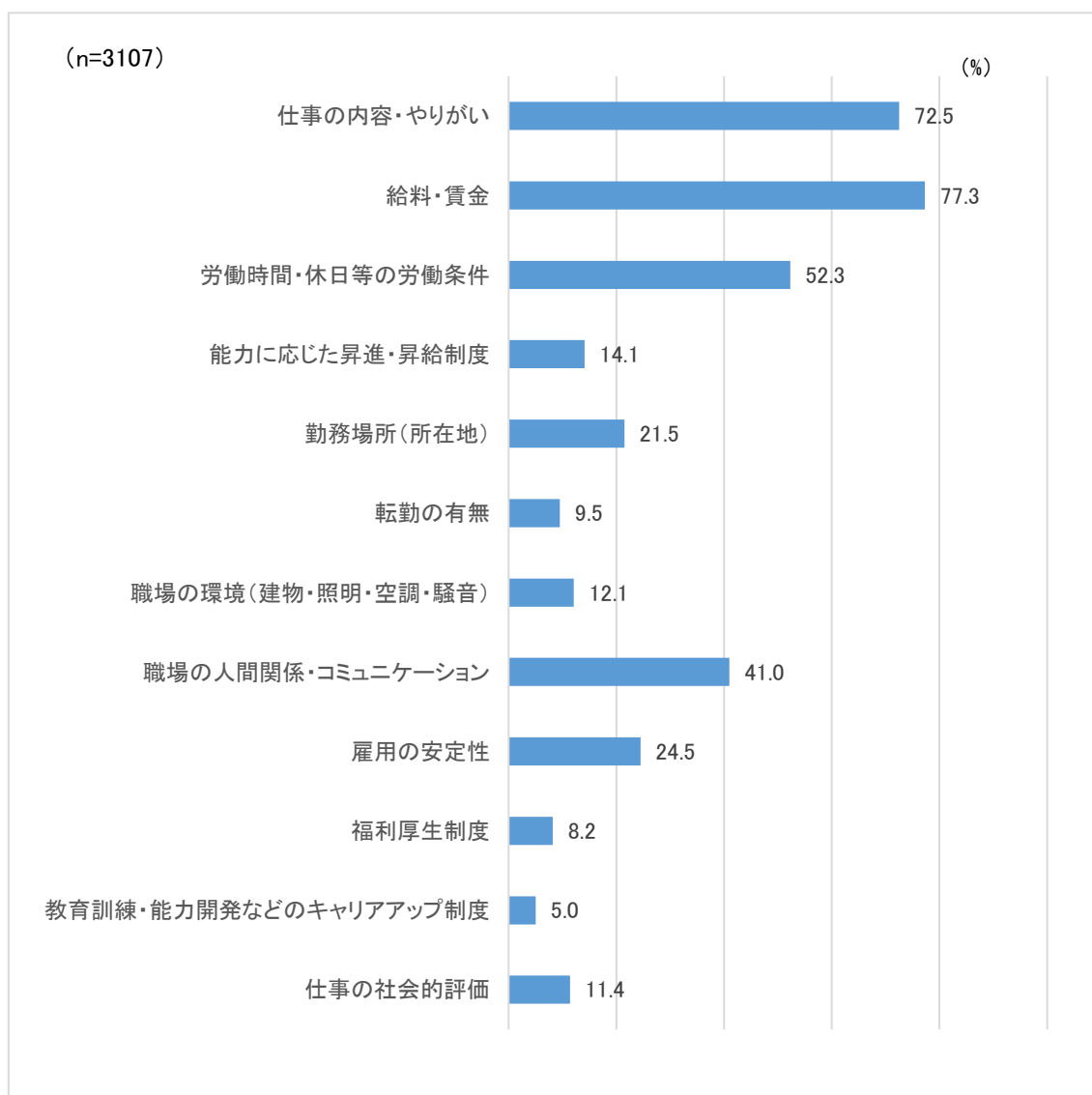
Ⅱ 【就職活動について】

調査対象者にこれからの就職活動一般に関する質問を行ったが、結果は下記の通りである。

1 2) 「仕事を決めるにあたり重視することは何ですか」あてはまるものを3つまで選択してもらった。

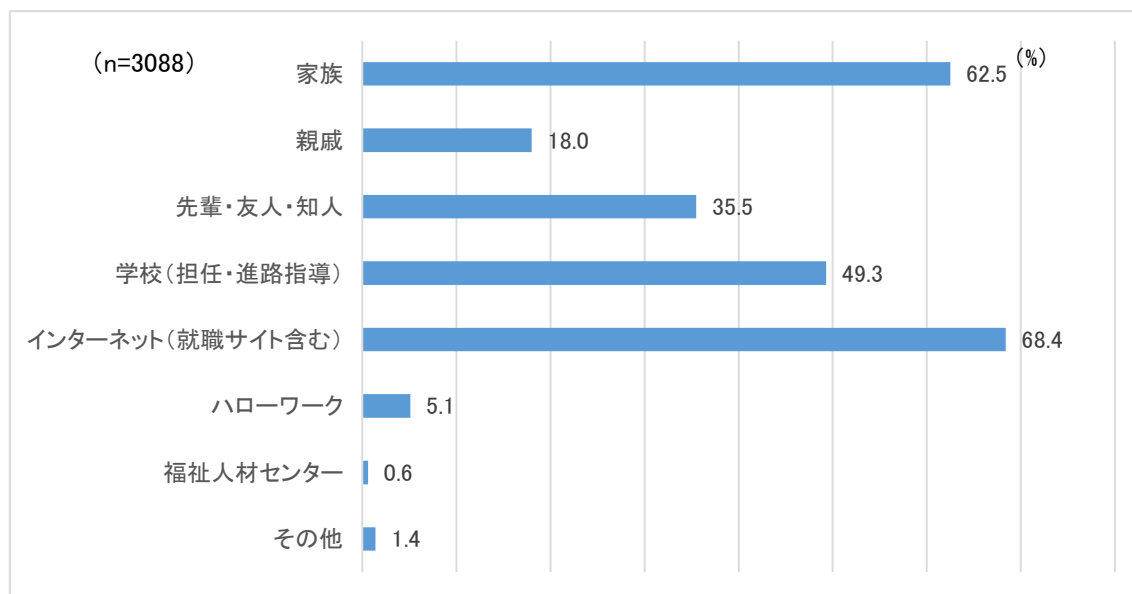
最も多かったのは、「給料・賃金」で、次に「仕事の内容・やりがい」そして、「労働時間・休日等の労働条件」と続いた。給与や休日、労働時間などの労働条件関係については、どのような職種に就こうとも、高校生たちが重視している仕事の条件であることがわかった。ただし、重視しているのはそれらの労働環境だけではなく、仕事の内容ややりがい、職場の人間関係・コミュニケーションを重視している高校生も多いという結果となった（図表 1-12）。

図表 1-12 仕事（就職先）を決めるにあたり重視することは何ですか。以下のうち当てはまるものに3つまで○をつけてください。



1 3) 次に、就職に関する情報源について質問をしたが、最も多かったのが「インターネット」であり、次に、「家族」、「学校」、「先輩・友人・知人」と続いている。ネット時代の現在、高校生たちにとっては、様々な就職サイトや SNS など、インターネットを通して得る情報が最も多いことが示唆される。それ以外の情報源は、家族、学校、先輩・友人・知人などの各個人の人間関係を通して、情報を得ることが多いことがわかった（図表 1-13）。

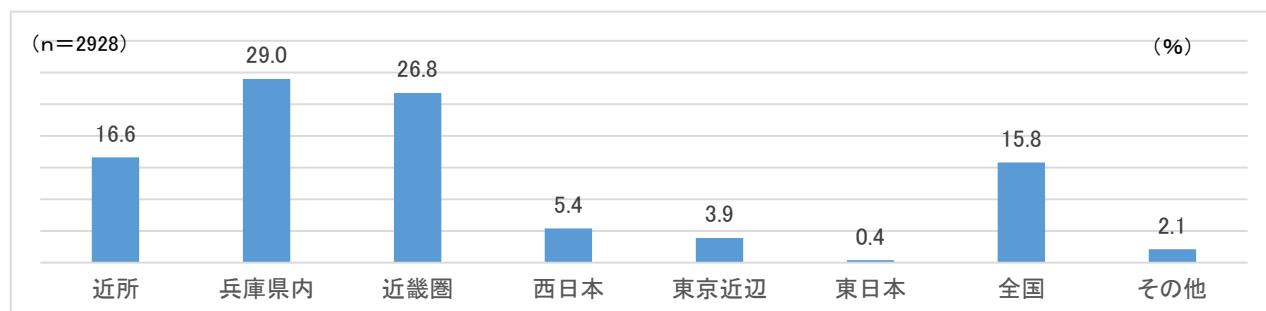
図表 1-13 就職に関する情報について、どこから情報を得ていますか（得ようと思いますか）。以下の当てはまるものにすべて○をつけてください。（複数回答）



1 4) 希望する勤務地を尋ねた。

結果は図表 1-14 の通りである。学校のある「兵庫県内」が最も多く、「近畿圏」、「住んでいる市町村かその近辺」と続いており、自宅等から通勤できる可能性がある勤務先を希望している高校生が多いことがわかった。また、「全国どこでもよい」と勤務地を全く気にしない高校生が多いことも特徴としてあげられる。

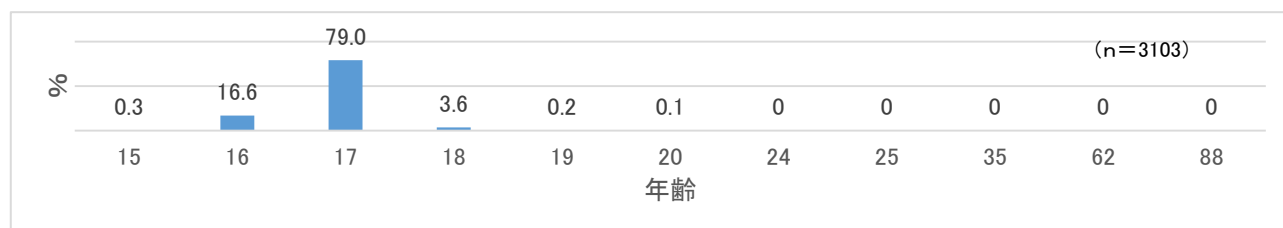
図表 1-14 希望する勤務地はどこですか。以下の当てはまるものに○をつけてください。



Ⅲ 【基本的属性】

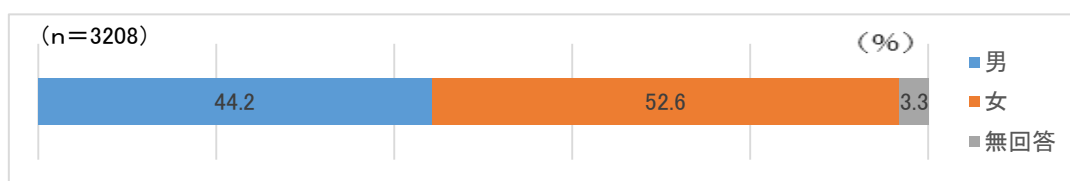
15) 最後に、調査対象者の基本属性としては、まず年齢については、図表 1-15 の通り、高校 2 年生を主に対象としていたので、平均年齢が 16.92 歳であった。

図表 1-15 回答者の年齢



16) 性別については、「男性」が 44.2%、「女性」が 52.6%であり、若干女性の方が多かった（図表 1-16）。

図表 1-16 回答者の性別



1-3. クロス集計の結果

高校生、専門学校生、短大・4年制大学生といった若者を対象とした3つの実態調査においては、設定した調査項目の多くが複数回答であったために、2つの単数回答の項目をクロスさせて、その記述的特徴を示し、統計的な有意差を検証(カイ2乗検定)することができるクロス集計を、それほど多く実施することができなかった。これらの3つの若者の実態調査に共通して実施できたクロス集計は、まず、基本属性である性別、周りに福祉の仕事に就いている人の有無、福祉行事への参加経験の有無、福祉の仕事の希望、就職の進路先の分野などであり、これらの項目のすべてのクロスの組み合わせによって、クロス集計を行った。高校生を対象とした実態調査の報告では、カイ2乗検定の結果で有意差($P < 0.05$)を示した結果のみを報告することとする。

最初のクロス集計は、周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表であるが、結果は下図のクロス表の通り(図表1-17)、周囲に福祉の仕事に就いている人が「いる」方が福祉の仕事を「希望する」ことが有意に多いという結果となった。逆に、就いていない人の場合、「希望していない」の回答が有意に多くなっている。調査対象者の中でも最も若い世代の高校生にとっては、自分の将来を考える上で、周囲の人々や環境の影響を受けやすいことが、この結果からみてとれる。この結果は、福祉人材の確保・定着を検討する際に、高校生本人のみならず、周囲の人々にもアプローチしていくことの重要性を示唆しているといえる。

図表1-17 周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事希望するか				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
周囲に福祉の仕事に就いている人がいる	n	157	214	409	401	1181
	%	13.3	18.1	34.6	34.0	100.0
周囲に福祉の仕事に就いている人がいない	n	86	206	746	952	1990
	%	4.3	10.4	37.5	47.8	100.0
合計	n	243	420	1155	1353	3171
	%	7.7	13.2	36.4	42.7	100.0

次に、周囲に福祉の仕事に就いている人の有無別に、「高齢者福祉」「障がい児・者福祉」「児童福祉」「その他」などの福祉のどの分野を希望するかを尋ねてみたが、結果は、図表1-18の通りであった。周りに福祉に就職して「いる」人の方が「高齢者福祉」「障がい児・者福祉」の分野を希望する傾向がわずかながらもあることが伺えたが、それほど顕著な傾向ということとはできなかった。

図表1-18 周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の就職分野とのクロス表

		将来の進路として、どのような分野を希望するか				合計
		高齢者	障害者	児童	その他	
周囲に福祉の仕事に就いている人がいる	n	158	44	125	30	357
	%	44.3	12.3	35.0	8.4	100.0
周囲に福祉の仕事に就いている人がいない	n	113	27	130	14	284
	%	39.8	9.5	45.8	4.9	100.0
合計	n	271	71	255	44	641
	%	42.3	11.1	39.8	6.9	100.0

福祉施設等で職場体験、ボランティア体験、交流行事、職場見学の参加経験の有無別に、将来の福祉の仕事の希望とのクロスを行ったが、その結果は、図表 1-19 に示した通りである。先に、周りに福祉に就職している人の有無とのクロス集計と同様の結果となり、「いる」と回答した人の方が「希望する」「少し希望する」と答えている割合が高く、これらの参加経験と福祉への就職希望との間に、それほど割合が高いわけではないが、因果関係があることが示唆された。これらの福祉施設等での行事に、若者が参加することは、将来的に福祉への就職希望者を増やすことにつながるといえる。

図表 1-19 福祉施設等の体験の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事希望するか				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
福祉施設で職場体験したことがある	n	195	268	524	556	1543
	%	12.6	17.4	34.0	36.0	100.0
福祉施設で職場体験したことがない	n	45	152	634	798	1629
	%	2.8	9.3	38.9	49.0	100.0
合計	n	240	420	1158	1354	3172
	%	7.6	13.2	36.5	42.7	100.0

基本属性の一つである性別に福祉の仕事に関連する質問とのクロス集計を行った結果(図表 1-20)、いくつかの結果に有意差がみられた。まず、男女別に将来の福祉の仕事に対する希望をみると、女性の方が「希望する」「少し希望する」と答えた人が有意に多かった。男性の場合、「希望する」と「少し

希望する」を足しても1割強にしかならないが、女性の場合は約3割と、男性の2.5倍以上の割合となっている。一般的に、介護福祉士、保育士、社会福祉士のような福祉職は、男性より女性の方が多くとされているが、就職前の高校生を対象とした調査においても、同じような結果が得られた。

図表 1-20 性別と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事希望するか				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
男性	n	46	124	550	684	1404
	%	3.3	8.8	39.2	48.7	100.0
女性	n	194	283	567	633	1677
	%	11.6	16.9	33.8	37.7	100.0
合計	n	240	4.7	1117	1317	3081
	%	7.8	13.2	36.3	42.7	100.0

男女別に周囲に福祉の仕事に就いている人の有無について尋ねてみると、これも先のクロス集計と同様の結果が得られた。結果は、下記の図表 1-21 のクロス表の通りである。男性よりも女性の方が「いる」と答えた人が10%弱多く、女性の方が身近なところで福祉職についている人がいる割合が高いことがわかった。

図表 1-21 性別と周囲に福祉の仕事に就いている人の有無とのクロス表

		周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人が		合計
		いる	いない	
男性	n	459	954	1413
	%	32.5	67.5	100.0
女性	n	697	985	1682
	%	41.4	58.6	100.0
合計	n	1156	1939	3095
	%	37.4	62.6	100.0

クロス集計の最後の結果として、男女別に福祉施設等での職場体験、ボランティア体験、交流行事、職場見学等の有無をみてみたが(図表 1-22)、女性の方が男性より様々な行事への参加経験の割合が有意に高いことがわかった。結果を見ると、女性の場合、半分以上が何らかの福祉関係の行事に参加していることになり、女性の福祉職に対する希望や意識の高さ、あるいは福祉職が就職の選択肢の一つになっている可能性がより高いことが示唆された。

図表 1-22 性別と福祉施設等の体験の有無とのクロス表

		福祉施設で職場体験したことが		合計
		ある	ない	
男性	n	567	846	1413
	%	40.1	59.9	100.0
女性	n	942	740	1682
	%	56.0	44.0	100.0
合計	n	1509	1586	3095
	%	48.8	51.2	100.0

1-4. 調査Ⅰのまとめ

最後に、本実態調査の対象となった若者の中でも、年齢が最も若い高校生を対象とした実態調査Ⅰの報告についてここでまとめたい。対象となった高校2年生は、自分たちがこれまで歩んできた人生の中で、この時期にこれから進学するか、あるいは就職するのかといった大きな決断を最終学年の3年生で迫られるという、ある意味人生の大きな岐路に立っているといえる。一般的に高校生の7割は進学しているので、その多くが就職を先延ばしにすることも含め、大学等に進学することになるが、それでも、大学等に進学しない約3割の高校生は、具体的な就職先の決定も含め、実社会に出ていかなければならない。そのような将来の選択肢の中に「福祉の仕事」がどれだけ加えられているのか明らかにすることを本調査の目的とした。

高校生を対象とした調査Ⅰは、兵庫県内にある県立高校(136校)および私立高校(52校)の協力を得て実施することができたが、対象となった兵庫県内の高校2年生の定員の約10分の1程度となる3,208人からの回答を得ることができ、5つある本調査の中で最も回答者の多い調査であった。

実態調査の結果を簡単にまとめると、まず、これまで福祉関連の行事等に参加したことがあると答えた人がほぼ半数いたが、実際に福祉への就職を考えると、「希望していない」と答えた人が8割近くと非常に多くなった。高校生たちが就職の際に重視することの中で上位にあげていたのは「給料・賃金」「仕事の内容・やりがい」「労働時間・休日等の労働条件」などであり、これらの点は、福祉職や介護職において最も社会的な評価が低いところであり、福祉に就職を希望しないことと労働条件等の低さなどが無関係とは必ずしも言い切れない結果であった。なお、自由記述の内容をみても、高校生たちは、福祉の仕事のやりがいと重要性については認識しているが、その反面、低賃金、過酷な労働など厳しい労働条件があることも同時に認識していることがわかる。

8割の回答者は、福祉の仕事希望しないという結果を示したが、その一方で、残りの2割の高校生は、福祉への就職の可能性やその意向を示しており、福祉への就職意向がそれほど低くはないことがわかった。自由記述の多くの記述はネガティブなことの指摘よりも、ポジティブにみる意見が多く、全体として福祉活動や行事の意義ややりがいに関する項目が多かった。「福祉の仕事」のイメージに関する項目の結果をみると、端的にそのことを表していると評価できる。福祉職が社会的に必要とされており、尊く、大事な仕事であり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持つ高校生が多く、介護を含む福祉職の仕事の必要性、重要性、将来性を実感しており、福祉の仕事そのもののイメージも決して悪いわけではなかった。その一方で、給与や休日などの労働条件に関する項目では、9割程度の高校生が否定的に観ていることがわかった。これから進学や就職を考える高校生あるい

はその保護者にとっては、繰り返しになるが、これらの福祉の仕事における労働条件や負担感、雇用形態、安定性などの福祉の仕事に関するイメージは非常に悪いという反面、そのやりがいや社会的な必要性や重要性については理解している。

このような結果から、今後、福祉教育機関や福祉現場など業界全体が上記の問題に取り組み、福祉の労働条件等を改善していくなれば、現在、福祉への就職の意向を示している若者、あるいは就職を迷っている若者は、福祉の仕事を将来の選択肢の一つに加え、そうすることにより、福祉の人材確保や定着の問題が徐々に解消につながるのではないかと期待する次第である。

最後に、クロス集計の結果から、高校生という若い世代においても、男性よりも女性の方が福祉の仕事への関心や実際の行事参加度が有意に高いことがわかったが、今後は、福祉の様々な行事やイベントなど、男性に対する、より積極的なアプローチも必要となるであろう。

4. 調査報告Ⅱ

若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査 （専門学校生）結果

2-1. 調査方法

兵庫県内の専門学校に通う生徒を調査対象として、福祉の仕事や職場に対する意識調査を実施した。調査対象者は、兵庫県内にある専門学校に通う専門学校生としたが、一口に専門学校といっても様々な種類があるので、基本的には福祉・介護系である9つの専門学校が対象先となった。調査方法は、郵送による留め置き調査法を用いたが、各校の進路指導担当の教職員に調査票を送り、後で一括して調査票を送り返してもらった。調査期間は、平成28年1月25日～平成28年2月15日であり、287人の専門学校生から回答があった（回収51.3%）。

調査項目については、添付にある調査票の通りであるが、年齢、性別などの基本属性、福祉の仕事や進路に関する項目、福祉施設等でのボランティア経験等の有無、福祉職への就職希望の有無、福祉の仕事に対するイメージ、就職を考えるとときに重視するものなどである。

2-2. 単純集計及び自由記述の結果

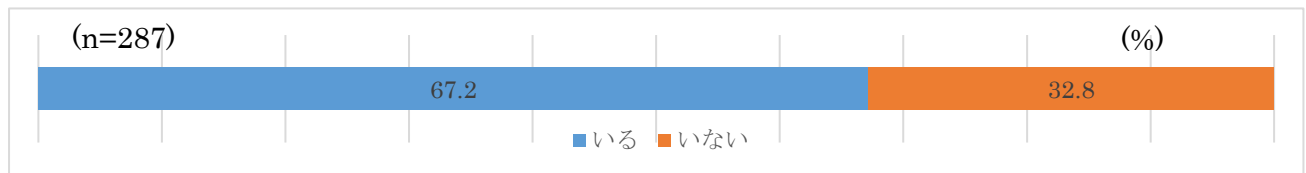
調査結果についてであるが、各質問項目に対する単純集計の結果は以下の通りである。

I 【福祉の仕事・進路について】

1) 「周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいるか」と尋ねた。

下図の図表2-1の通り、「いる」と答えた人は67.2%であり、回答者の3分の2強の専門学校生の周りに、福祉の仕事についている人がいることがわかった。

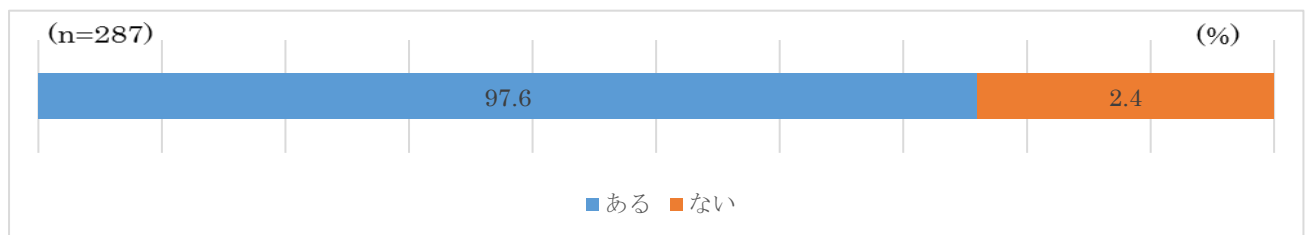
図表 2-1 周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか。



2) 「福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学（社会見学）などに参加した経験があるか」と尋ねた。

図表2-2の通り、「ある」と答えた回答者は、97.6%とほぼ全員であり、兵庫県の専門学校生のほとんどが福祉に関連する仕事やボランティア体験等に過去に参加していることがわかった。

図表 2-2 福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学（社会見学）などに参加した経験がありますか。

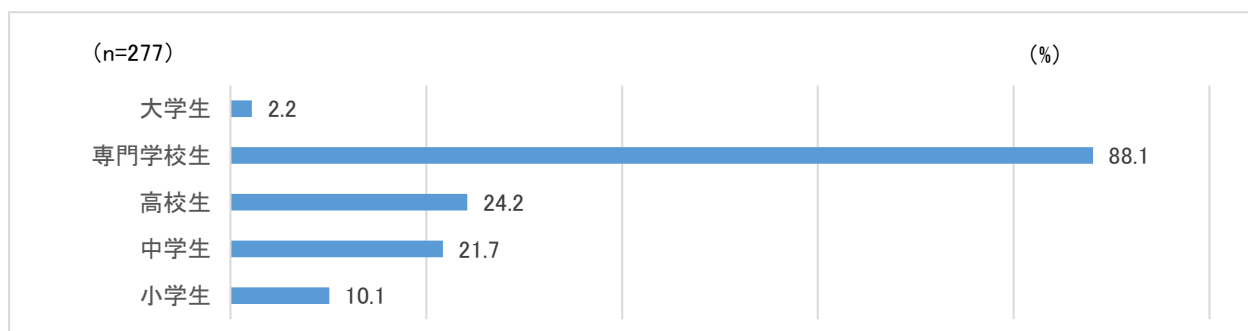


3) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「いつ参加しましたか」と尋ねた。

「小学生」が 10.1%、中学生が 21.7%、高校生が 24.2%、専門学校が 88.1%となっており、専門学校に入ってから福祉の仕事や行事への参加、ボランティア経験をしている回答者が最も多い結果となった

(図表 2-3)

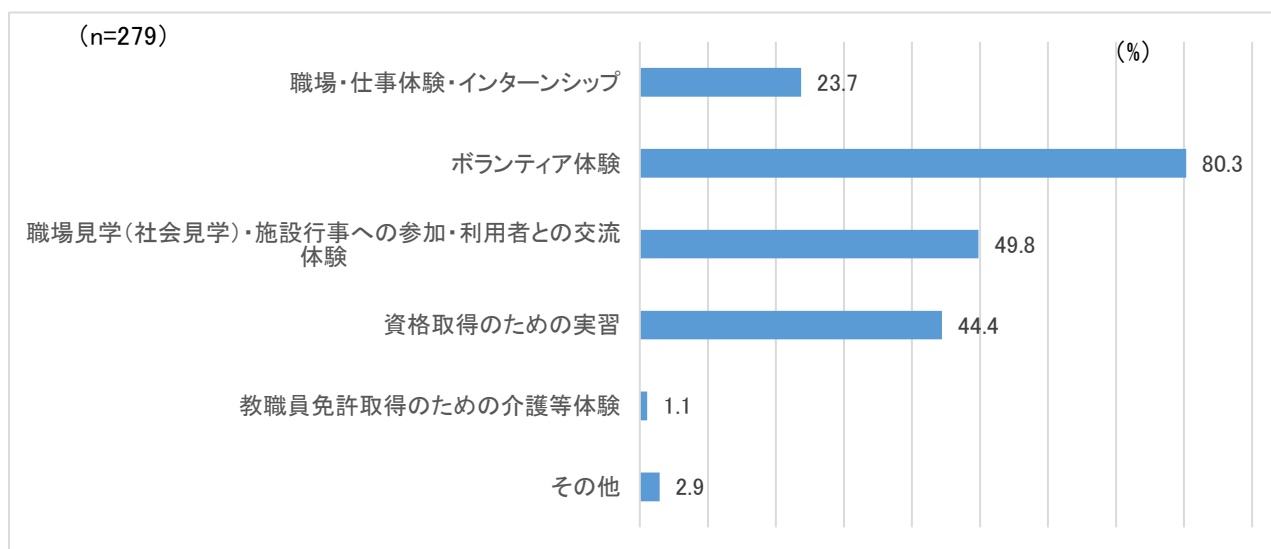
図表 2-3 (2) で「ある」と回答した中で、いつ参加しましたか。(複数回答)



4) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「どのような経験をしましたか」と具体的な体験内容を尋ねた。

図表 2-4 の通りの結果となった。最も多かったのは、「ボランティア体験」(80.3%)、次に「職場見学(社会見学)・施設行事への参加・利用者との交流体験」(49.8%)、そして「資格取得のための実習」(44.4%)と続き、これら3つの体験内容がほとんどを占めていた。

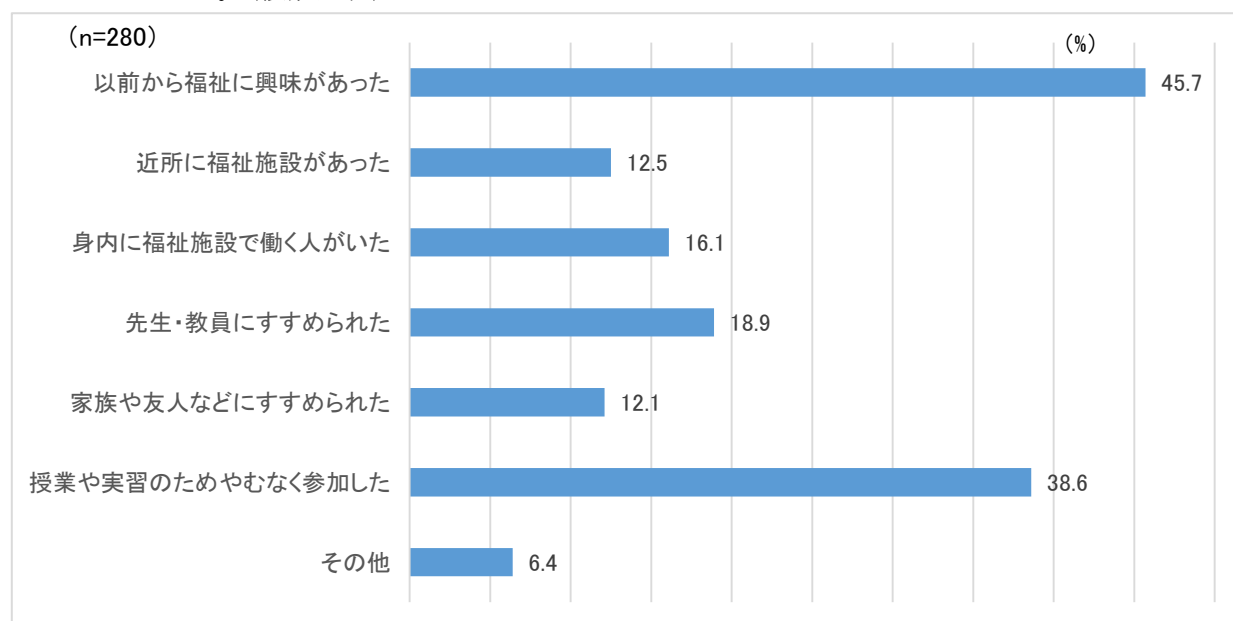
図表 2-4 (2) で「ある」と回答した中で、どのような経験をしましたか。(複数回答)



5) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「参加を決めた理由でふさわしいものを選んでください」と尋ねた。

結果は図表 2-5 の通り、「以前から福祉に興味があった」(45.7%)という回答が最も多かった。次に多かったのが「授業や実習のためやむなく参加した」(38.6%)であった。専門学校生の場合は、以前から福祉に興味を持っていて参加を決めたという人が多いことがわかった。

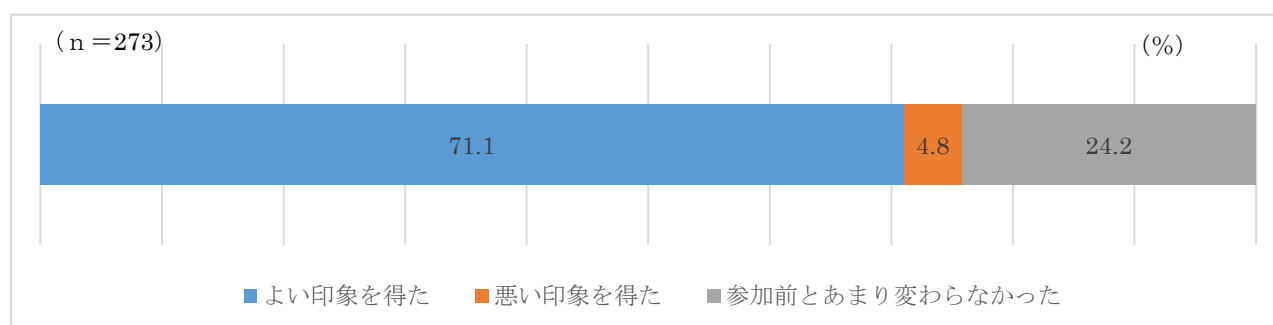
図表 2-5 (2) で「ある」と回答した中で、参加を決めた理由でふさわしいものをすべて選んでください。(複数回答)



6) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「参加した後の福祉施設への印象の変化があったかどうか」を尋ねた。

70%以上の回答者が「よい印象を得た」と回答しており、「悪い印象を得た」と答えた専門学校生は、非常に少なく 5%に満たなかった。このことから、福祉活動への参加や福祉施設への見学は、専門学校生のような若者たちに非常に効果があることが示唆された(図表 2-6)。

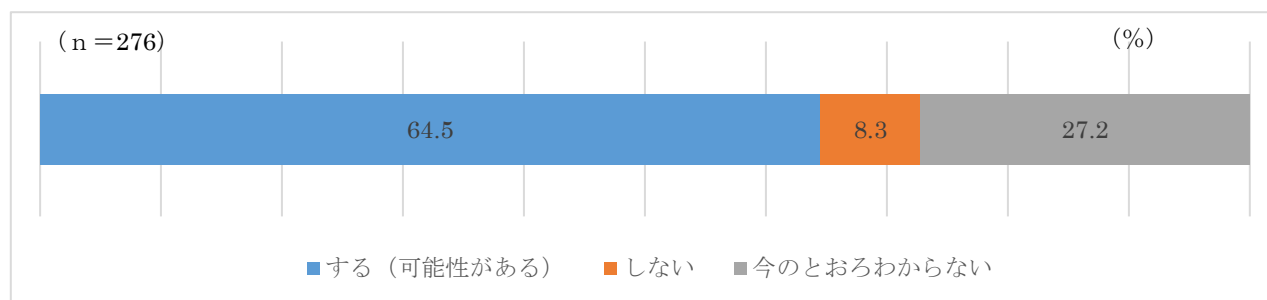
図表 2-6 (2) で「ある」と回答した中で、参加した後の福祉施設への印象の変化はありましたか。



7) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「これからの就職選択に影響すると思うかどうか」を尋ねた。

図表 2-7 のように、「する(可能性がある)」は 64.5%となり、「しない」と答えた回答者はわずか 8.3%であった。一方で「今のところわからない」も 27.2%あり、3 割近くは福祉への活動や施設見学が就職選択に直接的な影響を与えているとは言い難い結果となった。

図表 2-7 (2) で「ある」と回答した中で、これからの就職選択に影響すると思いますか。



上記を選択した理由を記述してもらったが、代表的な意見は以下の通りである。

- 職員の態度が悪かった
- 利用者の尊厳が守られていない現状があった
- 汚い、くさい、きつい、セクハラと思えることなど
- 職員の人数が足りていないため、おろそかになっていた
- 職員のレベルに差がありすぎる
- 今まで経験がなかったので勉強になった
- 職員の人たちの感じが良かった
- 普段経験できないことをやった
- 明るく楽しんでボランティアを行えたため
- 社会の中にあたりまえに福祉があることがわかった
- 職員さんが優しく利用者と接している感じもよかった
- 地域とのつながりが見えた気がしたため
- 施設がきれいで利用者に対しての対応がよかったから
- 現場を見たり、体験したりしたことはプラスになった
- 思っていたよりも職員が楽しそうに働いていた
- 実際に働く人たちや利用者の方を目で見ることができたから
- とてもやりがいがあると思った
- 人手不足・教育不足による現場の実態
- 自分が目指している介護観が固まった
- 今まで見たことないし考えたこともない世界だった。良い点、悪い点どちらもあるが、よい印象を持った部分が多かった
- 想像していた通りだった

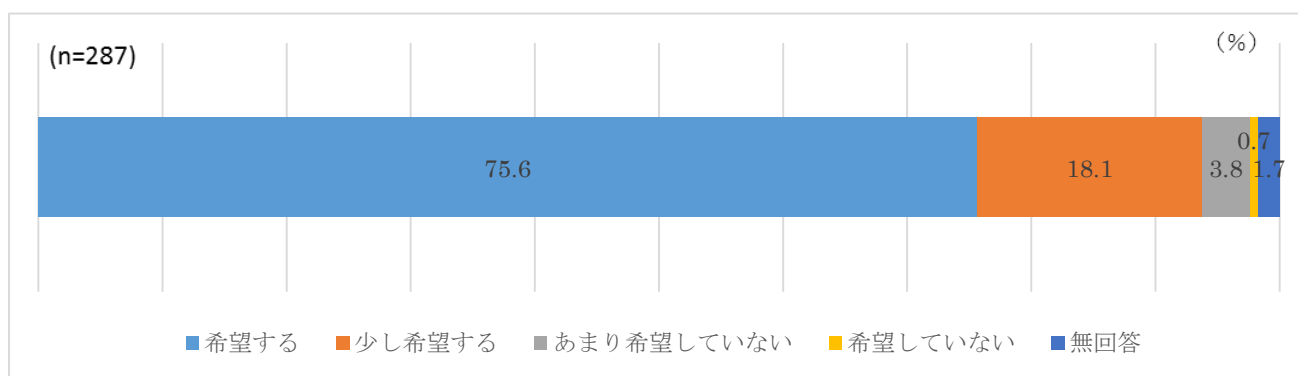
- 介護に関する知識を学べ、施設の様子を知ることができたため
- 施設によってはすごく内装がきれいだったり、教育に力を入れていたりと様々な努力が見えた
- 具体的な施設の雰囲気を感ずることができた
- 見た目ではわからない事もあった
- 施設の雰囲気を情報源からだけでなく、身をもって知れたから

高校生調査でも同じような自由記述があったが、高校生の自由記述においては、どちらかというとも福祉施設に対する悪い印象の記述が少なく、ポジティブな記述の方が多かった。専門学校生の自由記述をみると、全体的には、労働条件の悪さや人手不足の現状を記述したり、職員の態度の悪さを指摘したりするなど、福祉施設に対して手厳しい一面がみられた。これは、実習や体験学習等を通じて、実際の現場をより体験したり、身近に接したりする機会が増えており、たとえ、福祉や介護の分野に就職するにしても、あるいは福祉の仕事をしていないにしても、福祉業界の仕事には労働環境上の課題があることを承知の上で、決めているかもしれないし、それによって断念するということがあるのかもしれない。いずれにせよ、福祉・介護系を主とした専門学校生が主たる対象者ということで、専門領域のない一般の高校生よりは、福祉の仕事より身近で現実的な問題として捉えている可能性は否定できない。その一方で、厳しい労働環境の現状をみても、「やりがいがある」「楽しそうに働いていた」などと肯定的に捉えている専門学校生の意見も半数近くあった。

8)「将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか」という福祉への就職意向を尋ねた。

図表 2-8 の通り、「希望する」(75.6%)と「少し希望する」(18.1%)のように肯定的に回答した専門学校生が 93.7%と、実に 9 割を超えており、専門学校生は卒業前に既に福祉への就職を希望していることがわかった。なお、この結果は、専門学校生の専門領域が福祉とそれ以外で、9 対 1 の割合になっているが、ほぼそれと同じことになる。

図表 2-8 将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか。



上記を選択した理由を記述してもらったが、代表的な意見は以下の通りである。

- 志望動機がはっきりと言えたりする
- 施設によって変わってくると思うため
- 資格を習得しようと考えたため
- これがきっかけに自分の行きたいほうが決まるから

- 今後はこのような体験を続けてから判断する
- まだどこに就職しようとしているのかを決めていないため
- 実際の現場を見ることは今後の就職の選択の一つになる
- 自分が今後かわりを持っていく中での目標となる
- 福祉施設に就職したいと思っているから
- 介護・福祉関係で働こうと思っているから
- 利用者と関わる中で学びがあるから
- 自分に合った職場を考える契機になったから
- 施設に行ってみて良い印象を得たから
- 私もうれしいと感じて頂けるよう働きたいと感じたから
- 専門の知識を活かしたい
- ハード面、ソフト面を知ることによって具体的なイメージがしやすくなるため
- 今現在、介護福祉士の勉強を行っているため
- 介護の専門学校に入っているから
- 人のために役立つ仕事をしたいから
- 自分自身の経験になる
- 普段見ない部分を見ることができたから
- 実際の現場を見るのと見ないのとでは違う
- 実際考えが変わったことがあるから
- 施設を選ぶ基準にはなった
- 実際にみることによって選択する幅が増えるから
- 職場の雰囲気や方針に触れることができるから
- 高齢者との関わりが好きでボランティアの際、立派な介護福祉士がいたから
- 施設によって特徴が違うので、就職先のイメージができるし、ボランティアで得るものは大きいので、良い経験につながる
- この施設では働きたくないと思った
- 良いところも悪いところも見たから
- 日常にない経験であったため
- 1年後なのでわからない

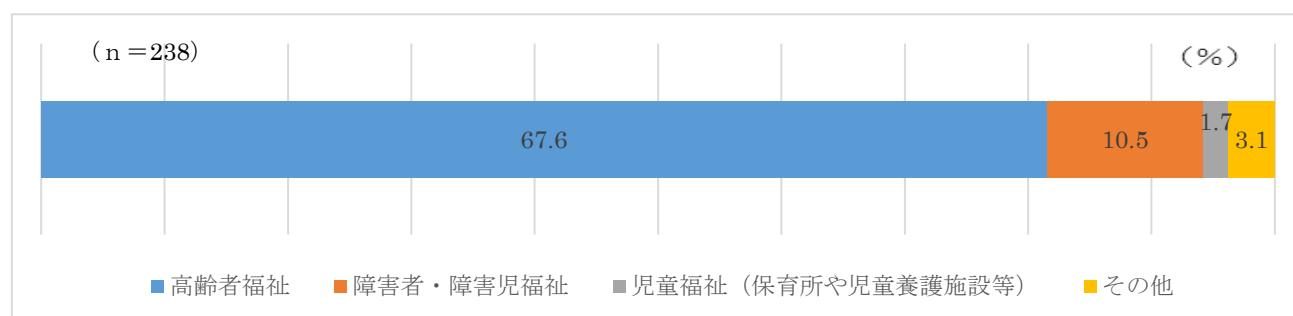
この自由記述については、高校生の場合は、どちらかというと、「就く仕事がきまっている」「福祉関係に進む気がない」「あまり興味をもっていない」「絶対にやらない」「賃金を考えてします」など、実際の就職・進学の影響については、福祉を仕事として選ばないという意味の否定的な回答を示す記述が非常に多かったが、専門学校生の場合、「希望します」と答えた回答者の中には、「今後かわりを持っていく中での目標となる」「福祉施設に就職したいと思っているから」「介護・福祉関係で働こうと思っているから」「利用者と関わる中で学びがあるから」などと、非常に肯定的に記述していて、そのような肯定的な回答が自由記述の7割以上を占めた。将来、福祉の仕事に就く希望や意志を表している回答者の気持ちがそのまま記述につながったとも考えられる。その一方で、「どうなるかわからな

い」「良いところも悪いところもみたから」や「この施設では働きたくないと思った」などと、意向が決まっていない回答者や否定的に捉えている回答者の記述も若干ながらみられた。

9) 福祉の仕事を「希望している」あるいは「少し希望している」と回答した専門学校生に対して、「どのような分野を希望しているか」を尋ねた。

「高齢者福祉」が最も多く、67.6%であり、次に多いのが「障害者・障害児福祉」(10.5%)であり、ほぼ7割近くが高齢者福祉を希望する結果となっている(図表2-9)。

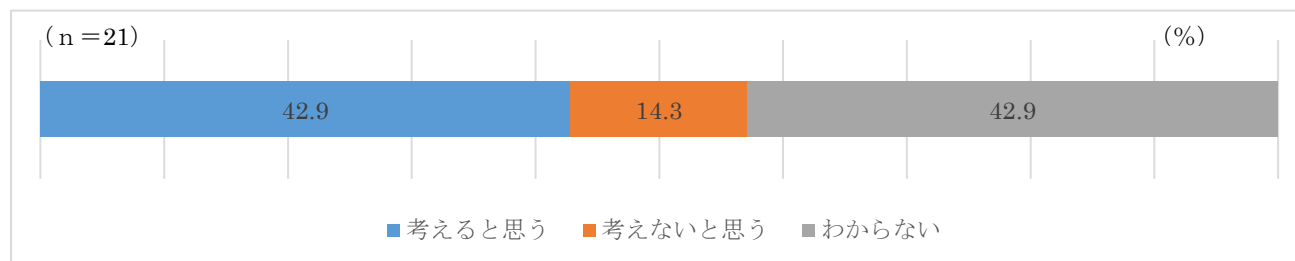
図表2-9 (8)で「希望している」「少し希望している」と回答した中で、どのような分野(仕事)を希望していますか。



10) 次に、先の質問項目で「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、「今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えられますか」と尋ねた。

結果は、下図の図表2-10の通り、「考えると思う」と回答した専門学校生は42.9%であり、「考えないと思う」は14.3%で、「わからない」も(42.9%)と、環境や心境の変化によって、就職の希望が大きく変化する可能性があることがわかった。

図表2-10 (8)で「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えられますか。



1 1)「福祉の仕事」(介護の仕事も含む)に関するイメージについて尋ねた。

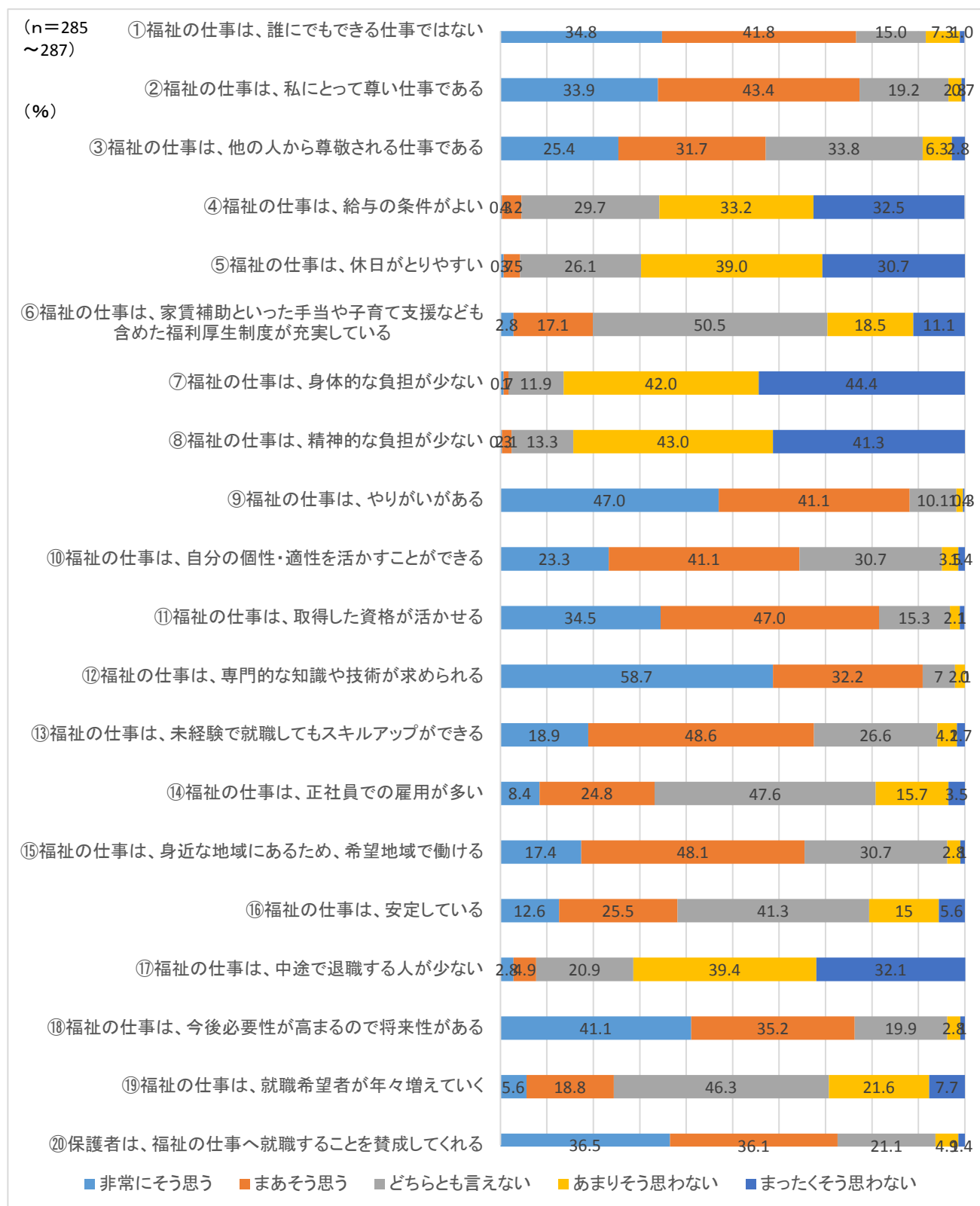
具体的な項目としては、図表 2-11 にあるように 20 の項目を取り上げたが、それらは福祉職の労働条件に関する項目、負担感に関する項目、やりがい、資格、能力に関する項目、社会的な評価に関する項目などである。

調査対象となった専門学校生の「福祉の仕事」についての特徴的なイメージとしては、まず、項目⑨、⑫の質問の結果から、福祉の仕事は専門的な知識や技術が求められる仕事であり、やりがいがあると答えている生徒が「非常にそう思う」、「まあそう思う」を合わせると 9 割を超えており、福祉職が専門性を求められる仕事であり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持っていることがわかる。①、②、⑪などの質問の結果からは、福祉の仕事は取得した資格が活かせ、誰にでもできる仕事ではないと同時に、自分にとって尊い仕事であるという回答者が 7 割から 8 割を占めており、福祉職への非常に肯定的な姿勢が見られる。

その一方で、項目⑦、⑧にみられる身体的負担や精神的負担については否定的な見方の割合が多く、④、⑤などの給与や休日などの労働条件に関する項目については否定的な回答の割合が多かった。⑭の雇用形態に関する項目、⑯の仕事の安定性、⑰の中途退職の多さに関する項目については、肯定的な回答はかなり低かった。特に、仕事の負担感に関する項目では、8 割程度の専門学校生が否定的にみていることがわかった。福祉の仕事は必要性が高まるので将来性があるとの回答が 7 割以上を超えている反面、就職希望者が年々増えていくと回答した者は非常に少なく 2 割程度にとどまっている。自分が福祉職に就くことを保護者が賛成してくれるかどうかについては賛成してくれると回答した者が 6 割を超えており、親の理解も得られると考えていることがわかる。

したがって、専門学校生の場合は、福祉職に対する肯定的な見方が多く潜在的な労働力として期待できるものの、負担感や労働条件についてはマイナスのイメージを持っていることがわかった。これらのことから、専門的な知識や技術を修得して福祉職を目指す専門学校生の場合でも仕事の身体的・精神的・経済的負担感の大きさが不安材料になっていることがみて取れる。

図表 2-11 あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～②①のそれぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。注) 以下の項目でいう「福祉の仕事」には「介護の仕事」も含まれます。



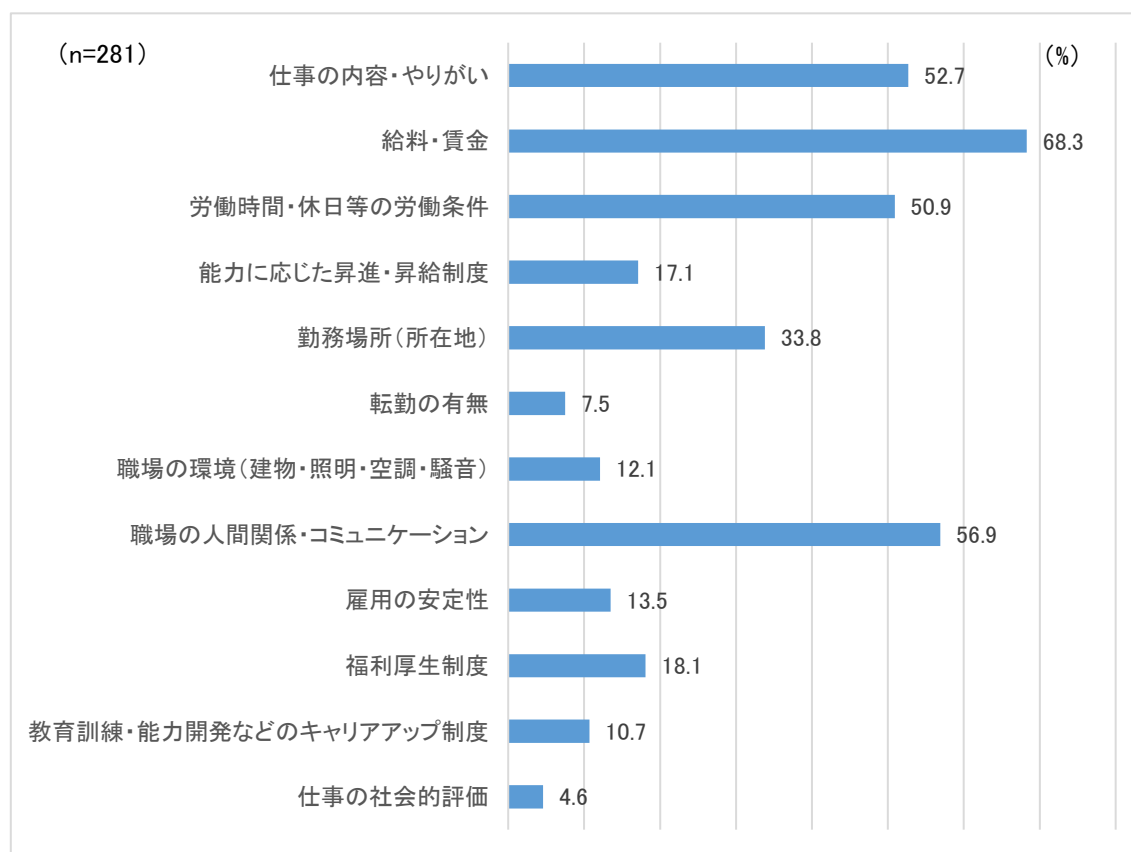
Ⅱ 【就職活動について】

調査対象者にこれからの就職活動一般に関する質問を行い、結果は下記の通りである。

1 2) 「仕事を決めるにあたり重視することは何か（あてはまるものを3つまで選択）について尋ねた。

結果は図表 2-12 の通り、最も多かったのは、「給料・賃金」(68.3%) で、次に「職場の人間関係・コミュニケーション」(56.9%)、そして、「仕事の内容・やりがい」(52.7%) と続いた。給与や休日、労働時間などの労働条件関係については、どのような職種に就こうとも、重視している仕事の条件であることがわかった。ただし、重視しているのは給料・賃金や労働条件といったものだけでなく、職場の人間関係・コミュニケーションや仕事の内容ややりがいも同じように重要だと考えているという結果となった。

図表 2-12 仕事（就職先）を決めるにあたり重視することは何ですか。以下のうち当てはまるものに3つまで○をつけてください。

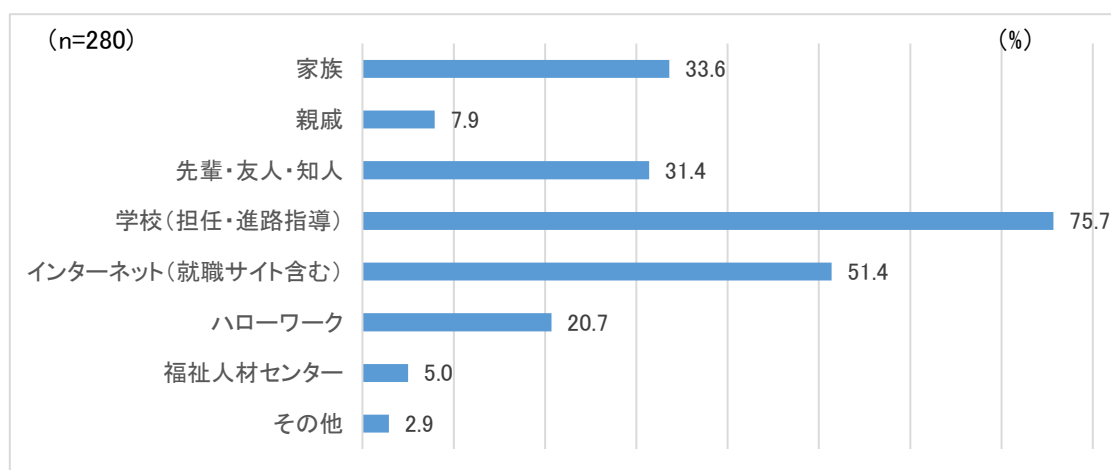


1 3) 「就職に関する情報源について、どこから情報を得ていますか」と尋ねた。

最も回答が多かったのが「学校（担任・進路指導）」で 75.7% となっており、専門学校生の場合は学校からの情報が最も効果的であることがわかった。2 番目に多いのは「インターネット」で 51.4% となり最近の若者の情報源として、インターネットや SNS などが手軽に利用されており、独自に情報を入手し

ていることがわかる。その他は「家族」、「先輩・友人・知人」、「ハローワーク」と続いている（図表 2-13）。

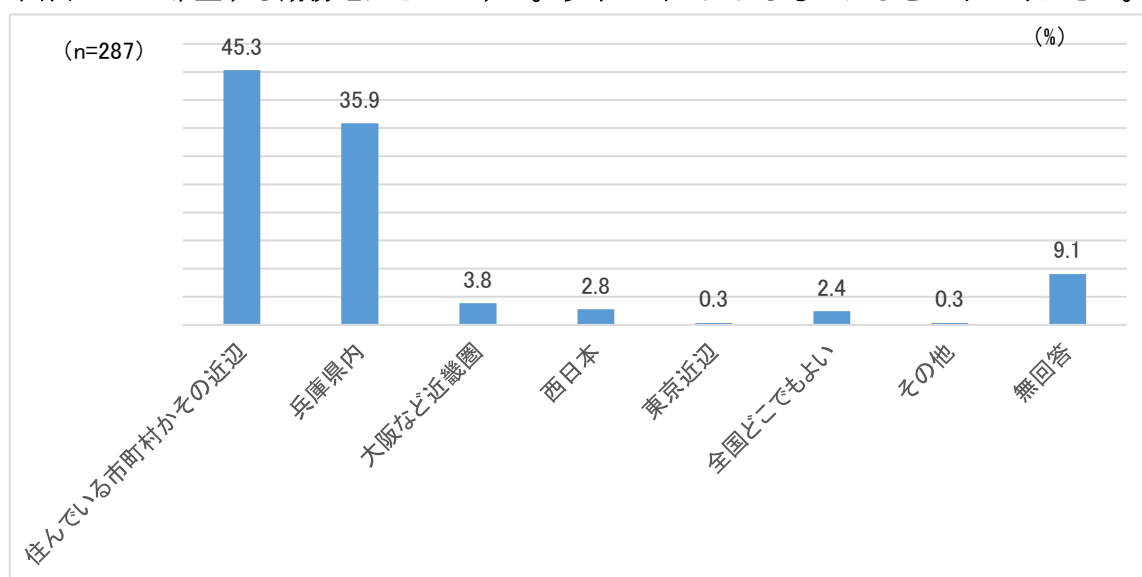
図表 2-13 就職に関する情報について、どこから情報を得ていますか（得ようと思いますか）。以下の当てはまるものにすべて○をつけてください。（複数回答）



1 4) 「希望する勤務地はどこですか」と尋ねた。

結果は、図表 2-14 の通りである。「住んでいる市町村かその近辺」が 45.3%で最も多く、次いで学校のある「兵庫県内」(35.9%) で2つを合わせて8割を占めている。勤務地としては自宅等から通勤できる近辺を希望している専門学校生が多く、近辺でなくても兵庫県内という希望を合わせると、福祉職の勤務地は地元志向であることがわかった。

図表 2-14 希望する勤務地はどこですか。以下の当てはまるものに○をつけてください。



1 5) 就職活動をするうえで困っていること(困ったこと)は何ですか。(自由記述)

就職活動をするうえで困っていること(困ったこと)について自由記述形式で回答してもらった。それらの具体的かつ代表的な回答は以下の通りである。

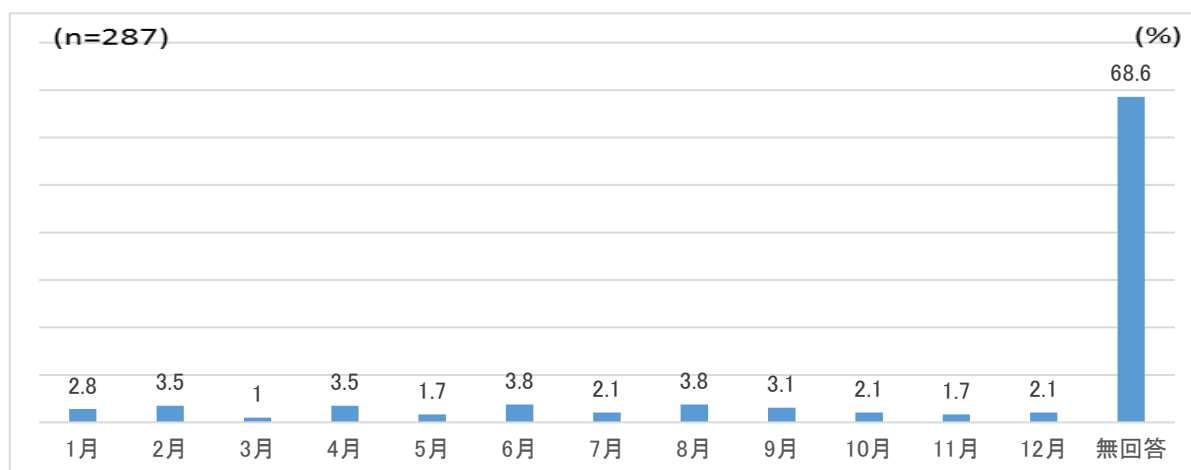
- 安心して就職活動ができる状況で行いたかった
- 処遇改善手当に関する記載が無く、わからないことがあった
- 勤務場所や給料など一人暮らしでやってけるかどうか心配
- 介護職員が少ない。給料が年々減っている
- 職場での人間関係、給料
- 学校が協力的ではない
- 65歳年金受給スタートするまで普通に仕事をさせてほしい。年齢でハローワークの窓口ですでに面接にも就業訓練にも行かせてもらえないのは困る
- 実習が2~3月に入ってしまったため就活できない
- まだ就職活動を具体的にしていないので、なんとも言えないが、自分に合った就職先が見つかるかどうかの不安は大きい
- 就職先の内実がよくわからない場合がある
- 実際に働いてみないと施設のよしあしはわからない
- 施設で行われていない介護の内容で、利用者のことを思うこともせず、自己満足している、介助を行っている施設のところに行かないこと。自分と介護の理念が合い、利用者の方のことを考えることがよくできていて、情報交換ができていて、NGなことが少ないところを選ぶ
- 志望動機が書けるか不安。企業研究をどのように進めたらいいかわからない
- 夜勤ができなければ、正社員での雇用は難しい
- 書いてある条件と異なる施設があったこと
- 人間関係ややりがいについてどのようなものが困っていた
- 自身の住む地域と学校の担当地域が離れており、情報が少ないため、立地と業務内容を考え、自分にとって合うところを見つけるのが大変だった。幅広い地域の現状の情報が欲しかった
- 施設を訪問する中でどの施設が良いのか迷ってしまい、面接をする期間が遅くなってしまった
- 自分の年齢で求められる経験や知識などをどの程度事業所ごとに考慮されるかがわかりにくい。
- ネットやパンフレットだけでは施設概要がわかりづらい
- まだ就職活動はしていないが、近辺の福祉施設のボランティアがもっとあれば、就職のときに判断基準ができるからしてほしい。求人票だけではわからない情報を知りたい
- 数ある施設の中で、自分に合った施設を選ぶのが大変
- 面接、グループ討議に困った

就職活動一般に対する困りごとに関する自由記述であるので、質問内容と記述内容をみると、必ずしも福祉職や介護職を意識した就職活動に関するものとはなっていないが、それでも福祉・介護系の専門学生が9割という本調査の対象者の属性が示す通り、介護職や福祉職を意識したと思われる内容の記述が数多く見受けられた。記述の中には、福祉専門職としての業務内容に関する非常に具体的なものもみられるが、全体としては、「処遇改善手当に関する記載が無く、わからないことがあった」「ネットやパ

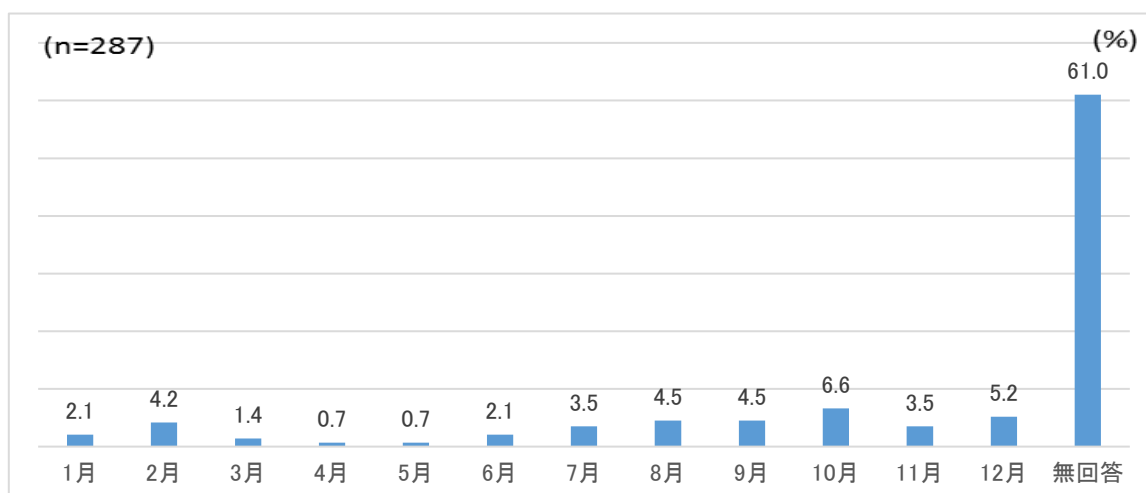
ンフレットだけでは施設概要がわかりづらい」「書いてある条件と異なる施設があったこと」「就職先の内実がよくわからない場合がある」など、就活を行う学生にとって就職を決める際に具体的な情報源となる求人情報や求人票、労働条件、施設概要などの基本的な情報が必要であるのにもかかわらず、それらが学生たちにとっては十分ではなかったり、不明確であるとの記述がそれなりにみられた。福祉への就職意向を示し、就職活動を行っている学生がこれらの問題にぶつかり、福祉への就職をあきらめざるを得ないことがあるならば、それは非常に残念なことである。就職先となる福祉現場も含めて、福祉業界全体で、このような情報収集に関するホームページなど、より一層の充実が求められるであろう。

1 6) 専門学校生の場合、就職を開始する時期また採用試験を受ける時期として、特定の月が多いというような結果はみられなかった(図表 2-15-1、図表 2-15-2、図表 2-15-3)。

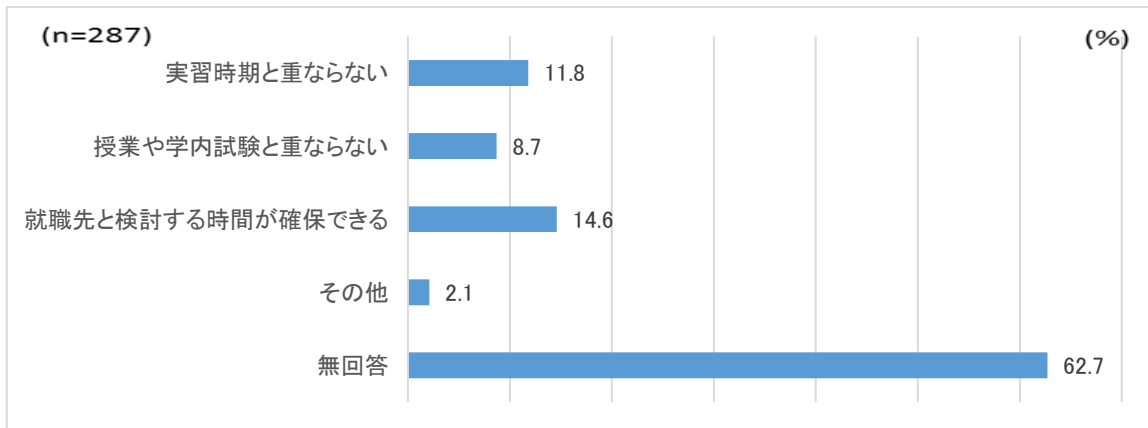
図表 2-15-1 就職に向けて活動を開始した時期、開始しようとする時期はいつごろですか。



図表 2-15-2 採用試験を受ける時期として望ましいと思う時期はいつごろですか。



図表 2-15-3 その理由は？



Ⅲ 【基本的属性】

最後に基本属性を訪ねた結果は以下の通りである。

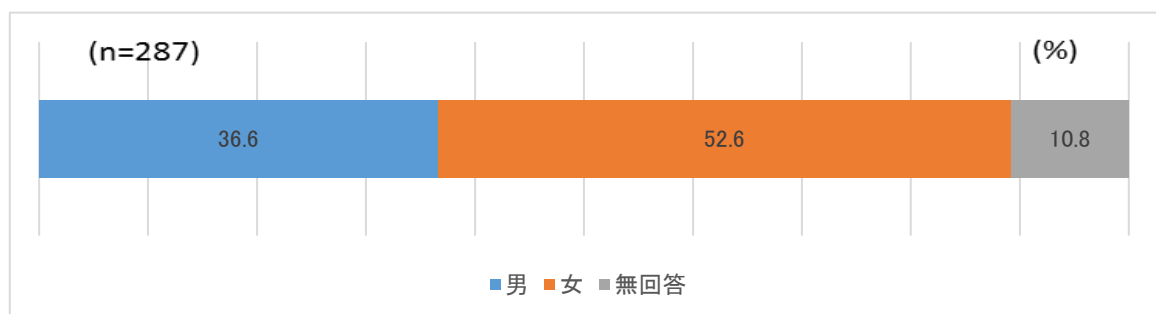
1 8) 平均年齢＝24.3 歳、標準偏差＝9.6 歳、最大値＝60 歳で、最小値＝17 歳となっている（図表 2-16）。

図表 2-16 回答者の年齢



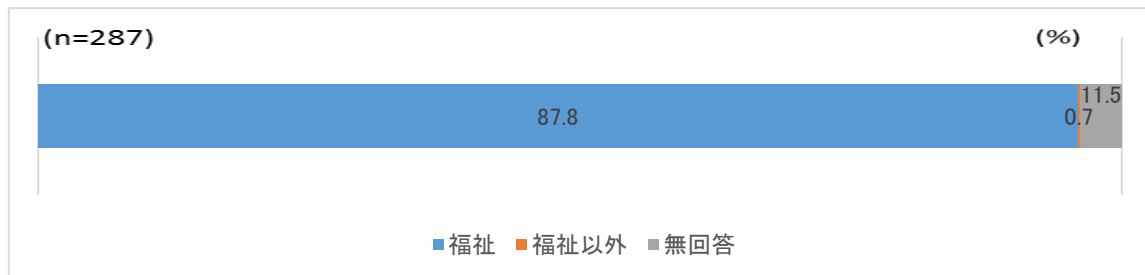
1 9) 専門学校の回答者の性別は男性が 4 割、女性が 5 割強、残りは無回答であった（図表 2-17）。

図表 2-17 回答者の性別



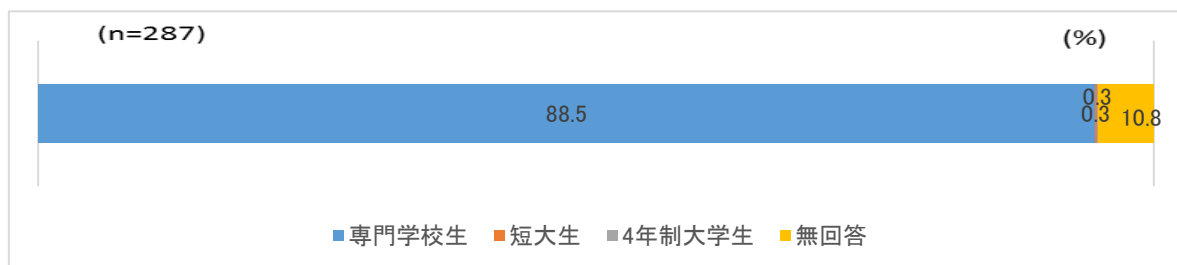
20) 専門学校生の専攻は福祉が9割であった(図表2-18)。

図表 2-18 回答者の専攻



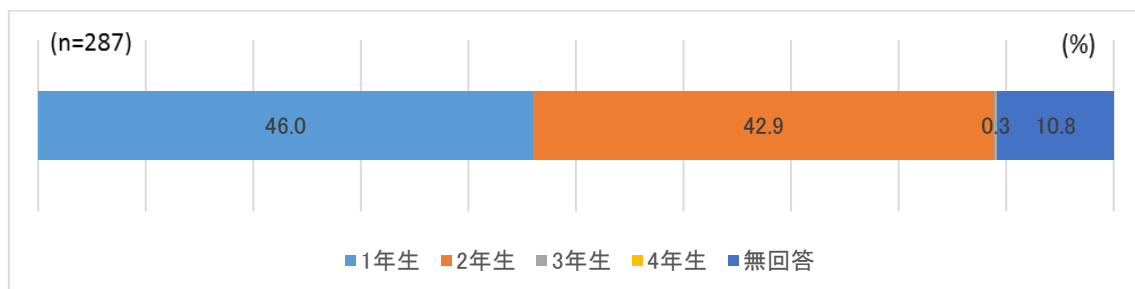
21) 回答者の属性は9割近くが専門学校生であった(図表2-19)。

図表 2-19 回答者の属性



22) 専門学校の回答者は1年生が最も多く46.0%、次いで2年生の42.9%であった(図表2-20)。

図表 2-20 回答者の学年



2-3. クロス集計の結果

高校生調査と同様、専門学校生を対象とした調査においても、設定した調査項目の多くが複数回答であったために、2つの単数回答の項目をクロスさせて、その記述的特徴を示し、統計的な有意差を検証(カイ2乗検定)することができるクロス集計を、それほど多く実施することができなかった。これらの3つの若者の実態調査に共通して実施できたクロス集計は、まず、基本属性である性別、周りに福祉の仕事に就いている人の有無、福祉行事への参加経験の有無、福祉の仕事の希望、就職の進路先の分野な

どであり、これらの項目のすべてのクロス組み合わせによって、クロス集計を実施した。ここでも、カイ 2 乗検定の結果で有意差($P<0.05$)を示した結果のみを報告することとする。

カイ 2 乗検定の結果、統計的に有意な結果が得られたクロス集計は、わずか 1 つであった。それは、周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス集計であるが、結果は図表 2-21 の通りであった。周囲に福祉の仕事に就いている人が「いる」方が福祉の仕事に「希望する」ことが有意に多いという結果であった。高校生調査でも同じクロス集計で同様の結果が得られたが、高校生データよりも、周りに福祉に就職している人がいようがいまいが、就職を希望する人の割合が高く、「希望する」「少し希望する」を加算すると、いずれも希望する割合が 95.0%に達する。専門職への就職を意識した専門学校生が対象であるので、当然の結果ともいえるかもしれないが、この点では、高校生とは異なる興味深い結果が得られた。

図表 2-21 周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事希望するの				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
周囲に福祉の仕事に就いているが	n	151	31	8	1	191
	%	79.1	16.2	4.2	0.5	100.0
周囲に福祉の仕事に就いていないが	n	66	21	3	1	91
	%	72.5	23.1	3.3	1.1	100.0
合計	n	217	52	11	2	282
	%	77.0	18.4	3.9	0.7	100.0

2-4. 調査Ⅱのまとめ

専門学校生を調査対象とした調査Ⅱであるが、対象者の属性からわかるように、回答者のほとんどが福祉・介護系の専門学校生であったので、本調査Ⅱの結果をもって、兵庫県内にある専門学校生の代表的な回答とするのは難しい面があるのは否めない。その一方では、福祉・介護系の専門学校生が彼らの就職先である社会福祉現場を学生の立場でどのように見て、考え、意識しているのか、その実態を把握することができるので、就職先となる現場にとっては、今後の福祉人材の確保・定着に向けて、貴重な意見や考える基礎的な資料とはなり得る。

実態調査の結果を簡単にまとめると、まず、当然の結果ともいえるが、周りに福祉の仕事に就いた人がいると答えた人が約 7 割、福祉関連の行事等に参加したことがあると答えた人が 9 割 5 分以上と、高校生の結果より、非常に割合が高いという結果となった。また、福祉・介護系の専門学校生ということで、行事等に参加し、実際に福祉施設等を訪問し、現場に足を運んだことが将来の就職活動に影響する割合も高かった。

ただし、若干ではあるが、気になる結果もみられた。調査対象者の 9 割が福祉・介護系の専門学校生であるが、彼らの就職先として福祉・介護職を希望しているのが 7 割 5 分程度と、対象者の属性の母数に比べて、1 割 5 分近く希望者が少なくなっている。実際に専門学校に入り、見学や実習等で現場を訪問し、現場の厳しさと自分自身の適性を考慮するなど、現実的な判断をしているとも捉えることができるが、これについては、専門学校サイドも何らかの対応した方がよいかもしれない。それは自由記述の内容にも如実に表われている。どの自由記述をみても、熱心で肯定的な記述が確かに多いが、その反面、福祉現場の現実をしっかりと見つめ、シビアで厳しい指摘がなされていることもあった。特に、賃金、

労働条件、職場の人間関係など、労働環境に関連する項目については、一步突っ込んだ厳しい指摘がなされている感は否めない。

そのことは、質問 1 1) の福祉のイメージに関する 20 項目の質問の結果をみてもよくわかる。身体的負担や精神的負担、給与や休日などの労働条件に関する項目については否定的な回答が数多くみられたのである。ただし、自分が福祉職に就くことを保護者が賛成してくれるかどうかについては、賛成してくれると回答した者が 6 割を超えていた。

以上のように、専門学校生の場合は、福祉職に対する肯定的な見方が多く潜在的な労働力として期待できるものの、負担感や労働条件についてはマイナスのイメージを持っていることがわかった。また、専門的な知識や技術を修得して福祉職を目指す専門学校生の場合でも仕事の身体的・精神的負担感の大きさが不安材料になっていることがみてとれる。

それでは、調査Ⅱの結果全体から得られる示唆は何であろうか？将来、自身が福祉分野に就職する可能性の高い専門学校生サイドで考えると、単に福祉現場や周りに厳しい指摘をしたり、就職活動を受け身的に捉えたりするだけではなく、「このような情報を学生は求めている」などと、より積極的な就職への姿勢やアピールを示すことが必要かもしれない。次に、福祉・介護系の専門学校生を抱える福祉教育機関が彼らの学生のキャリアアップや就職活動支援に一層真剣に取り組む必要があることは言うまでもないことであろう。最後の社会福祉施設など、就職先として人を受け入れる福祉業界全体は、今回の専門学校生の自由記述で数多く見られたように、一層、雇用に関する情報を明確にし、そしてオープンにすることからスタートする必要があるのではなかろうか。そういう地道な努力により、現在、福祉への就職の意向を示している若者、あるいは就職を迷っている若者は、福祉の仕事を将来の選択肢の一つに加え、そうすることにより、福祉の人材確保や定着の問題が徐々に解消していくのではないかと期待する次第である。

5. 調査報告Ⅲ

若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査 （短大生・4年制大学生）結果

3-1. 調査方法

若者を対象とした最後の調査についてであるが、兵庫県内にある短大・4年制大学としたが、具体的には、兵庫県内の37カ所の国立、公立、私立大学のうち、調査協力を得られることとなった24カ所の4年制大学、さらに、17カ所の私立短期大学のうち、協力が得られることとなった15カ所の短大の39カ所が対象先となった。それらの短大・4年制大学に通う学生を調査対象として、福祉の仕事や職場に対する意識調査を実施した。調査対象者は、兵庫県内の短大および4年制大学に通う学生2,122人とした。なお、対象者の選定については、兵庫県社会福祉協議会から兵庫県内にある短大・4年制大学のキャリア部門に問い合わせをし、調査協力の了承を得られた短大・4年生大学とその学校に所属する学生を対象とした。調査方法は、郵送による留め置き調査法を用いたが、各校の進路指導担当の教職員に調査票を送り、後で一括して調査票を送り返してもらった。なお、送付した調査票数については、事前に各短大・4年制大学の定員に関する情報があつたが、その定員の10分の1程度とした。調査期間は、平成28年1月25日～平成28年2月15日であり、408人の短大・4年制大学生から回答があつた（回収率19.2%）。なお、基本的には、各短大・大学のキャリア部門にお願いしたこともあり、何学部何学科に所属する学生であるのか、あるいは福祉職志向かどうかなど、個人情報に関連することにもなり得るので、対象者の属性の詳細なデータは取っていない。ただし、関西学院大学の調査対象者については、本実態調査委員会のメンバーである関西学院大学人間福祉学部の大和・石川の両教授から協力を得られたこともあり、人間福祉学部に所属する学生を対象とした。

調査項目については、添付にある調査票の通りであるが、年齢、性別などの基本属性、福祉の仕事や進路に関する項目、福祉施設等でのボランティア経験等の有無、福祉職への就職希望の有無、福祉の仕事に対するイメージ、就職を考えるとときに重視するものなどである。

3-2. 単純集計及び自由記述の結果

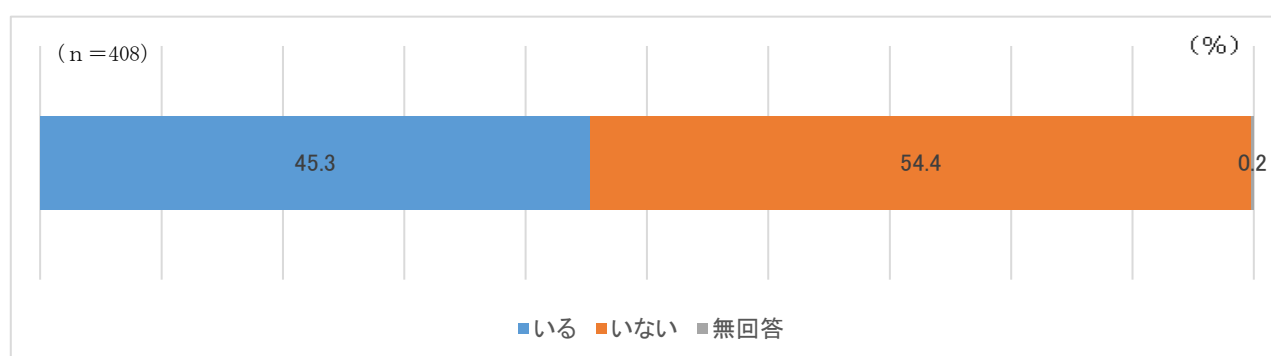
調査結果については、各質問項目に対する単純集計の結果は以下の通りである。

I 【福祉の仕事・進路について】

1) 福祉の仕事・進路に関する質問について、「周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか」と尋ねた。

図表3-1の通り、「いる」と答えた人は45.3%であり、回答者の約半数の周りに、福祉の仕事についている人がいることがわかった。

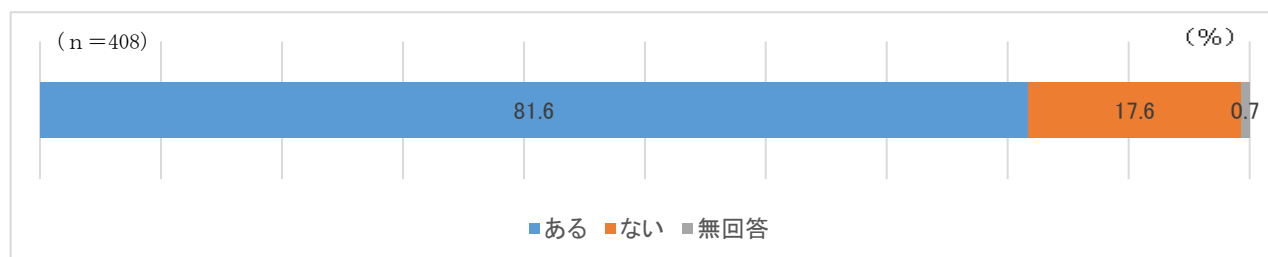
図表3-1 周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか。



2)「福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学（社会見学）などに参加した経験がありますか」と尋ねた。

結果は図表 3-2 の通り、「ある」と答えた回答者は、81.6%で、兵庫県内の短大生・4年制大学生の多くが福祉に関連する仕事やボランティア体験等に過去に参加していることがわかった。

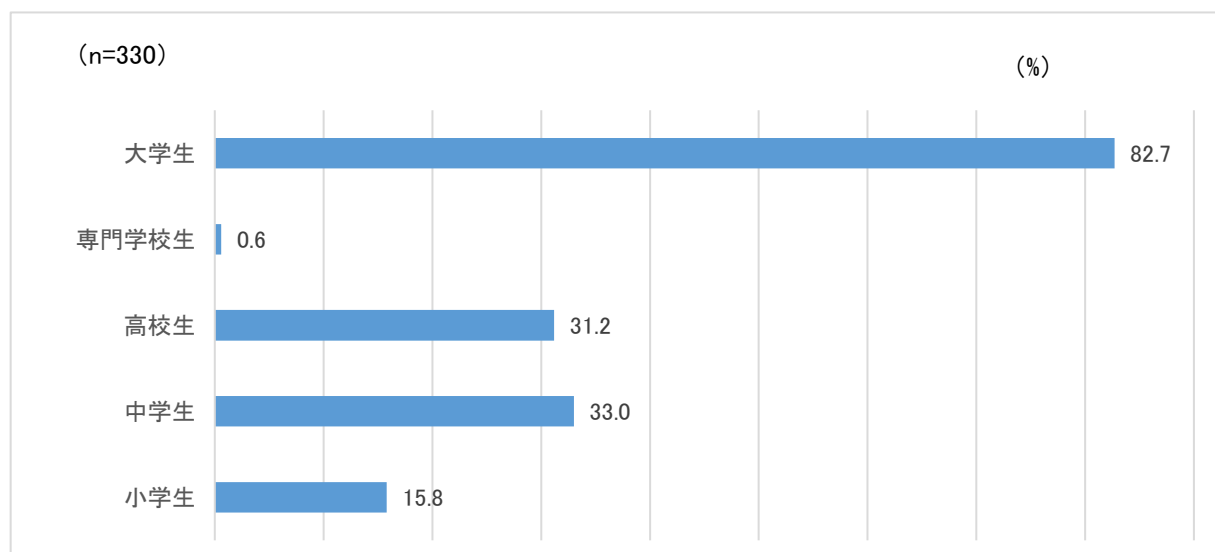
図表 3-2 福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学（社会見学）などに参加した経験がありますか。



3) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「いつ参加しましたか」と尋ねた。

「小学生」が 15.8%、中学生が 33.0%、高校生が 31.2%、大学生が 82.7%となっており、短大・4年制大学に入ってから福祉の仕事や行事への参加、ボランティア経験をしている回答者が最も多い結果となった（図表 3-3）。

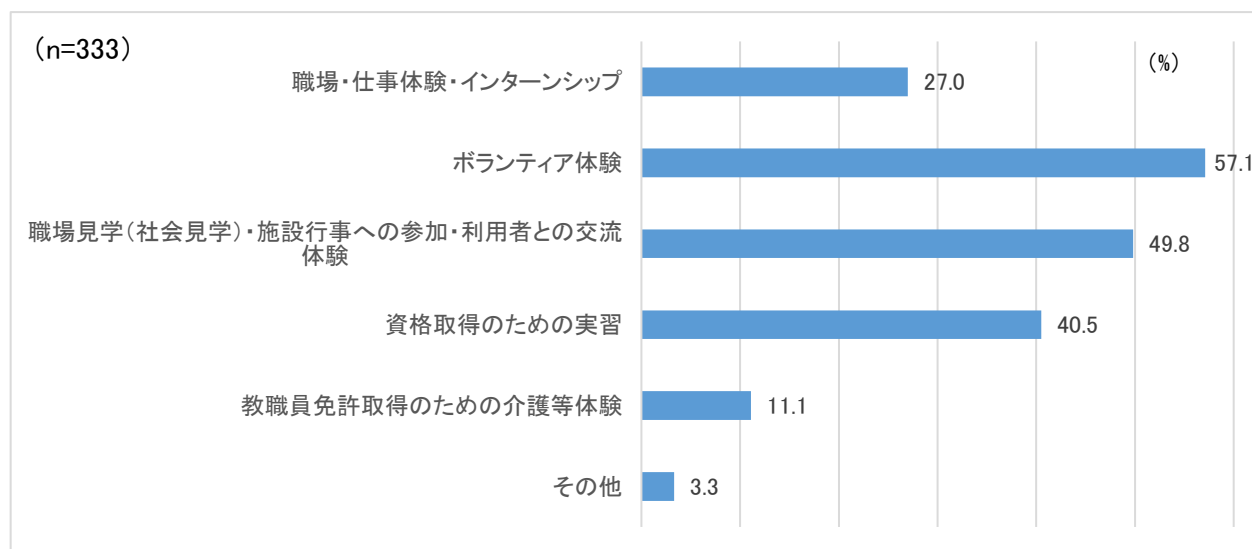
図表 3-3 (2) で「ある」と回答した中で、いつ参加しましたか。(複数回答)



4) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「どのような経験をしましたか」と具体的な体験内容を尋ねた。

図表 3-4 の通りの結果となった。最も多かったのは、「ボランティア体験」(57.1%)、次に「職場見学（社会見学）・施設行事への参加・利用者との交流体験」(49.8%)、そして「資格取得のための実習」(40.5%)であった。これら 3 つの項目でほとんどを占めている。

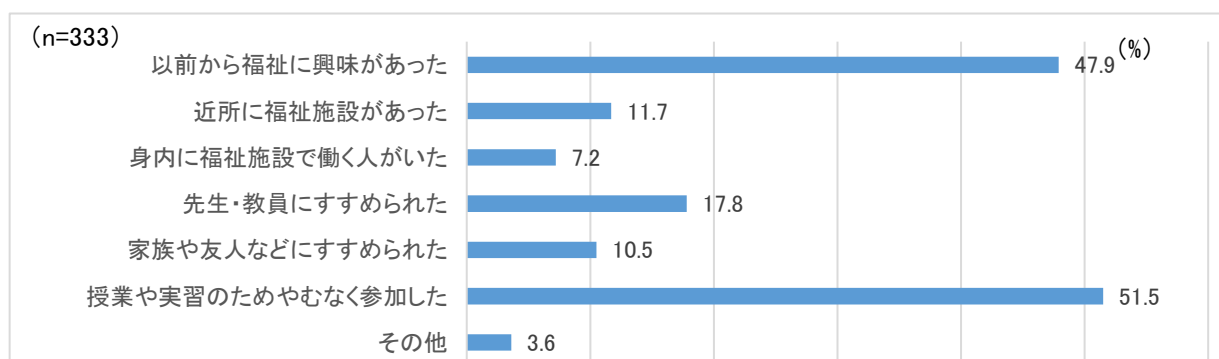
図表 3-4 (2) で「ある」と回答した中で、どのような経験をしましたか。(複数回答)



5) 参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「参加を決めた理由でふさわしいものを選んでください」と尋ねた。

結果は図表 3-5 の通り、「授業や実習のためやむなく参加した」(51.5%)が最も多く、次いで「以前から福祉に興味があった」(47.9%)であった。短大・4年制大学生の場合は、授業や実習のためという受け身な理由が半数以上と最も多い一方で、以前から福祉に興味があったからという理由も5割近くいることがわかった。

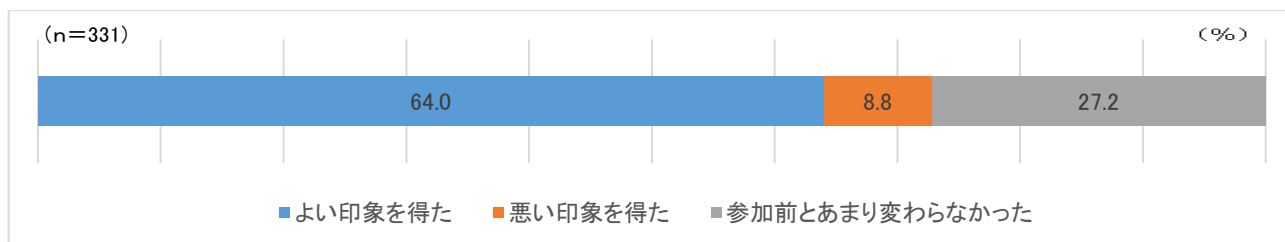
図表 3-5 (2) で「ある」と回答した中で、参加を決めた理由でふさわしいものをすべて選んでください。(複数回答)



6) 参加経験があると答えた回答者に対して、「参加した後の福祉施設への印象の変化がありましたか」と尋ねた。

64.0%の回答者が「よい印象を得た」と回答しており、「悪い印象を得た」と答えた回答者は少なく8.8%だった。このことから、福祉活動への参加や福祉施設への見学は、短大・4年制大学生のような若者たちに非常に効果があることが示唆された(図表 3-6)。

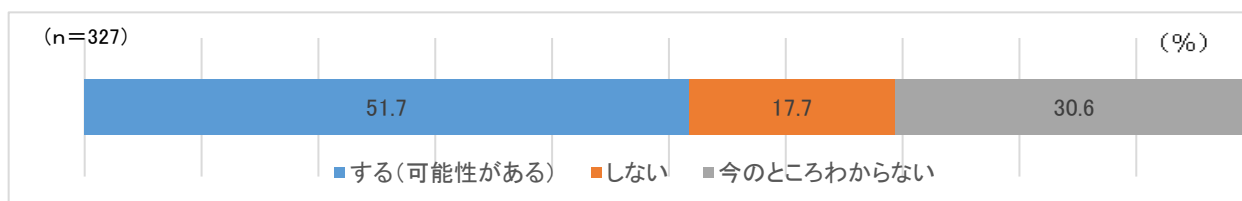
図表 3-6 (2) で「ある」と回答した中で、参加した後の福祉施設への印象の変化はありましたか。



7) 参加経験があると答えた回答者に対して、「これからの就職選択に影響すると思うかどうかを尋ねた。

結果は、図表 3-7 の通り、「する(可能性がある)」は 51.7%であり、「しない」と答えた回答者は 17.7%であった。一方で「今のところわからない」も 30.6%となっている。半数近くが就職選択に影響すると答えていることから福祉の活動への参加に一定の効果があることがわかったが、3割強の回答者には、福祉への活動や施設見学が就職選択に直接的な影響を与えていなかった。

図表 3-7 (2) で「ある」と回答した中で、これからの就職選択に影響すると思いますか。



上記の回答を選択した理由について記述してもらったが、代表的な回答は以下の通りである。

- もともと興味をもっていたし施設の皆の笑顔が本当によかったです
- 利用者と施設の方の関係性がよかった
- 暗いイメージだったが思っていたより明るい印象だった
- 小学校の隣りに施設があったため、日頃から中で働いている人の様子を見ることがあったから
- 支援が必要だが、特別な存在だという偏見がなくなった
- 職員の方の気遣いの高さ
- 実際に参加しないとわからないことがあり学びになりました
- 仕事自体は大変そうだけど、社会貢献や仕事へのやりがいはとても感じたから
- 実習に行く前には高齢者に対して偏見があったが、参加してみると、利用者の方も優しく接してもらい、楽しかった
- 「入所施設は封鎖された空間」というイメージが変わりました
- しんどいだけの印象でしたがしんどいだけでないということがわかった
- 保育の現場の様子が見ることができてイメージしやすくなった
- 大学で福祉を勉強しているため。学べること多かった
- 地域の関わりを大切にしていた
- 職員の熱意を感じたから

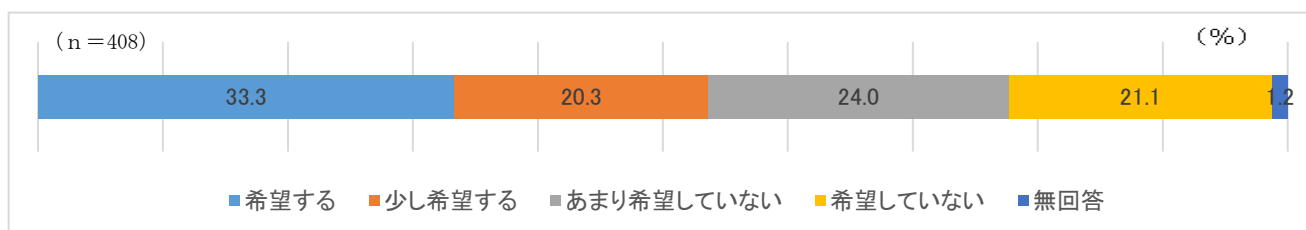
- 想像していたよりも職場環境が厳しかった
- 授業である程度習っていたのでそんなに変わらなかった
- 忙しいのだろうなと思ったけど、その通りだった
- 理解の深まりを経て、専門職の必要性を感じた
- 暗い印象を受けた
- 労働内容が過酷
- 介護の人手不足で時間に追われている感じがした
- 介護福祉資格取得のための介護実習で老健施設へ行き、老健施設が嫌いになった
- 養護（知的障がい児）施設等が街より遠いところにあるため、地域の人からの理解が得られにくいと知ったから

自由記述についての内容をみると、その7割以上は、福祉関連の行事等への参加によって肯定的な印象を受けているという回答であった。たとえば、「支援が必要だが、特別な存在だという偏見がなくなった」「職員の方の気遣いの高さ」「実際に参加しないとわからないことがあり学びになりました」「仕事自体は大変そうだけど、社会貢献や仕事へのやりがいはとても感じたから」などと、その体験から得たことを好意的に受けとめている。一方、残りの3割弱の記述については、「暗い印象を受けた」「労働内容が過酷」「介護の人手不足で時間に追われている感じがした」「介護福祉取得のための介護実習で老健へ行き、老健が嫌いになった」などの記述に代表されるように、悪い印象を受けていたり、福祉現場の厳しさを実感したりする内容のものであった。このようにポジティブに捉えている記述が多いのは、もしかすると、調査対象者の7割近くが福祉系であることが影響しているかもしれない（図表3-18）。

8)「将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか」という福祉への就職意向を尋ねた。

図表3-8の通り、「希望する」(33.3%)と「少し希望する」(20.3%)と肯定的に回答した者が53.6%と、5割を超えており、短大・4年制大学生は半数が卒業前に福祉への就職を希望していることがわかった。調査対象者の9割が福祉・介護系であった専門学校生の調査Ⅱの結果よりも、福祉の仕事への希望を選択した割合は、若干低くはなっているが、それでも「希望する」が半数を超える数字であった。

図表 3-8 将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか。



上記の回答を選択した理由について記述してもらったが、代表的な回答は以下の通りである。

- ボランティアなどに参加することによって福祉に興味をもつようになると思う
- 資格が取得できたらいつか活かしたい

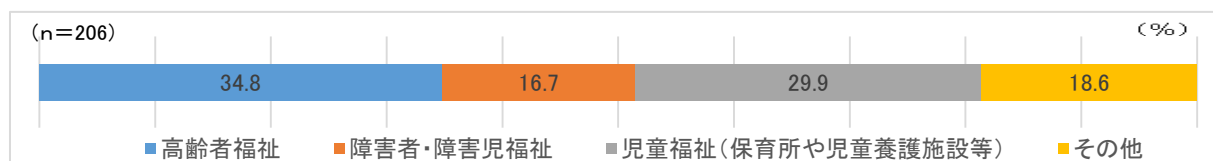
- 福祉に興味を持ったから
- 選択肢の1つになった
- 福祉は素晴らしい革命を起こすから
- 現場を知っておくことが大切だから
- 私もあの職員さんたちのように誰かのためにがんばりたいとおもうから
- 障害者スポーツに興味が沸きました
- 貴重な体験であったから
- 福祉施設がどんなところなのかイメージを持つことができたから
- 経験によって選択が変わる可能性があるから
- ①以前より福祉に携わることへの関心、使命感を感じたから。②働く人の質の高さが求められるべきものだと感じたから
- 環境や待遇は選択にとって大事だから
- あまり進路について考えていない
- 現時点では一般企業を希望しているので
- 福祉に向かないということがわかった
- 仕事量と給料が割に合わない

この項目に関する自由記述の結果をみると、全体的な傾向をとしては、前の質問の自由記述の結果と似た傾向を示していた。回答の約7割は非常に肯定的なとらえ方をしたものであり、これらの経験が学生たちの今後の就職活動に対して何らかの影響を与える可能性があるのでは、と感じさせるような内容の記述が見受けられた。具体的な記述としては、「私もあの職員さんたちのように誰かのためにがんばりたいとおもうから」「障害者スポーツに興味が沸きました」「貴重な体験であったから」などがある。その一方で、否定的な記述としては、やはり労働環境の悪さや賃金と仕事量などの労働条件の悪さがあげられており、この点については、高校生、専門学校生、短大・大学生という調査対象者の属性に関係なく、若者に一貫した意見や記述であったということが出来る。そして、この否定的な意見は、そのまま福祉の仕事を希望しないという若者の態度に直結している可能性は否定できない。

9) 福祉の仕事を「希望する」あるいは「少し希望する」と回答した短大生・4年制大学生に対して、どのような分野を希望しているかを尋ねた。

「高齢者福祉」が最も多く、34.8%であり、次に多いのが「児童福祉（保育所や児童養護施設等）」29.9%であり、「障害者・障害児福祉」が16.7%と続いている。高齢者福祉と児童福祉でほぼ6割を超えており、近年の介護人材や保育人材が必要とされている状況が反映していると思われる（図表3-9）。

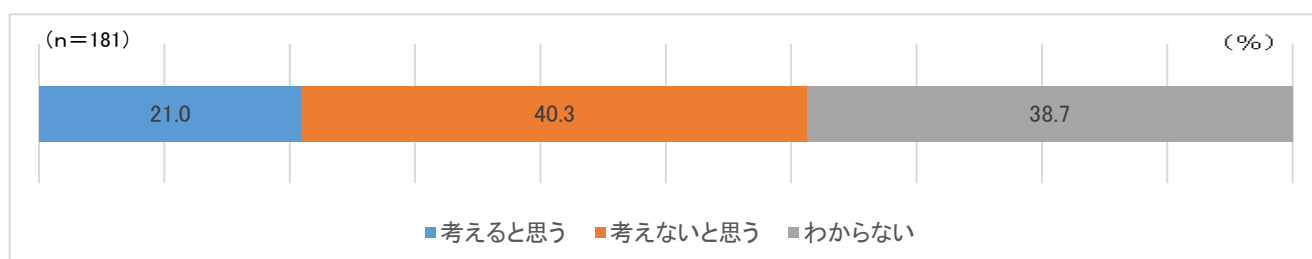
図表3-9 (8)で「希望している」「少し希望している」と回答した中で、どのような分野（仕事）を希望していますか。



10) 先の質問項目で「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますかと尋ねた。

結果は、図表 3-10 の通り、「考えると思う」と回答した短大・大学生は 21.0%であり、「考えないと思う」は 40.3%で、「わからない」も 38.7%と、環境や心境の変化によって、就職の希望が大きく変化する可能性はあまりないことが分かった。ただ、「わからない」と答えた大学生は 38.7%いることを考えると、将来の職業選択について必ずしも福祉領域を排除していないと言える。

図表 3-10 (8) で「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますか。



上記の質問でその回答を選んだ理由について自由記述で回答を求めたが、その代表的な回答は以下の通りだった。

- 福祉をいろいろ学んだけどいざ自分が働くとなるとついていけなくなると思う
- 福祉職は給料が低いから
- 仕事内容が厳しいと思う
- 重労働かつ安月給なイメージがあるから。夜勤があると思うから
- また進路を決定していないから
- 福祉以外につきたいから
- 大変で自分にやる自信がない
- 周りが思った以上に意識を高め、内定へと動いていく様子が多いため、少し焦りぎみ意味で感化されやすい。そのため何もわからず早く決まらない自分に対して悩みやすいと感じられる
- 興味はあるが、大変給料が安いというイメージが強いため
- 多分ないと思うけど自分の状況によっては
- 仕事がなかったら選択するかも知れない
- 最終手段としてはあり得るがなるべく就きたくない
- 体力のいる仕事なので、メンタルが強くないとできないと思った
- 環境や待遇がよければ考える
- 福祉はやめといた方がいいと親に言われた
- 親や身内が介護が要となれば
- 資格を持っているので将来は就きたいと思う

- そうせざるを得ないときに考える
- 一般で2、3年働いたら福祉の仕事につきたいと思っているから
- 環境がよくなれば考える
- 今は考えていないが、これからどうなるかわからない
- 地元が過疎地域で高齢化も進んでいるため、帰ることがあれば就くかもしれない

「考えないと思う」と回答したとであろう人々の自由記述は、「福祉職は給料が低いから」「仕事内容が厳しいと思う」「重労働かつ安月給なイメージがあるから。夜勤があると思うから」などでわかるように、労働環境や労働条件の悪さから、最初から福祉の仕事を念頭に置いていない様子が伺える。その一方、今は考えていないかもしれないが、将来や今後の社会状況や条件次第では、福祉職が選択肢になり得るという回答も4分の1程度あり、決して少ない数ではなかった。それらの具体的な記述例として、「多分ないと思うけど自分の状況によっては」「仕事がなかったら選択するかも知れない」「最終手段としてはあり得るがなるべく就きたくない」「環境や待遇がよければ考える」「そうせざるを得ないときに考える」などである。上述したように、これらの意見の持ち主である対象者たちの多くが福祉職を否定しているとはいえず、職業選択に福祉領域が排除されているわけではない。

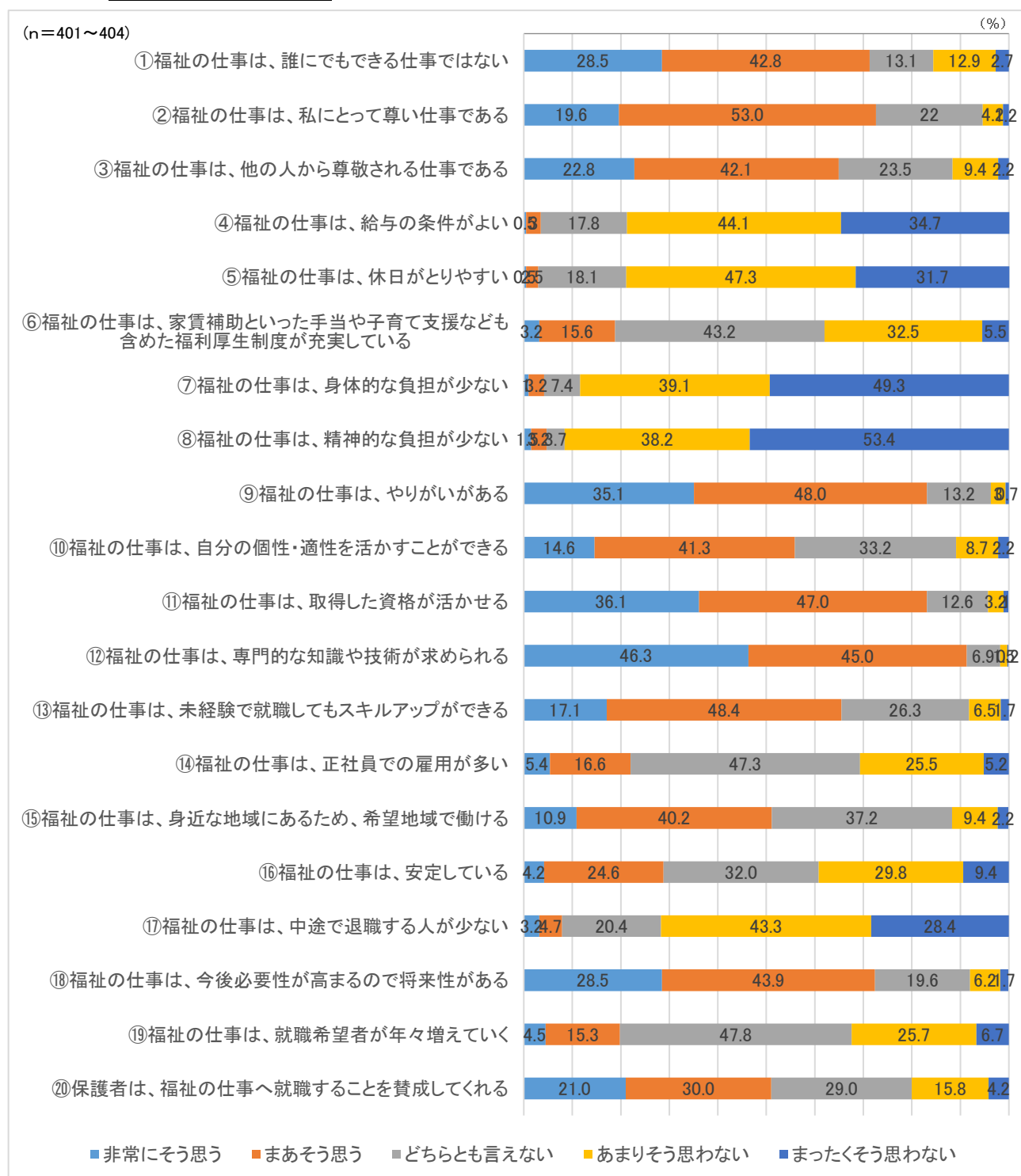
1 1)「福祉の仕事」(介護の仕事も含む)に関するイメージについて尋ねた。

具体的な項目としては、図表 3-11 にあるように 20 の項目を取り上げたが、それらは福祉職の労働条件に関する項目、負担感に関する項目、やりがい、資格、能力に関する項目、社会的な評価に関する項目などである。

調査対象となった短大・大学生の「福祉の仕事」についての特徴的なイメージとしては、まず、項目⑫の質問の結果から、福祉の仕事は専門的な知識や技術が求められる仕事であると答えた者が「非常にそう思う」、「まあそう思う」を合わせると9割を超えており、福祉職の専門性を評価していることがわかる。それを受けて⑪の「福祉の仕事は取得した資格が活かせる」という項目で8割以上がそう思うと答えている。また、⑨の質問の結果から、「福祉の仕事はやりがいがある」と答えている者も8割を超えている。これらの回答から、短大・4年制大学生は、福祉職が専門性を求められる仕事であり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持っていることがわかる。

また、①、②、③などの質問の結果からは、福祉の仕事は誰にでもできる仕事ではないと同時に、自分にとって尊い仕事であり、他の人から尊敬される仕事であるという回答者が6割から7割を占めており、福祉職への非常に肯定的なイメージが見られる。その一方で、項目⑦、⑧にみられる身体的負担や精神的負担については否定的な見方が9割と多く、④、⑤などの給与や休日などの労働条件に関する項目についても肯定的な見方は非常に少なく4%程度であった。その他、⑭の福祉の仕事は必要性が高まるので将来性があるとの回答が7割以上を超えており、自分が福祉職に就くことを保護者が賛成してくれるかどうかについては賛成してくれると回答した者が、5割を超えており、反対されると予想している回答者は2割程度にとどまっている。したがって、短大・4年制大学生の場合は、福祉職を専門職として認め、肯定的な見方が一定存在することがわかった。福祉職の将来性や保護者の支援の可能性から潜在的な労働力として期待できる。ただ、仕事の負担感や労働条件についてはマイナスのイメージが強いことがわかった。

図表 3-11 あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～②①のそれぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。注) 以下の項目でいう「福祉の仕事」には「介護の仕事」も含まれます。



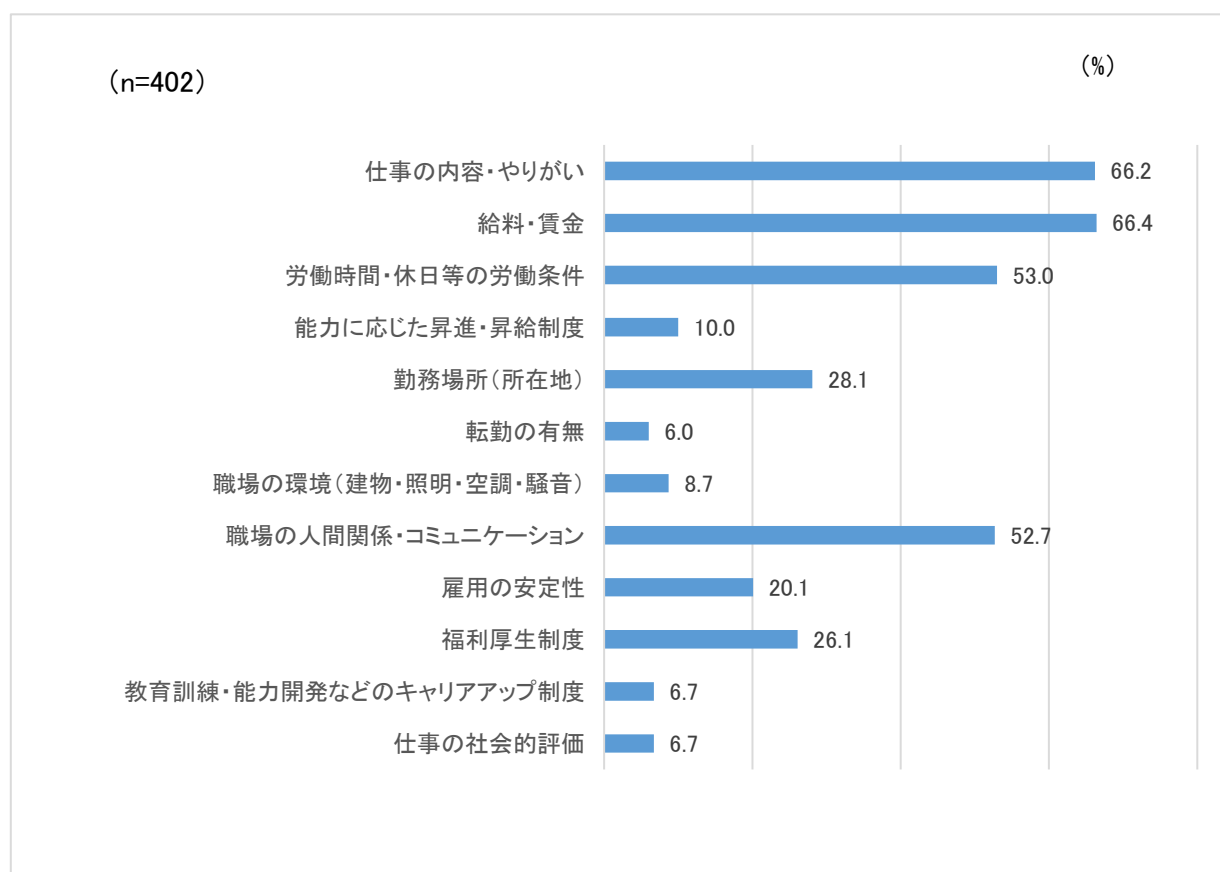
Ⅱ 【就職活動について】

調査対象者にこれからの就職活動一般に関する質問を行った。結果は下記の通りである。

1 2) 仕事を決めるにあたり重視することは何か（あてはまるものを3つまで選択）について、尋ねた。

結果は図表 3-12 の通り、最も多かったのは、「給料・賃金」(66.4%) で、次にほぼ同率で「仕事の内容・やりがい」(66.2%)、そして「労働時間・休日等の労働条件」(53.0%) と「職場の人間関係・コミュニケーション」(52.7%) もほぼ同率で続いた。給与や休日、労働時間などの労働条件関係はもちろんのことだが、それらだけでなく、仕事の内容ややりがい・職場の人間関係・コミュニケーションも同時に重視していることがわかった。

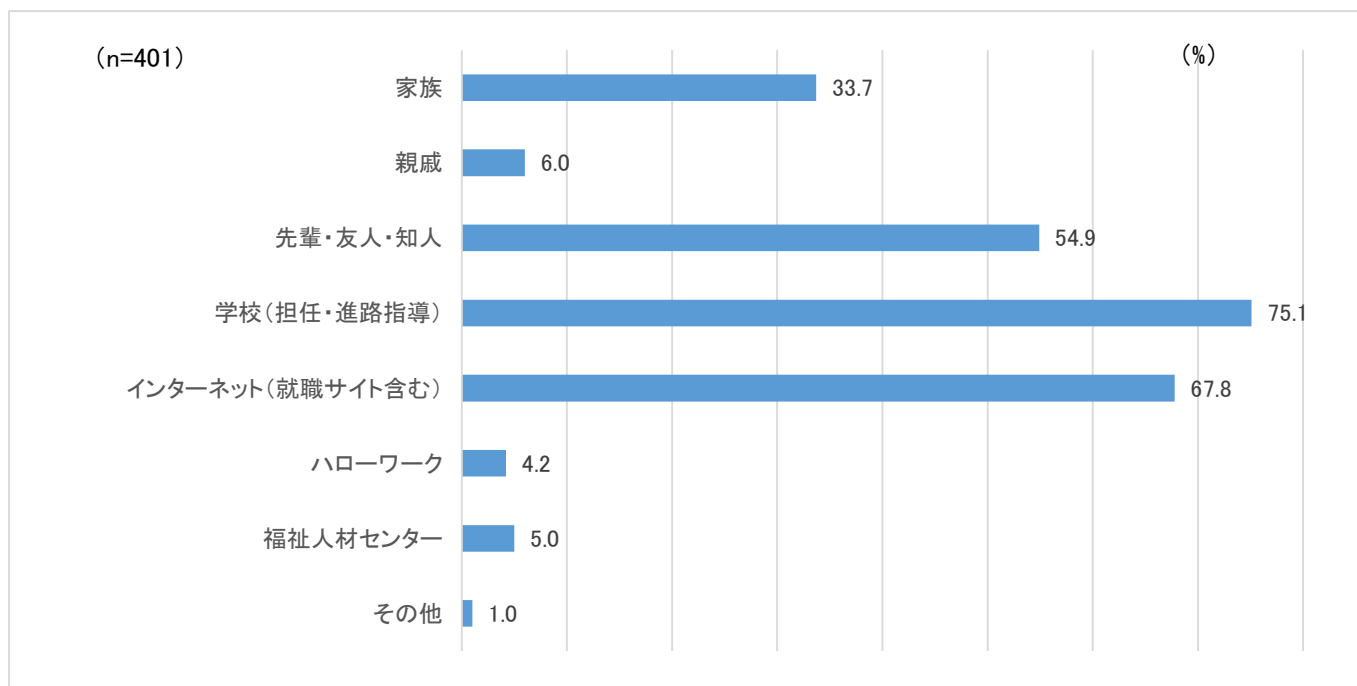
図表 3-12 仕事（就職先）を決めるにあたり重視することは何ですか。以下のうち当てはまるものに3つまで○をつけてください。



1 3) 「就職に関する情報源について、どこから情報を得ていますか」尋ねた。

最も多かったのが「学校（担任・進路指導）」で 75.1% となっており、次いで「インターネット」が 67.8%、「先輩・友人・知人」が 54.9% であった。最近の若者の情報源として、インターネットや SNS などが手軽に利用されていることが反映されているが、やはり第1番目は短大・大学の進路指導等の教職員であり、その影響力が大きいことがわかった(図表 3-13)。

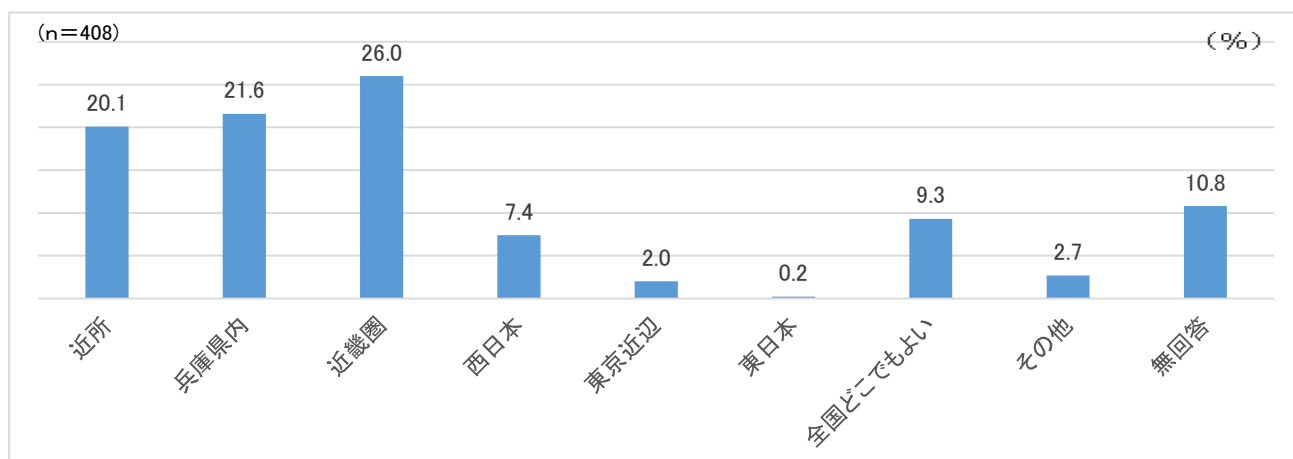
図表 3-13 就職に関する情報について、どこから情報を得ていますか（得ようと思いますか）。以下の当てはまるものにすべて○をつけてください。（複数回答）



1 4) 希望する勤務地を尋ねた。

結果は下の図表 3-14 の通りである。「近畿圏」(26.0%)、「兵庫県内」(21.6%)「住んでいる市町村かその近辺」(20.1%) でほぼ 7 割近くを占めている。勤務地としては近畿を中心としたエリアでの勤務を希望している者が多い一方、全国どこでもよいと考えている回答者も 9%いることが分かった。

図表 3-14 図表希望する勤務地はどこですか。



15) 就職活動をするうえで困っていること(困ったこと)を尋ねた。(自由記述)

調査Ⅱの専門学校生に対しても同様の質問を行ったが、短大・4年制大学生に就職活動をするうえで困っていること(困ったこと)を自由記述してもらった。それらの具体的かつ代表的な回答は以下の通りである。

- 処遇改善手当に関する記載が無く、わからないことがあった
- 学校が協力的ではない
- 実習が2～3月に入ってしまったため就活できない
- 施設で行われていない介護の内容で、利用者のことを思うこともせず、自己満足している
- 介助を行っている施設のところを行かないこと。自分と介護の理念が合い、利用者の方のことを考えることがよくできていて、情報交換ができていて、NGなことを少ないところを選ぶ
- まだ就職活動を具体的にしていないので、なんとも言えないが、自分に合った就職先が見つかるかどうかの不安は大きい
- 就職先の内実がよくわからない場合がある
- 実際に働いてみないと施設のよしあしはわからない
- 安心して就職活動ができる状況で行いたかった
- 人材難といいながら希望職種にはつけない
- 施設がたくさんありすぎてどこが良いのか分からない
- 書いてある条件と異なる施設があったこと
- 職場の雰囲気が悪くないか。自分に合っているか
- 介護職員が少ない。給料が年々減っている
- 職場での人間関係、給料
- 人間関係ややりがいについてどのようなものが困っていた
- 職場の人間関係などがわからない
- 自身の住む地域と学校の担当地域が離れており、情報が少ないため、立地と業務内容を考え、自分にとって合うところを見つけるのが大変だった。幅広い地域の現状の情報が欲しかった
- 施設を訪問する中でどの施設が良いのか迷ってしまい、面接をする期間が遅くなってしまった
- 自分の年齢で求められる経験や知識などをどの程度事業所ごとに考慮されるかがわかりにくい
- ネットやパンフレットだけでは施設概要がわかりづらい
- まだ就職活動はしていないが、近辺の福祉施設のボランティアがもっとあれば、就職のときに判断基準ができてからしてほしい。求人票だけではわからない情報を知りたい

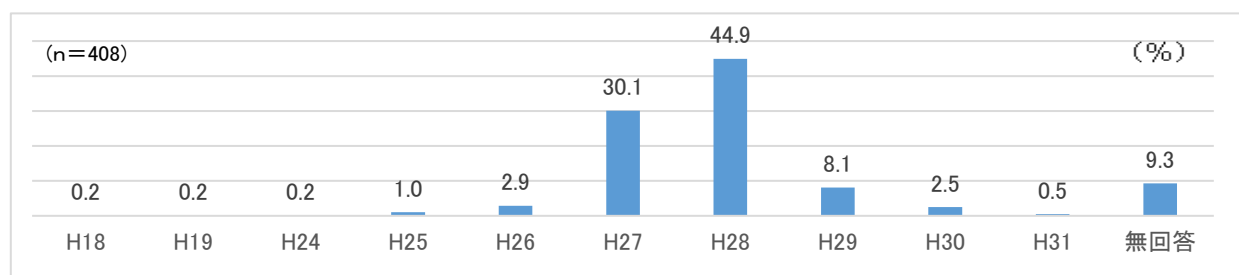
本調査対象者の7割が福祉系を専門にしているが(図表3-18)、質問のリード文自体は、就職活動一般に対する困りごとに関する自由記述となっており、必ずしも福祉職や介護職を意識した就職活動に関するものとはなっていない。それでも、自由記述の回答をみると、内容の多くが福祉系の就職を意識した回答となっていた。全体としては、専門学校生に対する調査Ⅱにある同様の項目と比較しても、「書いてある条件と異なる施設があったこと」「介護職員が少ない。給料が年々減っている」「職場での人間関係、給料」「処遇改善手当に関する記載が無く、わからないことがあった」など、同じような自由記述がいくつもみられ、共通の困り事があることがわかった。就活を行う学生にとって就職を決める際に

具体的な情報源となる求人情報や求人票、労働条件、施設概要などの基本的な情報が必要であるのにもかかわらず、それらが学生たちにとっては十分ではなかったり、不明確であったりする記述がそれなりにみられた。なお、大学生の場合は、専門学校生と比べて、就職活動や就職先の決定の時期などもあり、福祉と一般企業の就職のどちらにしようか迷っている学生がより多いと思われるが、その中で福祉への就職意向を示し、就職活動を行っている学生がこれらの問題にぶつかり、福祉への就職をあきらめざるを得ないことがあるならば、それは非常に残念なことである。就職先となる福祉現場も含めて、福祉業界全体で、このような情報収集に関するホームページなど、より一層の充実が求められるであろう。

あなたが大学生の場合、次の問に答えてください。

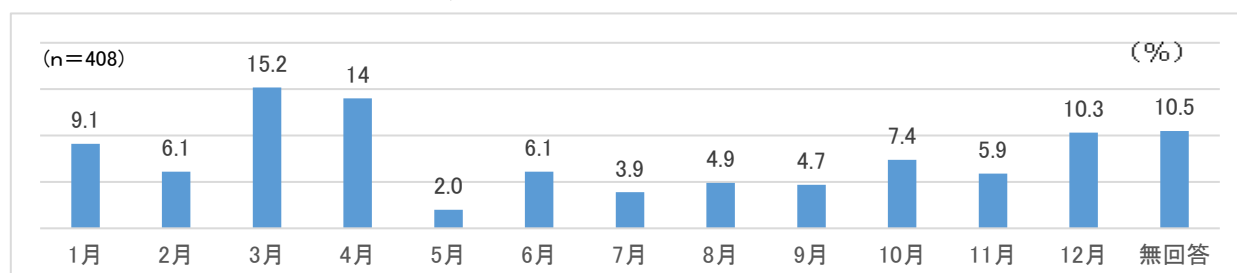
16) 平成28年度の就職活動については、いわゆる経団連会員企業が4月1日採用試験開始と申し合わせており、それにあわせる形でいわゆる一般企業の就職活動時期が決まってくるために、学生自身の意向だけでは就職活動ができないのが現状である。従って、本質問項目については、調査対象者の現在の学年と関係していると考えられる(図表3-15-1)。

図表 3-15-1 就職に向けて活動を開始した時期、開始しようとする時期はいつごろですか。数字を記入してください。



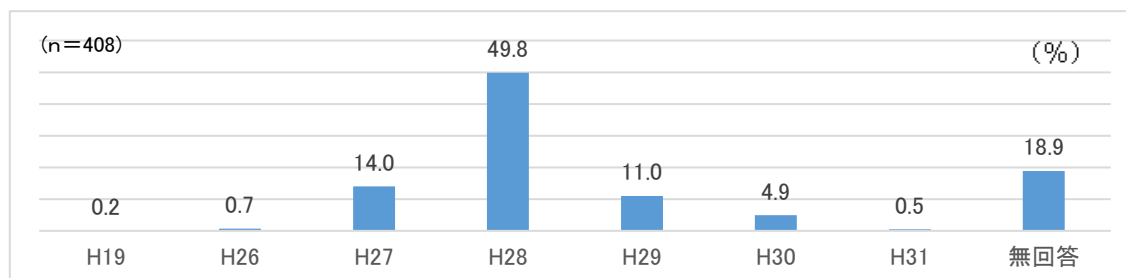
就職活動を始める時期としては、3月が最も多く、続いて4月となっており、今年度の企業の採用が6月となっていることも影響していると思われる。しかし、そのほかは5月が最も少ないことを除き、特筆すべきことはない。ただ、福祉系の就職は比較的遅く夏以降に就職フェアが多いことを考えると、すでに3月から就職活動をしている者が多い現状では時期的に遅いと言えるかもしれない(図表3-15-2)。

図表 3-15-2 就職活動を始める時期

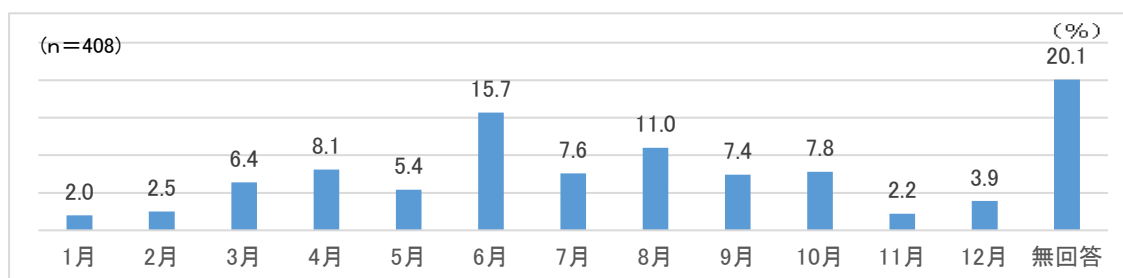


17) 先の結果からも、採用活動は比較的早く始めることが必要ということがわかったが、学生自身が考える望ましい採用試験の時期は6月が最も多い。次いで8月であるが、今年度の企業の就職が6月解禁となっており、8月までには大手の採用は終わっていることが予想される。したがって、本回答は、それらの影響を受けたものと思われる（図表 3-15-4）。

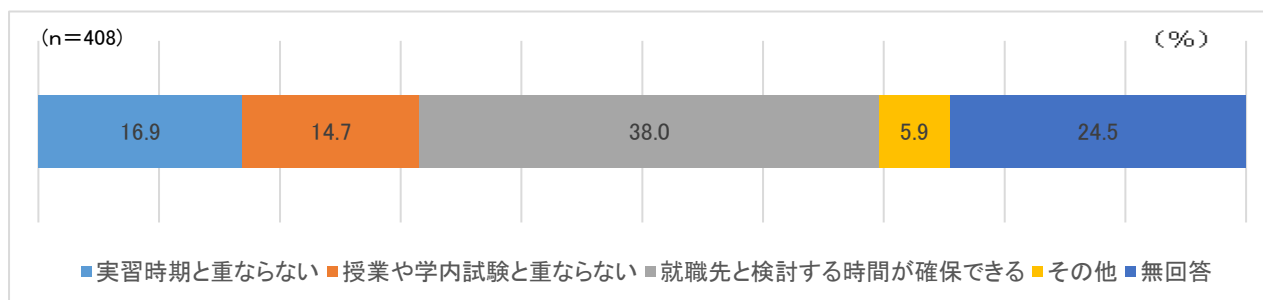
図表 3-15-3 採用試験を受ける時期として望ましいと思う時期はいつごろですか（年）。



図表 3-15-4 採用試験を受ける時期として望ましいと思う時期はいつごろですか（月）。



図表 3-15-4 その理由

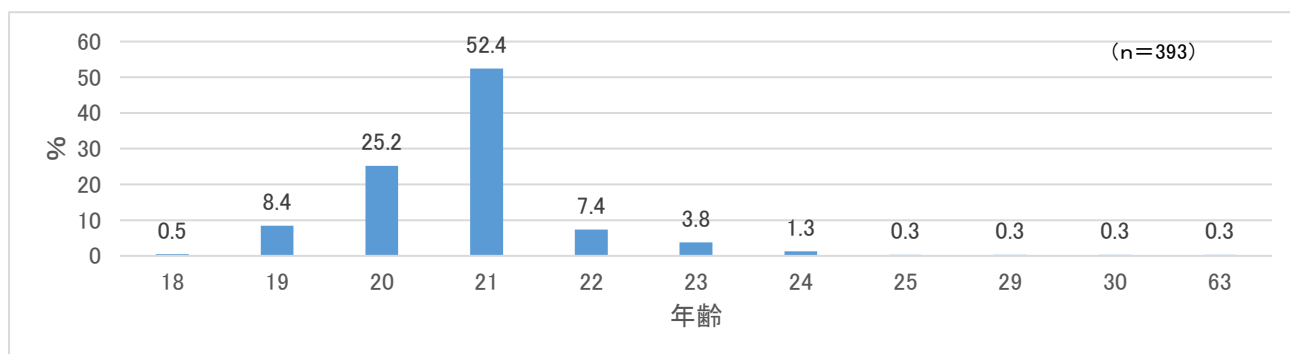


Ⅲ 【基本的属性】

1 8) 回答者の年齢

平均年齢＝20.870 歳、標準偏差＝2.604 歳、その中、最大値＝63 歳で、最小値＝2 歳であった。最も多いのが 21 歳、大学 3 年生である（図表 3-16）。

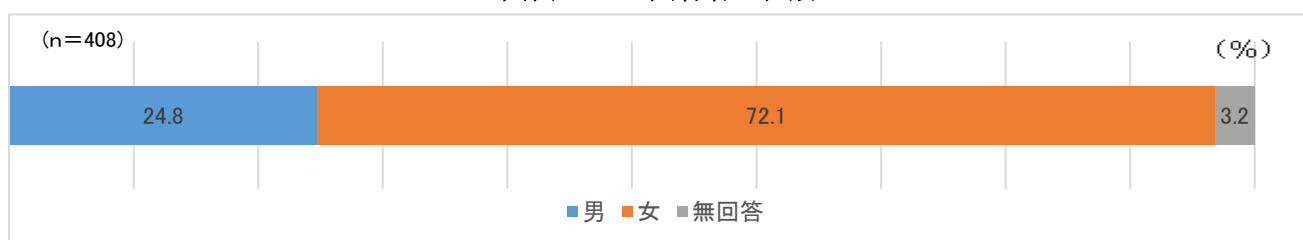
図表 3-16 回答者の年齢



1 9) 回答者の性別

回答者の 7 割以上が女性であった（図表 3-17）。

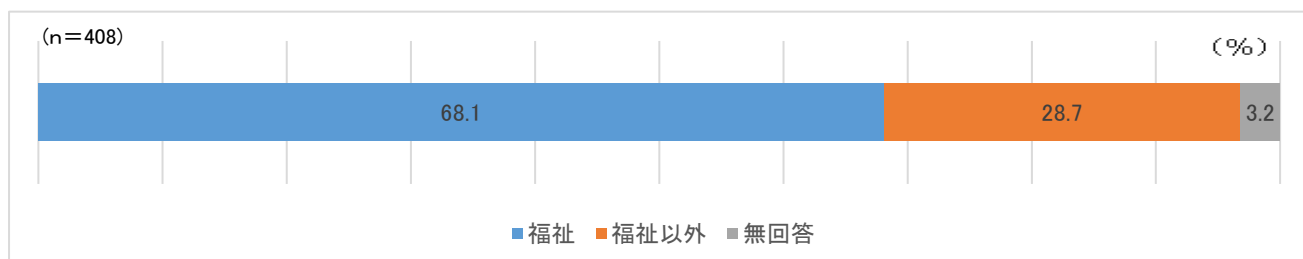
図表 3-17 回答者の性別



2 0) 回答者の専攻

福祉系が 7 割であった（図表 3-18）。

図表 3-18 回答者の専攻



2 1) 回答者の属性

4 年制大学が 9 割であった（図表 3-19）。

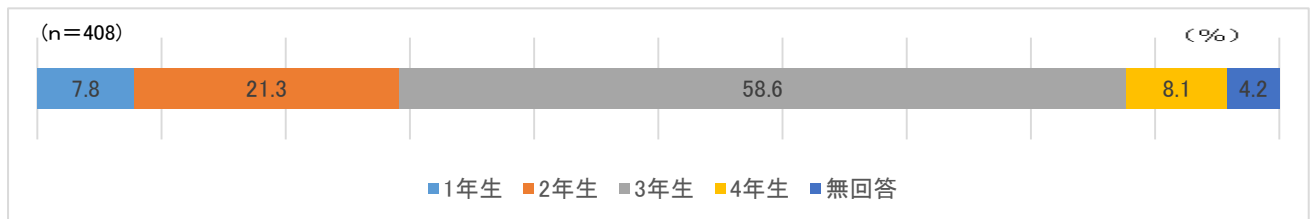
図表 3-19 回答者の属性



2 2) 回答者の学年

3 年生がおおよそ 6 割、次いで 2 割が 2 年生となっていた（図表 3-20）。

図表 3-20 回答者の学年



3-3. クロス集計の結果

高校生調査及び専門学校生の調査と同様に、短大・4 年制大学を対象とした調査においても、設定した調査項目の多くが複数回答であったために、統計的な有意差を検証(カイ 2 乗検定)することができるクロス集計を、それほど多く実施することができなかった。実施できたクロス集計は、まず、基本属性である性別、周りに福祉の仕事に就いている人の有無、福祉行事への参加経験の有無、福祉の仕事の希望、就職の進路先の分野などであり、これらの項目のすべてのクロス組み合わせによって、クロス集計を実施した。ここでも、カイ 2 乗検定の結果で有意差($P < 0.05$)を示した結果のみを報告することとする。

カイ 2 乗検定の結果、統計的に有意な結果が得られたクロス集計は、4 つであった。最初のクロス集計は、福祉の行事等への参加の有無と福祉の仕事の希望とのクロス集計であるが、結果は図表 3-21 の通りであった。このクロス集計の結果をみると、短大・4 年制大学生にとって、福祉施設等での行事の参加の有無が福祉の仕事の希望に有意に関連しており、行事の参加によって福祉への就職希望に差があることがわかった。本調査Ⅲの対象者は、福祉系を専門としている学生は 7 割近くを占めるが、このことが結果に影響を及ぼしていることは十分に考えられる。

次に、有意な結果が見られたのは、周りに福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス集計の結果であった。高校生調査や専門学校生でも同じクロス集計で同様の結果が得られたので、これで若者全体が同じ傾向があることが示唆されたが、図表 3-22 の結果の通り、周りに仕事に就

いている人がいるかどうか、福祉への就職を希望していることに有意に関連しており、就いている人が周囲にいる方が福祉への就職希望をする割合が高いという結果であった。

3つ目に有意差が得られたのは、男女別に福祉施設等での行事参加の有無にみたクロス集計であった。結果は、図表 3-23 の通り、女性の方が有意に参加している割合が高いことがわかった。福祉業界全体をみても、職員や専門職などは、男性よりも女性の方が多いので、この結果は、当たり前の結果とも捉えることはできる。

図表 3-21 福祉施設で職場体験の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表

			将来の進路として、福祉の仕事希望するののか				合計
			希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
福祉施設で職場体験したことが	ある	n	131	75	73	51	330
		%	39.7	22.7	22.1	15.5	100.0
	ない	n	5	6	25	35	71
		%	7.0	8.5	35.2	49.3	100.0
	合計	n	136	81	98	86	401
		%	33.9	20.2	24.4	21.4	100.0

図表 3-22 周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表

			将来の進路として、福祉の仕事希望するのか				合計
			希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
周囲に福祉の仕事に就いている人が	いる	n	72	46	43	23	184
		%	39.1	25.0	23.4	12.5	100.0
	いない	n	63	37	55	63	218
		%	28.9	17.0	25.2	28.9	100.0
	合計	n	135	83	98	86	402
		%	33.6	20.6	24.4	21.4	100.0

図表 3-23 性別と福祉施設で職場体験の有無とのクロス表

		福祉施設で職場体験したことが		合計
		ある	ない	
男性	n	67	32	99
	%	67.7	32.3	100.0
女性	n	259	34	293
	%	88.4	11.6	100.0
合計	n	326	66	392
	%	83.2	16.8	100.0

最後の有意な結果が得られたのは、福祉専攻かどうかと、福祉への就職の希望とのクロス集計の結果であり、そのクロス表は、図表 3-24 の通りであった。これも当然の結果とも言えるが、福祉を専攻している学生の方が福祉への就職希望をする割合が有意に高いというものであった。この結果から、短大・4 年制大学に入学する前に将来の福祉職への就職を希望し、それを目指して短大・4 年制大学に進学する可能性があることがうかがえた。

図表 3-24 福祉専攻別と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事希望するか				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
福祉専攻	n	128	70	54	23	275
	%	16.5	25.5	19.6	8.4	100.0
福祉以外の専攻	n	6	10	41	59	116
	%	5.2	8.6	35.3	50.9	100.0
合計	n	134	80	95	82	391
	%	34.3	20.5	24.3	21.0	100.0

3-4. 調査Ⅲのまとめ

調査Ⅲは、兵庫県内の短大・4年制大学の学生全般を調査対象とした調査Ⅲであるが、属性の結果を見ると、7割が福祉系を専門としているということから、調査に協力してくれた短大・大学あるいは学生たちの多くが福祉を専攻しており、彼らは、本調査の趣旨を理解してくれるが故に調査協力をしてくれたとも受けとめることができる。従って、本調査にまったく関心のない学生からの回答はほとんどない可能性も否定できず、その点では、本調査の結果をもって、兵庫県内のすべての短大・4年制大学の結果として一般化することはできないことを断っておきたい。

調査の結果を簡単にまとめると、まず、高校生や専門学校生の結果と同様に、周りに福祉の仕事に就いた人がいる、あるいは福祉関連の行事等に参加したことがあると答えた人の方が、将来の福祉職への就職希望をする割合が有意に高いことがわかり、この点は、高校生、専門学校生、短大・4年制大学生に代表される若者たちの意識や考えについて、ある程度共通していることがわかった。この結果から導きだされる考察としては、社会福祉協議会や各社会福祉施設・機関等で実施している様々な行事に若者が参加することは決して無駄にはなっていない可能性が高く、これらの行事を継続していくことが必要である。若い世代のときの福祉行事への参加や関わりが、いつ実を結ぶか、あるいは結ぶかどうかともわからないが、彼らにとっては良い意味でも悪い意味でもそれらは大きな経験の一つになっていることは疑いのないところである。

次に、短大・4年制大学の学生の自由記述等の内容や、福祉の仕事のイメージに関する結果を見ると、非常に現場をシビアに見ていた専門学校生とは若干異なり、第三者的あるいは客観的に、冷静で、しかも厳しく福祉職をみていると考えられる。たとえば、いくつかの自由記述の中には、福祉の仕事は、この社会的にとっては必要で大切なものであり、尊いものだとしているけれども、その仕事を自分自身が担うかとなると、就職状況、労働環境や労働条件等の問題があり、難しいという趣旨の内容がいくつもみられた。

また、「福祉の仕事」に関する回答傾向からすると、福祉の仕事は専門的な知識や技術が求められる仕事であると答えた者がほとんどであり、福祉職の専門性を評価していることがわかる。また、「福祉の仕事は取得した資格が活かせる」という項目で8割以上が、「そう思う」と答えているし、「福祉の仕事はやりがいがある」と答えている者も8割を超えている。これらの回答から、短大・4年制大学生は、福祉職が専門性を求められる仕事であり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持っていることがわかる。その一方で、身体的負担や精神的負担については否定的な見方が

9割と多く、給与や休日などの労働条件に関する項目についても肯定的な見方は非常に少なく4%程度であり、福祉労働の現実を非常にシビアに考えている面もある。

いずれにせよ、短大・4年制大学生の場合は、福祉職を専門職として認め、肯定的な見方がある程度存在することがわかった。福祉職の将来性や保護者の支援の可能性から潜在的な労働力として期待できる。

それでは、調査Ⅲの結果全体から得られる示唆は何であろうか？専門学校生と同様、将来、福祉に就職する可能性もあることを考えると、学生のサイドからは「このような情報を学生は求めている」などと、より積極的な就職への姿勢やアピールを示すことが必要かもしれない。教育・養成サイドから考えると、特に、福祉系の短大・4年制大学の場合は、学生自身が福祉にいくかどうか迷っている面もあり、福祉教育機関が学生のキャリアアップや就職活動支援に一層真剣に取り組む必要があることは言うまでもないことであろう。ただし、短大・4年制大学の場合、一般企業の就職活動がすでにシステムとして構築されている中で、どのようにして、福祉系のキャリアアップを位置づけていけばよいのか、その取り組みについては、一大学の問題だけではなく、福祉系教育業界全体の問題となるであろう。

最後に、専門学校生の調査結果と同様、社会福祉施設など、就職先として人を受け入れる福祉業界全体は、今回の専門学校生の自由記述で数多く見られたように、一層、雇用に関する情報を明確にし、そしてオープンにすることからスタートする必要があるのではなかろうか。そういう地道な努力により、現在、福祉への就職の意向を示している若者、あるいは就職を迷っている若者は、福祉の仕事を将来の選択肢の一つに加え、福祉の人材確保や定着の問題が徐々に解消につながるのではないかと期待したい。

6. 調査報告Ⅳ

若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査 （進路指導担当教職員）の結果

4－1．調査方法

兵庫県内の高校・専門学校・短大・大学における進路指導担当の教職員を調査対象として、福祉の仕事や職場に対する意識調査を実施した。調査対象者は、本調査ⅠからⅢの対象となった兵庫県内にある高校(県立高校136校および私立高校52校)・専門学校(9カ所)・短大・4年制大学(39カ所)の計236の学校における進路指導担当の教職員300人とした。調査方法は、各校の進路指導担当の教職員に調査票を郵送し、調査票を送り返してもらった。調査期間は、平成28年1月25日～平成28年2月15日であり、149人の進路指導教職員から回答があった(回収率49.7%)。

調査項目については、添付にある調査票の通りであるが、所属、進路指導経験年数などの基本属性、福祉に関する資格や職種に対する認知状況、福祉の仕事に対するイメージ、福祉分野への就職・進学への勧めに関する項目、福祉分野への興味・関心を高める手段、学生・生徒や保護者が就職を考えるときに重視するものなどである。その他、自由記述の回答を求める質問項目が5つあった。

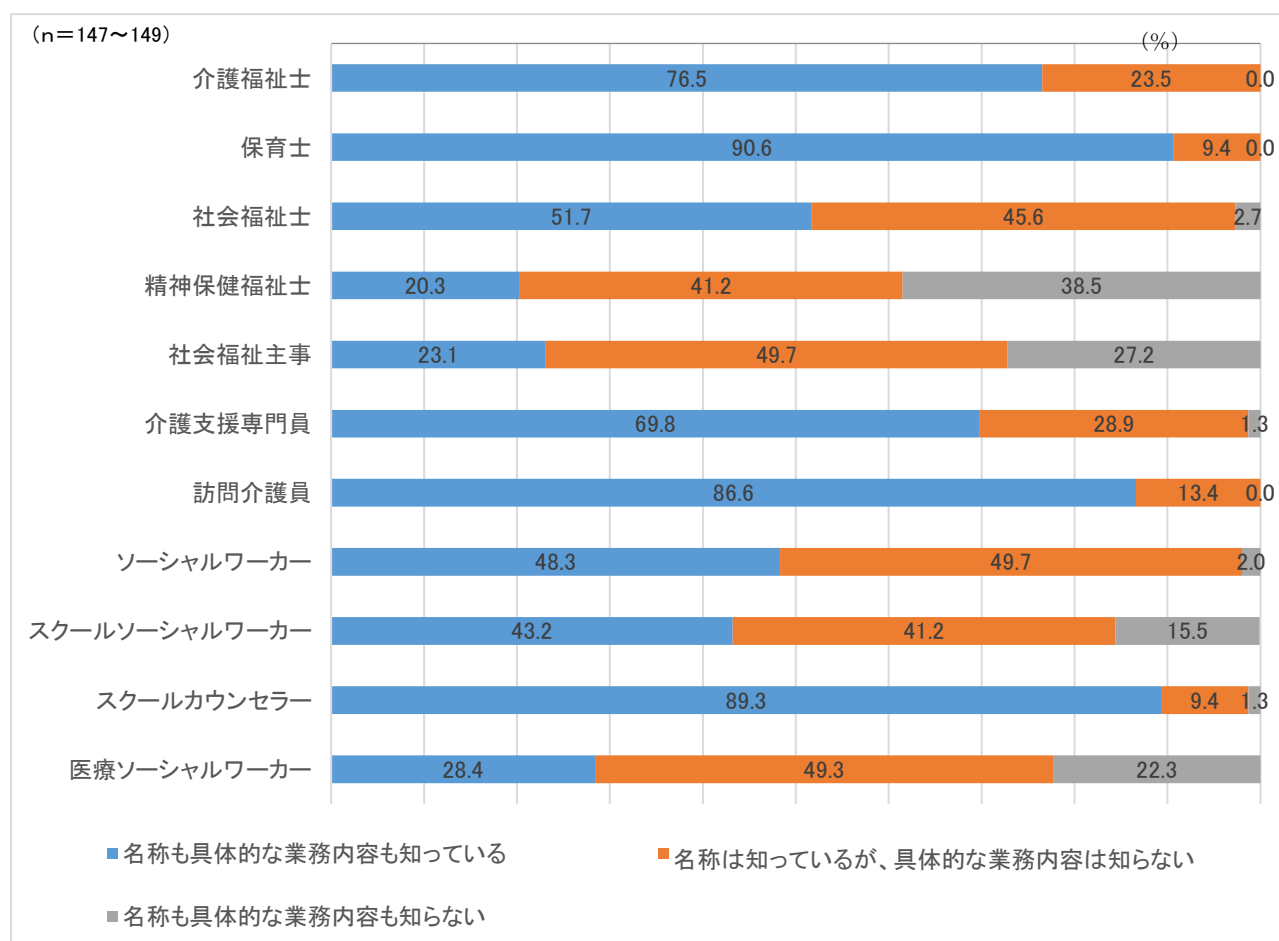
4－2．単純集計及び自由記述の結果

調査結果についてであるが、各質問項目に対する単純集計の結果は以下の通りである。

Ⅰ 【福祉の仕事・進路について】

1) 進路指導の教職員が「福祉に関する資格や職種」をどの程度認知しているか、質問した結果、図表4-1の通り、「名称も具体的な業務も知っている」なかで最も多かったのは保育士(90.6%)で、次いでスクールカウンセラー(89.3%)、訪問介護員(86.6%)であった。介護福祉士(76.5%)と介護支援専門員(69.8%)も7割もしくはそれ以上の回答者が認知しているものの、名称は知っているが具体的な業務内容は知らないと答えた者がそれぞれ23.5%、28.9%おり、超高齢社会で話題になっている資格であることから名前は知っていても実際の仕事内容までは知らないという回答者も2～3割いることが分かった。一方、「名称も具体的な業務内容も知らない」なかで最も多かった資格は精神保健福祉士(38.5%)で約4割近くの進路指導教職員に認知されていないことがわかった。

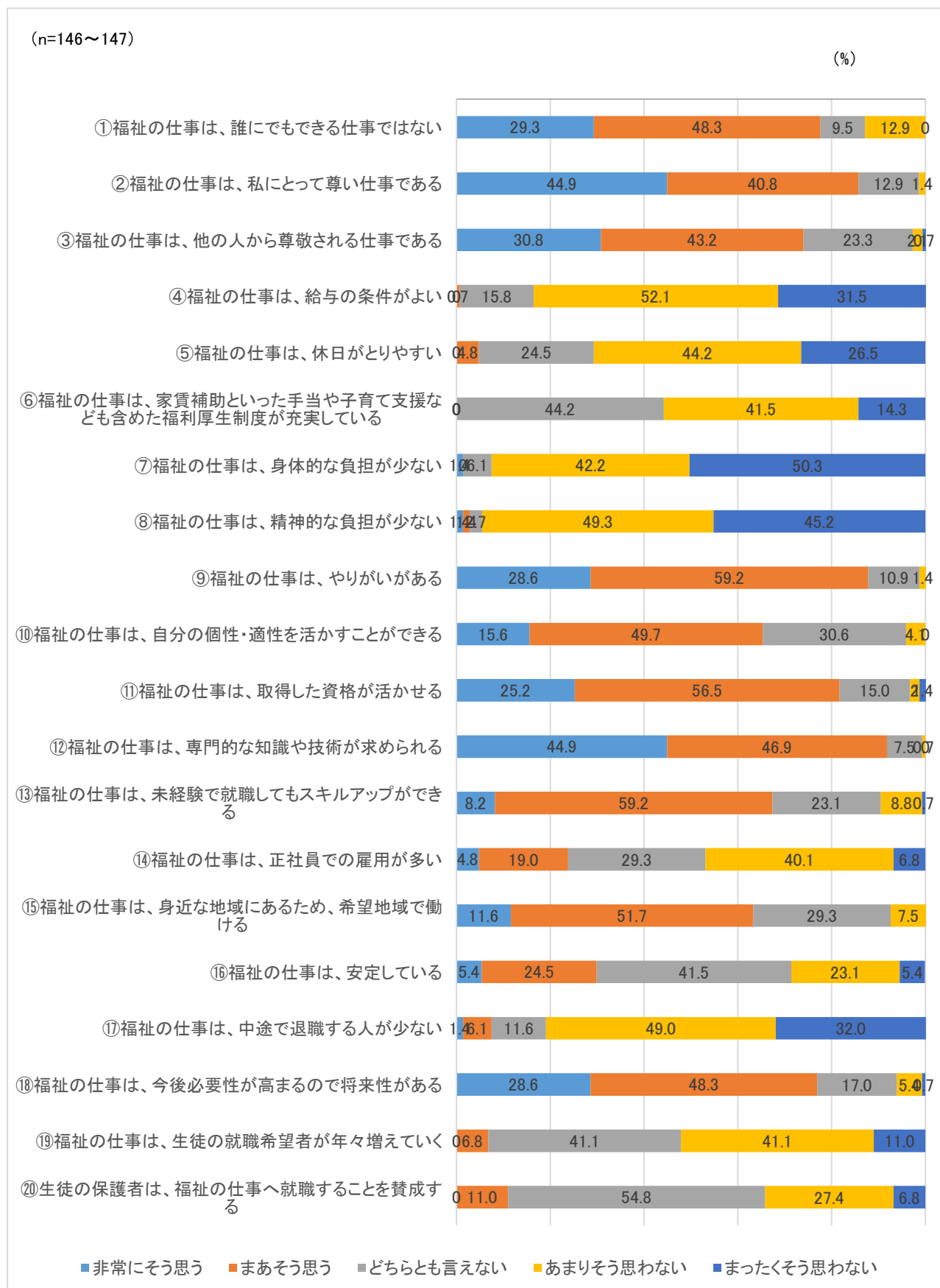
図表 4-1 あなたの「福祉に関する資格や職種」に対する認知状況として、次の①～⑩それぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。



2) 次に、調査ⅠからⅢまでの調査と同様に、進路相談担当の教職員に対して福祉の仕事に対するイメージとして20項目の質問をしたが、結果は、図表4-2の通りである。20項目のうち「非常にそう思う」が最も多かった項目は⑫「福祉の仕事は専門的な知識や技術が求められると思う」(44.9%)および②「福祉の仕事は私にとって尊い仕事である」(44.9%)の2項目であった。「まあそう思う」を加えると⑫は9割を超え、②も8割を超える。進路指導の教職員には福祉の仕事は専門性が必要であることが理解されていると同時に尊い仕事としても受け止められていることがわかった。福祉の仕事はやりがいがあり、取得した資格が活かせると思う教職員は6割から8割いることもわかった。

一方、⑦、⑧の項目の結果をみると、「福祉の仕事は、精神的な負担や身体的な負担が少ない」は「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」が9割を超えており、⑰の項目でも途中で退職する者が多いというイメージが8割を超えることから、進路指導の教員が福祉の仕事は身体的・精神的に負担が多く、その結果として中途退職する者が多いと考えている傾向がみられた。

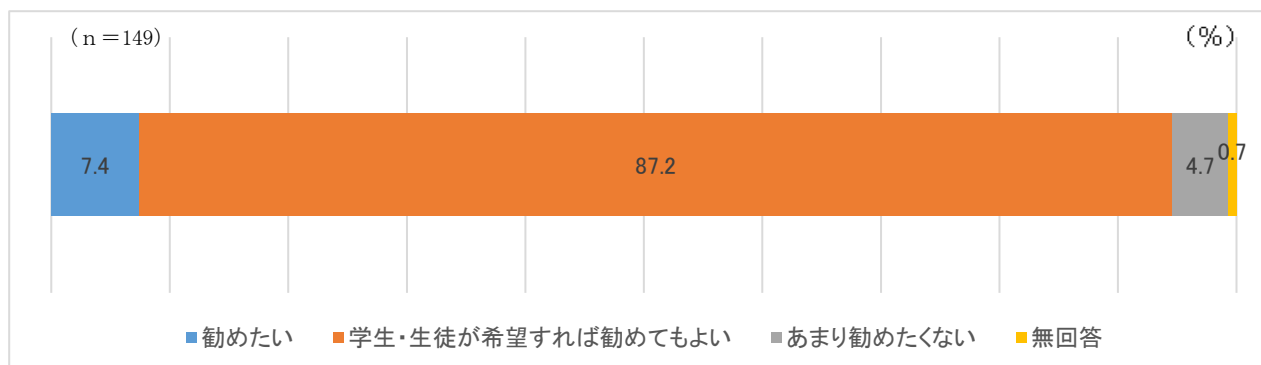
図表 4-2 あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～②⑩それぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。



3) 福祉分野への就職や進学については、図表 4-3 の通り、学生・生徒が望めば勧めてもよいとする者が 9 割を超えており、福祉分野の就職や仕事への理解が進めば、進路指導の教職員からの後押しも期待できる結果であった。

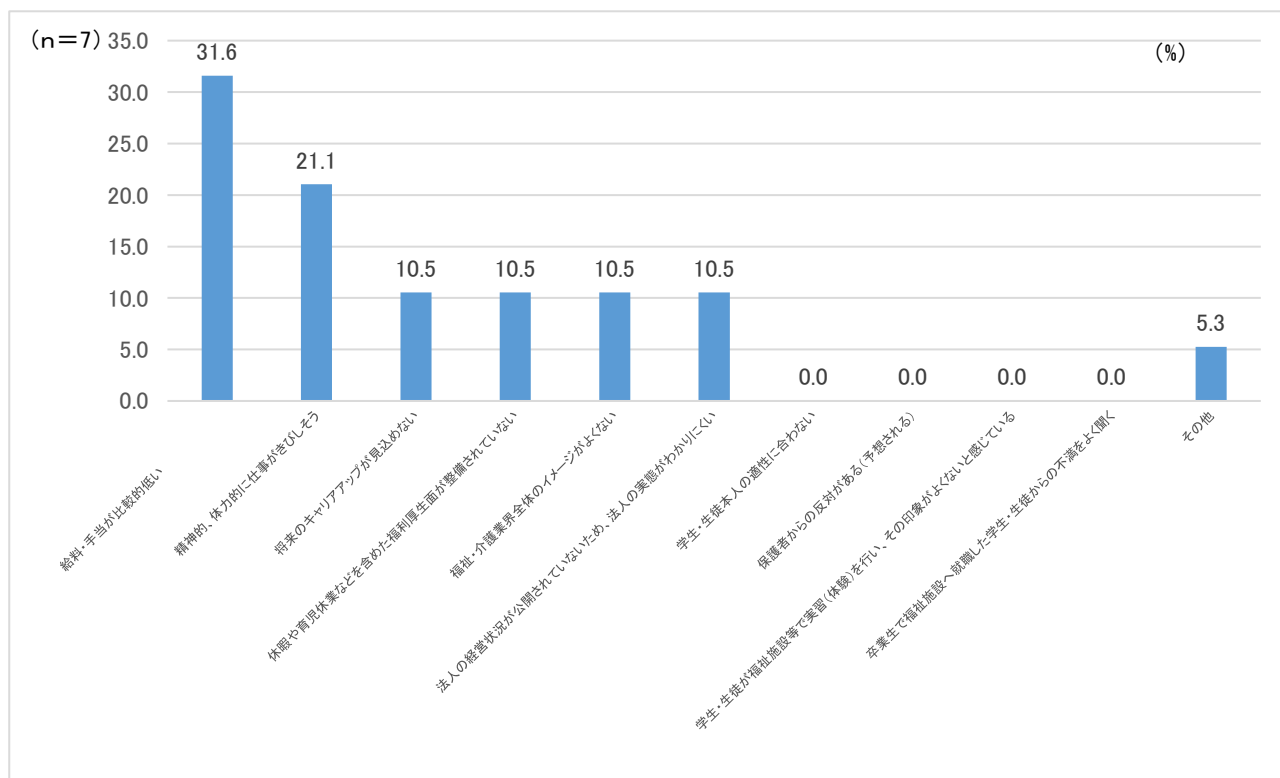
ただ、学生・生徒本人が望むためには進路指導の教職員からの勧めが影響すると考えられるため、「勧めたい」と思う教職員の割合を増やすことが先決と思われる。

図表 4-3 学生・生徒に福祉分野への就職・進学を勧めたいと思いますか。



4) 上記の質問において、学生・生徒にあまり勧めたくないと答えた進路指導担当教職員は 4.7% (7 名) であるが、その理由について尋ねてみると、最も多いのが給料・手当が比較的低いこととしている。また精神的、体力的に仕事がきびしそうという理由も 2 番目に多くみられた (図表 4-4)。

図表 4-4 (3) で「あまり勧めたくない」と回答した中で、その理由として当てはまるものを 3つ 選んでください。



5) 学生・生徒に福祉分野への就職・進学を勧めたいと答えた人について、その理由を自由記述によって回答してもらったが、それらの代表的な意見は以下の通りである

- 厳しい業界であるが、本人が希望すればよいと思う
- とても大変な仕事ではあるが、やりがいのある仕事であると思う
- 本人が希望する進路・就職先を大切にしたい
- 今後の高齢化社会において大事な仕事だと思うので
- やりがいのある仕事であると思う
- 本学には福祉コースがあり、専門科目の勉強や、ボランティア、実習に力を入れているから
- 覚悟があればやりがいを感じることができる、感謝される仕事だから
- 福祉に強い興味をもち、志が高い生徒には勧めたい
- 他人の役に立ちたいと考えている生徒が少なからずおり、適性のある生徒がいる
- 正当な社会福祉法人であるなら、その待遇面や将来性について安心できるはずである
- 2025 年問題・2035 年問題→社会で必要な、大切な仕事と思う。ただ、給与・環境に対しての改善を求める

この自由記述については、基本的には、福祉分野への就職・進学を勧めたいと答えている人の回答しかないので、肯定的な自由記述しかみられないのは当然のことであるが、それでも「厳しい業界であるが、本人が希望すればよいと思う」「とても大変な仕事ではあるが、やりがいのある仕事であると思う」「本人が希望する進路・就職先を大切にしたい」「今後の高齢化社会において大事な仕事だと思うので」など、進路指導担当の教職員が学生たちの後押しをしていることがよくわかる。

6) さらに、あなたが進路指導において福祉の仕事を勧める際、どのようなツール・支援が必要ですかと尋ね、自由記述により回答してもらったが、非常に多くの回答やコメントがあった。その代表的な回答は以下の通りであった。

- 具体的な施設の求人票や施設のパンフレットなど
- 各資格の必要性や職務内容に関する資料、他職種との比較ができる資料
- 福祉施設の見学・体験（随時）
- 資格と就業形態を示す
- 仕事の内容について、直接生の声を聞く機会を設けてもらうこと。大学や専門学校のフィルターがかかっていないことを知らせてほしい
- 詳しい勤務条件、離職率、優良事業所等の具体的情報
- 平均給与、勤続年数、離職率、生涯年収などの基礎データの公開が必要。でないと説得できない
- 仕事内容の理解、必要とされる資格、給与等、十分にわかった上での進路選択
- 待遇に尽きる。職場での支援、研修は充実していると思うので（給与、休みなど）
- 具体的な仕事内容、給与体系を書いた資料（パンフ等）と将来的（キャリアアップ）な展望も書かれた資料が必要
- 仕事内容、人間関係を含めた職場環境に関する情報。特に就職して日の浅い生徒が問題にぶち当たった際、どのような精神的ケアが準備されているかについての情報

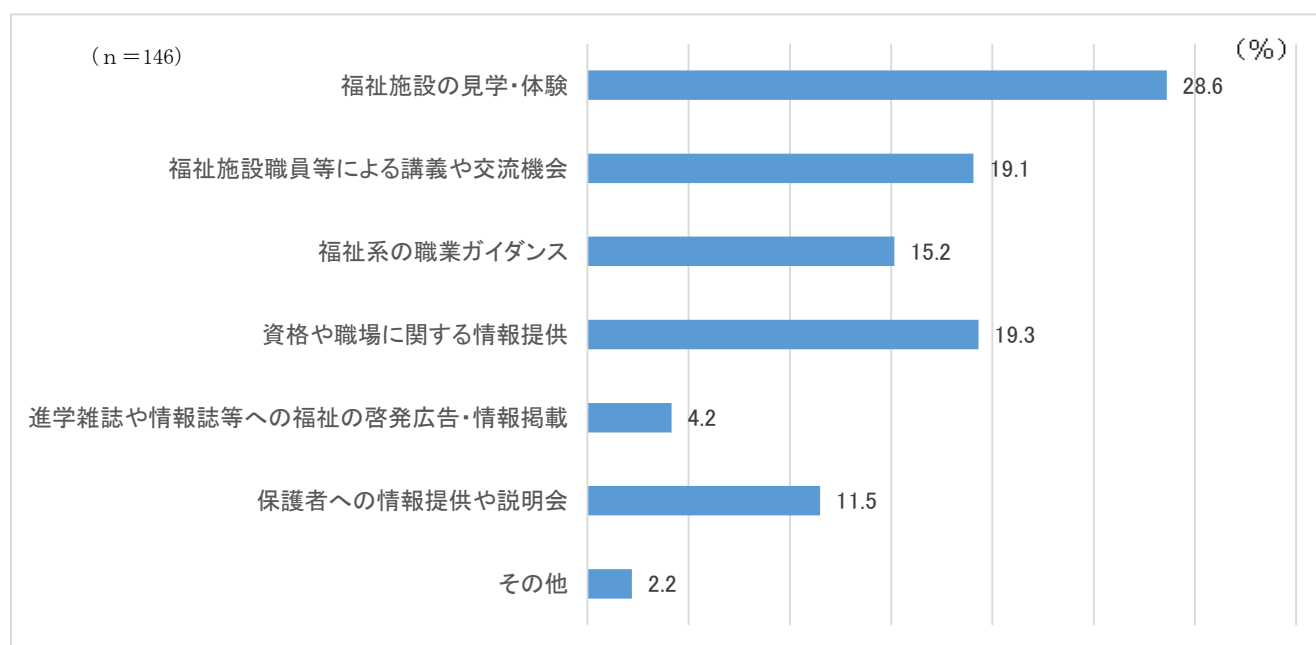
- 公務員、準公務員（社会福祉協議会等）での採用が増えること。民間の施設での、給与水準が上昇すること、成人男子としてのライフステージにおけるキャリア展開が十分できること
- 仕事の内容等を生徒が理解し、選んだのかを確かめると共に、継続できる自信があるのかを確認
- 高校生の場合、福祉関係の仕事に限らず、仕事内容が理解できないまま就職して、ミスマッチになるケースが多いため、特に福祉の仕事については事前に職場見学、説明会に出席するように指導している
- キャリアアップの具体的方法
- 施設見学だけでなく、インターンシップ等体験した後就職するか考えさせたいので、ぜひ多くの施設での受け入れを希望します
- 福祉施設で働かれている方の体験談や、実際に自分がそこで働く体験をしたり、見学が出来たりすれば、本人も納得できるので、こちらも勧めやすい
- 学生の相談をする時に必要な傾聴と受容の姿勢。及び福祉に関する職種の知識や資格。又、往々にして福祉方面へ就職しようとする学生は、夢を描いて就職し、現実とのギャップに落胆するケースが多いので、現実面も就職前に伝えることが大切
- ①就業者の体験談 ②年収・福利厚生についての説明 ③将来性があるかどうか
待遇の改良とイメージアップのCM、具体的な資料（給与額や就職先名等）
- 「人の役に立ちたい」「社会に貢献したい」と考えている生徒の気持ちを大事にする
- ①親子見学会②ユニフォームや予防接種の費用補助等、仕事を始めてからの事業所側の支援についての情報③インターンシップ
- 給与を含めた生活の安定感をアピールできるようなもの
- 仕事の理解や内容がわかるように具体的なガイダンスをと学校見学会が必要であると思う
- 地域にある福祉施設についての情報が記載されているホームページ。資格・免許を取得するためのロードマップ的な資料
- 各専門職の現場からの生の声や職場の様子の動画（やりがいを感じている人、キャリアUPした方、産休・育休を取りながら長く勤めている方、夫婦や親子で福祉関係の仕事の方など）
- 福祉の現場で働いておられる職員の方から働く立場での視点から話が聞ける機会があればよい。また働きたいと思う場でインターンシップという形が取れたらと思う

この自由記述の内容を分類すると、まず、はじめに就職先となる社会福祉関係の諸施設・機関サイドからのツールと言えるが、就職の際に職業選択の基準となる職場の様々な情報提供があげられる。その具体的な記述としては、「詳しい勤務条件、離職率、優良事業所等の具体的情報」「平均給与、勤続年数、離職率、生涯年収などの基礎データの公開が必要。でないと説得できない」「仕事内容の理解、必要とされる資格、給与等、十分にわかった上での進路選択」などがある。次に、学生が就職したあと、どのように働いていくのか、具体的なキャリアアップの内容やキャリアパスがある。これは施設個々で取り組む課題であるが、昇進や給与体系等のシステムについては、福祉業界全体の課題ともいえる。具体的な自由記述としては「成人男子としてのライフステージにおけるキャリア展開が十分できること」「各専門職の現場からの生の声や職場の様子の動画（やりがいを感じている人、キャリアUPした方、産休・育休を取りながら長く勤めている方、夫婦や親子で福祉関係の仕事の方など）」「具体的な仕事内容、給与体系を書いた資料（パ

ンプ等)と将来的(キャリアアップ)な展望も書かれた資料が必要」などがある。最後は、これも施設単位というよりも、社会全体で取り組むべき課題であり、人材確保・定着問題の根幹ともいえる重要なテーマである。それらの記述は、「待遇に尽きる。職場での支援、研修は充実していると思うので(給与、休みなど)」「給与を含めた生活の安定感をアピールできるようなもの」などであり、やはり福祉業界全体の問題である待遇や労働条件の改善等に関連するものであった。業界全体でイメージアップに取り組む必要がある。これらの自由記述の内容をみると、福祉への就職を勧める際に、就職進路相談の教職員が抱えている実質的な課題がよくわかる。

7) その次の質問として、「福祉の仕事に対して興味・関心を持ってもらうために有効なこと」をあげてもらったが、複数回答の結果は、図表 4-5 の通りである。最も多い回答が施設の見学・体験(28.6%)で、次いで資格や職場に関する情報提供(19.3%)、福祉施設職員等による講義や交流機会(19.1%)となっており、百聞は一見にしかずの諺のとおり、福祉施設を訪れたり、職員に実際に会う機会を作ったりすること、それに加えて資格や職場に関するタイムリーで適切な情報が提供されると学生・生徒の興味・関心を持ったきっかけになると考えられる。

図表 4-5 学生・生徒に福祉の仕事に対する興味・関心をもってもらうにはどのようなことが有効だと思いますか(複数回答)。



8) その次の質問は、「福祉の仕事に対する興味・関心を持つための有効なこと(自由記述)」を回答してもらったが、数多くの回答があった。それらの内容は、多岐にわたり、かつ具体的なものであったが、代表的なものは以下の通りである。

- 人とのかかわる仕事の中で「人を支える」という要素をもっとアピールし、マイナスイメージを払拭させる。特に賃金面でのイメージが先行し過ぎて子供が希望しても、保護者が反対するケースが多い
- インターンシップや職場見学、進学と同様に高校と現場をつなぐ支援

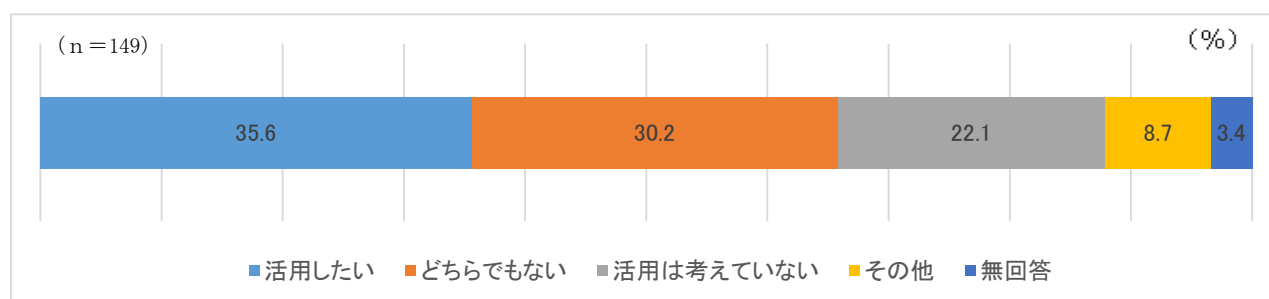
- 就職を希望する施設への本人及び保護者同伴での見学・体験
- 「福祉」の言葉が先行し、生徒は現場を見ることがないので、見学や体験を増やす
- 福祉協議会主催で機会を設けてもらうことが必要だし、情報提供を HP などを出してほしい。
- 福利厚生面に関する情報。職員間の人間関係
- 仕事のやりがいを感じさせる話を聴く。給与体系を知る話を聴く（生活の保障）
- 就職年数の少ない（3～5 年くらい）職員を囲んだ座談会。できれば複数の施設から来てもらった方が、それぞれの施設の職場環境の違いがわかってよいと思う
- 今年度の生徒に関しては、中学生時のトライやるで決心した生徒、家族の誰かが介護の仕事をしているという生徒が多く、仕事の内容を良く知っているということが、選んだ理由だった
- 社会福祉協議会と学校との連携
- 福祉＝大変という社会的イメージが（マスコミによって）ついているので、そのあたりを正しく説明する必要がある
- 職員の方にお話を聞く（仕事内容、なぜめざしたのかなど）。1 日体験など（本当は3 日～1 週間ぐらいが良いのではないかと思います）
- インターンシップで就職前に事前に体験をすることが大切である
- 講演活動やパネルディスカッション
- 施設を見学し、日常の業務の説明を受けるだけでなく、取得できる資格や、将来のステップアップのイメージができることが有効だと思います
- スカイプなどを使った様々な進路相談システム
- 広報活動、例えば AC（公共広告機構）によるテレビコマーシャル（こんな仕事です、やりがいがあります、感謝されますなど）
- ①見学、体験や職員との交流、ガイダンスなどを通し、生徒が福祉の仕事についてより具体的なイメージを持てる内容②職業選択について、保護者の影響が大きいと思われるので、保護者に働きかける内容
- 福祉施設の職場環境や働きやすさについての分かりやすい説明、女性に対しての育休、産休の充実や子育てしながら働きやすいという内容の説明
- 福祉といっても、さまざまな分野があり、その違いなどの説明が必要だと思います
- 学生・生徒に近い年代（入職 3～7 年ほど）から、スキル UP の状況が身近に感じられる。卒業生の先輩による仕事内容の説明や、福利厚生の活用状況、働き易さなど、フリートークできるような雰囲気です話を聞く、質問すること
- 地元を中心とした就職フェアの開催が、春・夏あたりに定着されたらと思う
現場の方の輝いている姿を生徒に感じさせる

上記の自由記述は様々な内容の回答があり、それらを整理するのは困難な面もあるが、共通項として考えられるのは、福祉業界全体のこととして、本調査のテーマともなっている「福祉の仕事のイメージ」がマイナスにとらえられている点があげられる。具体的な記述としては、「人とかかわる仕事の中で「人を支える」という要素をもっとアピールし、マイナスイメージを払拭させる。特に賃金面でのイメージが先行し過ぎて子供が希望しても、保護者が反対するケースが多い」「福祉＝大変という社会的イメージが（マス

コミによって) ついているので、そのあたりを正しく説明する必要がある」などがあった。そして、これらのマイナスイメージを払拭する方法として、マスコミを使ったり、社会福祉協議会のような公的な団体を使ったり、もっと福祉現場の生の声を聞いたり、学生らが現場等で実際に体験してもらったりなどの意見が出されていた。これらの生の意見は、若者に直接就職進路相談を行っている現場の声でもあるので、今後の対応策に活かしていく必要があるだろう。

9)「福祉人材センターが実施する体験学習や就職ガイダンスを活用したいか」については、「活用したい」と思う進路指導担当者は35.6%で、「活用は考えていない」は22.1%である(図表4-6)。「どちらでもない」や「その他」、「無回答」が多いことをどのように受け止めるかは判断の分かれるところであるが、4割近くが活用したいと考えていることは重要であるため、さらに広報等による機会の推進が望まれる。

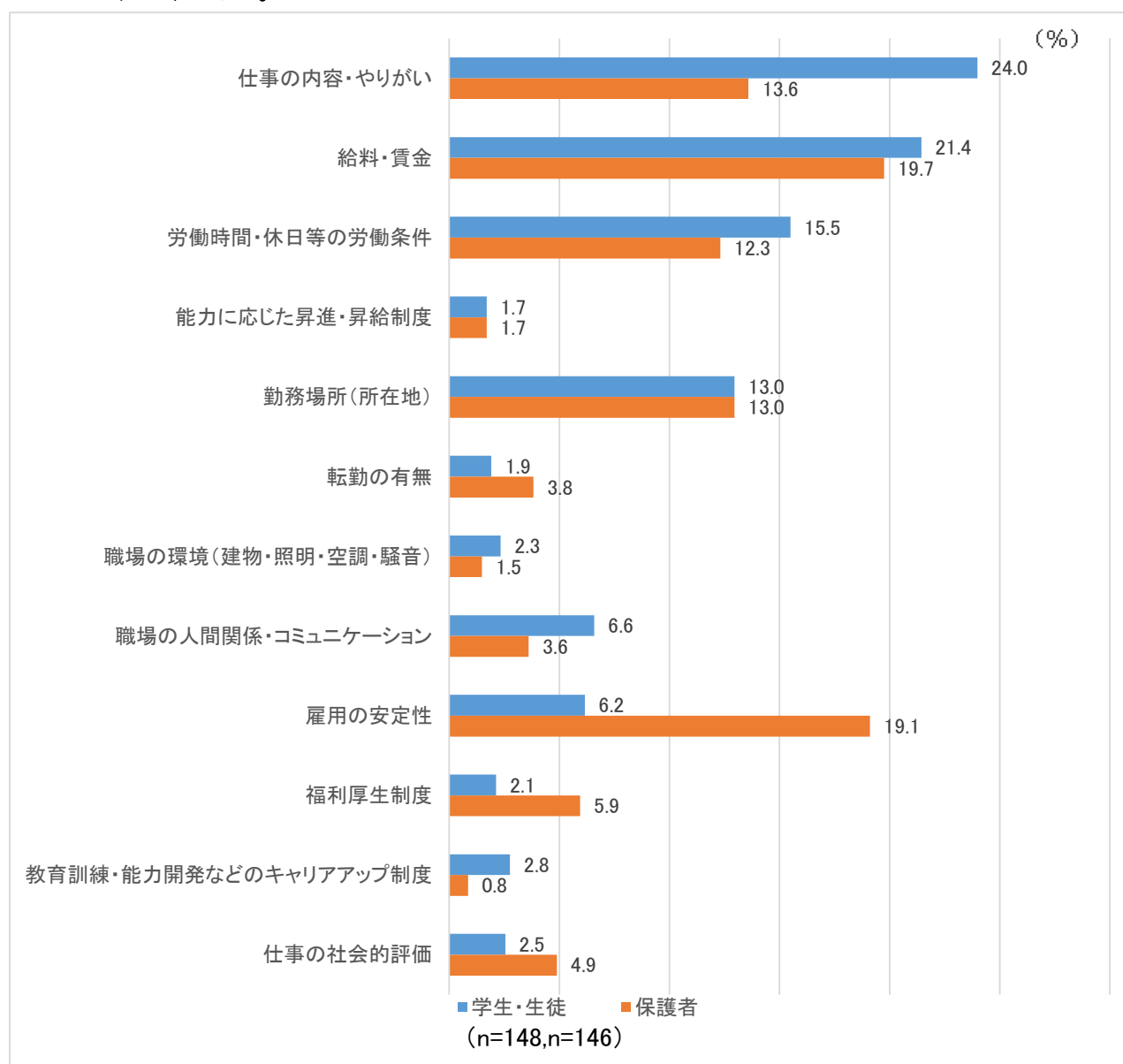
図表4-6 福祉人材センターが実施する「福祉体験学習事業」や「福祉の就職ガイダンス」等を活用したいと思いますか。



10) 進路指導の教職員からみて、「学生・生徒や保護者が仕事を決めるにあたって重視すること」は何だと思いかを質問した。その結果は、図表4-7の通りであるが、学生・生徒が重視するものとして最も多いのが「仕事の内容・やりがい」で24.0%、次いで「給料・賃金」の21.4%、3位は「労働時間・休日等の労働条件」の15.5%である。

一方、保護者の場合は、最も多いのが「給料・賃金」で19.7%、次いで「雇用の安定性」で19.1%、3位は「仕事の内容・やりがい」の13.6%となっており、本人と保護者のどちらも多いのは「給料・賃金」となっている。学生・生徒は「仕事の内容・やりがい」を最も重視すると思われるが、保護者は「雇用の安定性」を最も重視する傾向にあることがわかった。

図表 4-7 あなたが日頃の進路指導を通じて、学生・生徒、またその保護者が仕事（就職先）を決めるにあたり重視すると思うことは何ですか。以下のうち当てはまるものにそれぞれ3つまで○をつけてください。



1 1) 次に、「進路指導をするうえで困っていること（自由記述）」は何か、回答してもらった。本自由記述の項目についても具体的かつ熱心な回答が多くあったが、代表的な回答は以下の通りである。

- 就職、進学ともに地元企業や学校が少ないこと。そのため、生徒が働く意義や勉強の意義について、まともに考える機会が少ない
- 1、2年生でも欠席、遅刻が多く、3年生になっても改善されない状況で、進路として、就職を希望する場合。家庭に経済力がないと、進学に変更することもできず、就職受験は、どの企業でも不採用であり、フリーター、アルバイトとして卒業せざるを得ない
- 福祉関係の情報はマスコミ関係の情報が多く、マイナスイメージが強いので、公平な立場での情報を知りたい

- ハローワークの求人票の中にもブラック企業が混在していることで、実態をつかむのが難しい
- 家から通えるという制限、給料が低い、体力が必要、という意識
- 保護者の理解。特に金銭面で、いつまでに、どれだけの金銭を準備しなければならないかということ
を保護者が理解できていない場合が多々見受けられる。情報として保護者に提供しても、それに対する資金計画が、とてもずさんで、結局お金が用意できず、急に進学から就職に変更する生徒が毎年数名でてきている
- 認知されて日が浅い職種でもあり、生涯その職業でやっていけるかどうか分からないので、生徒がその道へ進むべきかどうか不安
- 生徒が希望する職種がない場合。生徒自身の働く場所の希望がない場合
- 進路指導を担当する教員の人員不足のため、一人一人の個人に応じたきめ細やかな指導が継続的に難しい（可能な限りの努力はしているが…）
- 高校生、特に女子に対して夜勤のある仕事は勧めにくい
- コミュニケーション能力のある生徒でないと適性があるといえない
- 持病を持っている生徒に対する企業の受け入れ態勢
- 自分の働く姿をどのようにイメージさせるか、本当にやりたいことは何か、ということを明確にさせるのが難しい
- 学生の低年齢化が進み、社会常識や一般常識を知らない学生が増加している。そのため、予期していないことまで説明する必要が生じている
- 教師の意識不足
- 親離れ、子離れができづらくなっていること
- メディアの影響（額に汗して働くことの大切さを教えたいが）
- 複合施設においては、配属先が就職してから決まるケースが多く、学生によっては希望以外の種別施設になることに不安を持ち、受験につながらないことがある
- 労働条件や待遇面の情報
- 福祉の仕事を学校としては勧めているが生徒や保護者が拒否するケースが多い
- 現在福祉関係の仕事を希望する生徒は少ない。その理由は仕事がきついわりに給料等の待遇面が悪いといわれているからだとおもっています。そうではないという正確な情報を頂けないと生徒には勧めにくい
- 障がい者支援、児童福祉分野での求人情報について、正規職員が少ないように感じる。また、複合型の法人での採用について、最初に配属される施設の分野が、選べない、ギリギリまでわからないといった学生に不利なことが多い
- 基本給のUP、年収の開示、スタッフに対する理解度が企業によって差があり、低いので学生への説明に苦慮する場合がある
- 就職活動そのものを開始するのが大変遅くなってきている。具体的に自分が働く、働いている（未来）ことをイメージすることが難しくなっている
- 福祉系の団体は、民間企業と異なり、決算報告などの情報がないため、客観的なデータに基づいた案内を行いにくい
- 近年、就職よりも大学進学の方が簡単になり、保護者も大学進学を要求することが多くなった

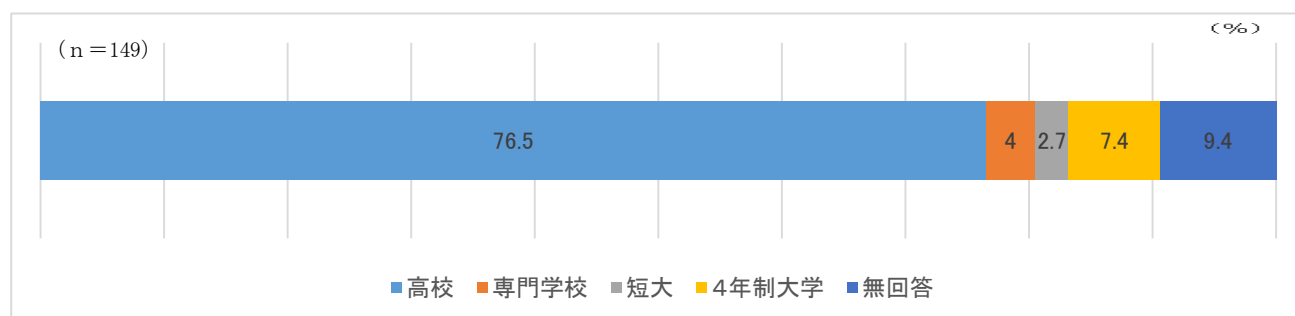
上記の自由記述を簡単にまとめると、まず、困り事の内容が①就職進路相談担当の教職員自らの課題や問題であること、②指導の対象である学生自身の課題や問題であること、③その保護者の課題や問題であること、④その困り事が社会全体や社会自体にあること、この場合は、福祉分野が就職先であるので福祉業界の課題や問題であること、の大きく4つに分けることができる。

最初の課題については、進路指導担当教職員の性別や経験、さらに学校の体制も関連している課題であり、具体的な記述として、「教師の意識不足」「進路指導を担当する教員の人員不足のため、一人一人の個に応じたきめ細やかな指導が継続的に難しい（可能な限りの努力はしているが…）」などがあつた。2つ目については、進路を考える当人である学生・生徒自身の問題もあるが、保護者の問題を指摘する声も少なくなかつた。「近年、就職よりも大学進学のほうが簡単になり、保護者も大学進学を要求することが多くなつた」「福祉の仕事は学校としては勧めているが生徒や保護者が拒否するケースが多い」「1・2年生でも欠席、遅刻が多く、3年生になっても改善されない状況で、進路として、就職を希望する場合。家庭に経済力がないと、進学に変更することもできず、就職受験は、どの企業でも不採用であり、フリーター、アルバイトとして卒業せざるを得ない」などの意見があつた。最後については、これまでも何度も指摘しているが、福祉労働の社会的な評価の低さ、処遇、労働条件や労働環境の悪さなどの福祉分野全体の課題である。これは、社会全体の構造的な問題でもあるので、簡単に解決できる問題ではないが、就職最前線である学生や進路指導の教職員にとっても大きな問題となっていることは間違いない。具体的な記述としては、基本給のUP、年収の開示、スタッフに対する理解度が企業によって差があり、低いので学生に説明に苦慮する場合がある」「労働条件や待遇面の情報」などがあつた。

II 【基本的属性】

1 2) 回答者のうち最も多かつたのは、図表 4-8 の通り、高校の担当者であり、76.5%であつた。

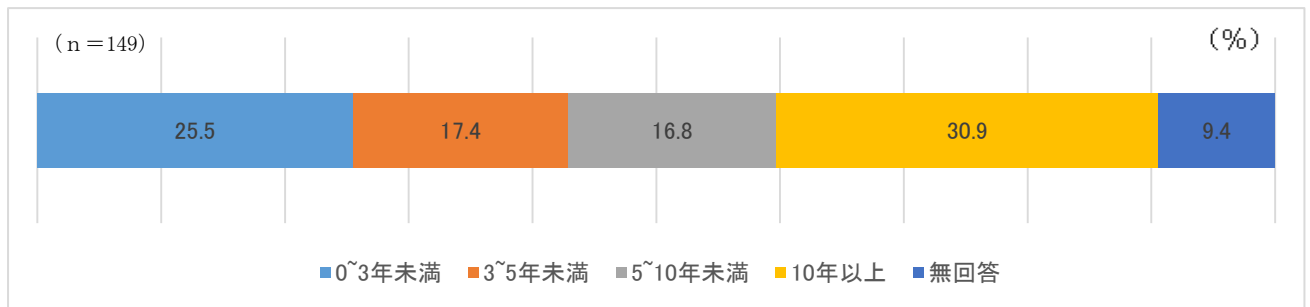
図表 4-8 担当者の属性



1 3) 進路指導の経験年数

進路指導の経験年数は、3年未満の比較的短い者から10年以上の長い者まで様々であつた。結果は、図表 4-9 の通りである。

図表 4-9 経験年数



1 4)「現在の福祉業界、福祉施設に期待すること（自由記述）」があれば記入してください、と期待について自由記述で回答してもらった。多くの回答が寄せられたが、回答は以下の通りであった。

- 生徒を施設見学に行かせたら職員の方から「この仕事はやめておいた方が・・・」「若いのだから違う資格を取った方がいい」などマイナスなことを言われるケースもあった。まず、働く職員の方の仕事に対するモチベーションを高めることが必要だと考えます
- 福祉の仕事はこれからの高齢社会でますます活躍が求められます。しかし、イメージかも知れませんが、安い賃金で、大変な仕事、施設によっては夜勤もあり、休日も安定しているのか、精神的にも体力的にも負担も多い、があります。それらを払拭しないと人は集まらないと思います。仕事がきついならその分賃金がほかの職種より高くとならないと一生でも介護の仕事をしようとは思えないと思います。そのお金はどこからとなると難しいですが、国、行政等とももっと真剣に社会のあり方を考えないといけません
- 卒業後の進路の一つとして、自信を持って勧められるだけの労働環境の構築を期待しています
- 社会的弱者の方々のお世話をするので、働く人には高い精神性を望みたい。また、お世話をする技術の向上も含めて、若い人達が成長できる研修と情報交換の場の充実等を期待したい
- これからの社会構造を考えると必要であるが、人が集まれば賃金は下がる。労働生産人口の減少、経済の陰りの中での働き方が明確になるように期待します
- 使命ややりがいだけで続けられる仕事ではないと考えるが、そのわりに待遇が悪すぎる。収入や勤務条件等を良くしない限り、優秀な人材は集まらないし、良好なサービスをすることは難しくなっていくと思う。今のままでは能力の高い生徒や親が目指したい職場のようには見えない
- 必要であることが間違いない業界であるし、外国人やロボットでまかなえるものではない。やはり、給与のアップ、イメージの回復が必要であると思う
- 若い人の離職率を下げ、長く定着できるような労働環境を築いて人材の確保に努めていただきたい
- 高齢化社会を迎え、福祉業界の必要性はますます高まってきているにも関わらず、低賃金、待遇の悪さなどは、改善していく必要がある。職員のやる気だけに頼っては限界がある
- 決してブラック化しないこと
- 現在も残っている悪いイメージの改善。資格取得の援助
- まだまだ福祉関係の仕事はキツイ・キビシイ・給料が安いなど希望する学生が少ないので、そのようなマイナスイメージを取り除く PR を今後とも期待します
- 職場見学の機会を一年を通して、定期的 to 実施し、学校に案内をしてほしい

- 勤労者の待遇改善が急務であることと経営主体の福祉法人の経営内容の公開が必要
- 労働条件が悪すぎる。長時間労働の改善、給与の改善を期待する
- 高校生は少なからず福祉業界に興味を持ち始めています。体験の機会を設けて頂き、安定した雇用を実現して頂けたらと思います
- コミュニティーとの一体化。「異物」的に捉えている世代や考え方の人々がいらっしゃるようにも思う。地域の中に溶け込み、自然に存在するもの、施設という感覚のコミュニティーであれば暮らしやすい業界にも違和感を感じないのでは？
- 給与が低い点を改善していくことが大事だと思います。福祉の質を目に見える（数値化など）ようにしていくことも必要だと思います
- 入所者に暴力を振るなどの悪いニュースが流れ、どうしてもイメージダウンしているように思います。福祉は非常に大切であるということを、国を挙げてアピールしてほしいと思います
- 福祉の仕事は精神的、肉体的にきつと感じている生徒が多い、兄や姉が福祉関係に勤めている生徒でもそう思っている。一方、福祉施設からは求人が多くあるので、若い人にやりがいなどを、伝える場や経験、見学の機会があればよいのでは
- 既存の施設の運営もままならない状態で、人材が不十分な状態で新設されているところも見受けまゝす。現場の職員が疲れきってしまっています。新設するのであればそれに見合った環境にあるのかどうか、より慎重に見極めることをしなければ、どんどん福祉離れがすすむと思います
- これから大変な時代に突入しますが、もっとも必要とされる職場です。専門性の低い身内人事で、現場が混乱しないように、人材を大切にすることになってほしいと思います。待遇の改善。環境の整備
- 常に外に向けて、若い世代に向けて情報を発信していきましょう。仕事のやりがいや魅力は、個々に違います。しかし、それが自らのプライドになっていたり、自分の感性を磨いたり、仕事を通して個人の成長に大きく影響を与えてくれる仕事であること、施設であること、業界であることに誇りを持って発信していきましょう
- 社会的に大変意義があり、仕事内容もやりがいのあるものが多いと思います。一方で、親世代の中には、誤った認識を持つ人達も少なくありません。是非、福祉業界の実態を幅広く周知して欲しい

自由回答の多くが現状の福祉業界の仕事の大変さや課題、労働条件の悪さなどを指摘している一方で、そのやりがいや魅力、社会的な必要性や重要性、今後のニーズの高まりの可能性など、未来志向の回答も多かった。就職進路相談担当の教職員は、必ずしも社会福祉分野における就職や進学だけを学生に勧めている訳ではなく、様々な分野の進路を学生と検討している。そのような中でも彼らが福祉の仕事の大切や重要さを認識しているという点は、非常に意味のあることであるし、現場を含めて福祉業界にとっては強みとなるであろう。自由記述回答の中には、「社会的に大変意義があり、仕事内容もやりがいのあるものが多いと思います。一方で、親世代の中には、誤った認識を持つ人達も少なくありません。是非、福祉業界の実態を幅広く周知して欲しい」「社会的に大変意義があり、仕事内容もやりがいのあるものが多いと思います。一方で、親世代の中には、誤った認識を持つ人達も少なくありません。是非、福祉業界の実態を幅広く周知して欲しい」とあるように、福祉の現場サイド、学校教育サイド、就職進路相談サ

イドがそれぞれの立場で協働しつつ、福祉の仕事のイメージを広く周知し、今後、マイナス思考の認識を変えていくことが必要なことかもしれない。

4-3. クロス集計の結果

高校、専門学校、短大・4年制大学の就職進路相談担当の教職員を対象とした調査Ⅳは、回収したサンプル数が150名弱と少ないために、クロス集計を行っても、セルが空いてしまう（そのセルの回答が0あるいはそれに近い数字）クロス表が少なくはなかった。そこで、調査Ⅳでは、統計的に有意な結果が得られたクロス集計よりも、有意ではない、あるいは有意であっても「セル空き」があるために、カイ2乗検定を行い、一般化することが困難なクロス表であっても、解釈・考察を行う意義があると思われるクロス集計を取り上げ、考察してみたい。なお、ここで取り上げるクロス表は2つである。

最初のクロス表は、「就職進路相談担当教職員の属性別にみた福祉体験学習事業や福祉ガイダンス等の活用意向」とのクロス集計の結果である。結果は、図表4-10の通り、最も「活用したい」と考えているのは、4年制大学の担当教職員であることがわかった、短大の教職員は、母数が少ないこともあるが、活用には否定的である。また、高校の進路担当は、34.5%が「活用したい」、32.7%が「どちらでもない」、そして24.5%が「活用は考えていない」となっている。

図表 4-10 就職進路相談担当教職員の属性別と福祉体験学習事業や福祉ガイダンス等の活用意向とのクロス表

		福祉体験学習事業、福祉就職ガイダンスを活用したいと思うのか				合計
		活用したい	どちらでもない	活用は考えていない	その他	
高校	n	38	36	27	9	110
	%	34.5	32.7	24.5	8.2	100.0
専門学校	n	4	1	1	0	6
	%	66.7	16.7	16.7	0.0	100.0
短大	n	0	0	3	1	4
	%	0.0	0.0	75.0	25.0	100.0
大学	n	7	4	0	0	11
	%	63.6	36.4	0.0	0.0	100.0
合計	n	49	41	31	10	131
	%	37.4	31.3	23.7	7.6	100.0

2つ目は、「就職進路相談担当教職員の属性別に福祉分野に勧めたいかどうか」のクロス表であるが、図表4-11の通り、専門学校生と4年制大学の担当教職員がそれぞれの学生に「勧めたい」とする割合が50.0%と36.4%とそれなりに多いが、高校生の教職員は2.7%と極めて少ない。その一方で「学生が希望すれば勧めてもよい」が9割以上を占めており、高校生の場合は、福祉の分野に進むかどうかは、本人次第という面が強いことがわかった。

図表 4-11 就職進路相談担当教職員の属性別と福祉分野に勤めたいかどうかのクロス表

		学生に福祉分野への就職を進めたいと思うのか			合計
		進めたい	希望すれば進めてもよい	あまり進めたくない	
高校	n	3	104	6	113
	%	2.7	92.0	5.3	100.0
専門学校	n	3	3	0	6
	%	50.0	50.0	0.0	100.0
短大	n	0	4	0	4
	%	0.0	100.0	0.0	100.0
大学	n	4	7	0	11
	%	36.4	63.6	0.0	100.0
合計	n	10	118	6	134
	%	7.5	88.1	4.5	100.0

4-4. 調査Ⅳのまとめ

調査Ⅳは、調査ⅠからⅢまでの対象となった兵庫県内の公立・私立高校、専門学校、そして短大・4年制大学のいずれかで、就職進路相談を担当している教職員を対象としたものであった。合計 300 配布して、回収率が半数近くと、郵送調査としては比較的高い回収率であったことから考えると、担当教職員が学生・生徒の進路の一つとして福祉分野に取り組んでおり、それなりに福祉分野に関心を寄せている様子が見えてくる。

調査の結果を簡単にまとめると、まず、高校生、専門学校生、短大・4年制大学の学生・生徒らに対しても質問を行ったが、担当教職員が持っている福祉の仕事のイメージを尋ねた。回答の傾向は、概ね学生・生徒たちと大きく変わらないが、教職員の場合、学生・生徒たちよりも、福祉の仕事は専門性が必要な仕事であると同時に尊い仕事としても受けとめられる傾向が強いことがわかった。また、福祉の仕事が取得した資格が活かせると思う教職員は多く、これらのことから、学生・生徒たちよりも福祉の仕事の評価していることがわかった。

反面、福祉の仕事は、精神的な負担や身体的な負担が多く、途中で退職する者が多いというイメージを持っている教職員の割合も高く、肯定的な面だけではなく、否定的な面も理解していることがわかった。このことは、他の質問において、学生・生徒にあまり勤めたくないと答えた進路指導担当教職員に、その理由を尋ねると、給料・手当が比較的低い、また精神的、体力的に仕事がきびしそうという理由があげられていることからわかる。

このような担当教職員の福祉の仕事に対する理解度の高さについては、この件に関する自由記述の内容からみてもよくわかる。非常に多くの自由記述が寄せられたが、福祉の仕事をサポートしたり、福祉職への肯定的な見解が多い一方、低賃金などの労働条件や過酷な労働環境の現状について少なからず問題視する意見もみられた。

また、学生・生徒らに福祉の仕事をお勧めするかという質問については、本人が学生・生徒が望めば勧めてもよいとする者が9割を超えており、福祉分野の就職や仕事への理解が進めば、進路指導の教職員からの後押しも期待できる結果であった。

次に、本調査を通して、教職員も福祉の仕事を考える上で、学生・生徒らの福祉施設への見学、訪問、ボランティア体験などの福祉現場と接点を持つことが非常に重要なことであることを指摘していた。さらに、いくつかあった自由記述の欄で何度も見られた意見でもあるが、学生・生徒らと同様に、就職進路担当教職員も就職先となる社会福祉関係の諸施設・機関サイドに求めていることとして、詳しい勤務条件、

離職率、優良事業所等の具体的情報、平均給与、勤続年数、離職率、生涯年収などの基礎データなど、就職の際に選考の基準となる職場の様々な情報提供があげられる。これらの情報は、福祉の仕事を考えている人びとの間では、どのレベルにおいても求められているので、社会福祉の現場サイドは、今後、それらの情報を積極的に公表していく必要があるだろう。

また別の視点からの考察となるが、就職進路担当教職員が書いた自由記述をみていると、学生の進路を考える上で、重要なのが保護者の存在であり、調査結果からは、様々な情報に熱心な保護者に対してもしっかりとした就職情報を提供することが必要であることが示唆された。

以上のように、調査対象となった就職進路担当教職員は、福祉の仕事そのものの必要性や重要性、また、やりがいや意義などをしっかりと評価していることがわかった。高校の場合は、本人が望めば、9割がそれを否定せずに、勧めると回答しており、福祉系と思われる専門学校、短大・4年制大学の教職員は、積極的に福祉への就職を勧めていると予測される。この点からすると、近年、人材不足や人材難が叫ばれる福祉業界にとっては、若者の教育現場内に福祉職への就職を勧める援護体制が少なからず存在し、福祉職の将来性や保護者の支援の可能性から潜在的な労働力として期待できることは心強い結果ととらえられる。ただし、その一方で、福祉の仕事を考える当事者である学生・生徒および彼らの保護者、担当教職員は、就職先である福祉施設等に詳細な情報公開を求めている面があり、施設サイドとしては、これについては早急に対応する必要があるだろう。また、将来的な課題として、もう何十年も指摘されていることではあるが、福祉・介護の仕事の労働条件や労働環境の向上、福祉職の社会的評価の向上に対する取り組みは、今後、必須の課題となろう。これは、本調査において担当教職員が自由記述の欄で何度となく指摘していたことでもある。

最後に、本調査の結果をまとめていて気づいたことではあるが、本調査Ⅳにおいては、自由記述の欄で本当に数多くの意見、要望、提言、提案が出されていて、就職進路担当教職員の意識の高さ、進路指導の熱心さを感じた。それと同時に、担当教職員が抱えている課題や問題も把握することができた。それに対して、調査Ⅴあるいは全体のまとめのところで多少なりとも触れることになるが、福祉への人材を求めている福祉施設側の対策や対応はどうであろうか？本調査の回答の結果をみる限りでは、学生・生徒、担当教職員の方が福祉の仕事の問題に真剣に取り組んでいて、人材難の問題を抱えている当事者福祉現場サイドの方が熱心さに欠けている感が否めなかった。福祉人材の確保・定着は、福祉人材を求める需要サイドの福祉現場と、人材を送り出す供給サイドの教育機関との協働が必要ではなかろうか。

7. 調査報告Ⅴ

福祉人材の確保と定着に関する実態調査 （社会福祉施設）の結果

5－1．調査方法

兵庫県内の福祉施設を対象として、福祉人材の確保と定着に関する実態調査を実施した。調査対象者は、兵庫県内の福祉施設（1,116 施設）とした。調査方法は、兵庫県社会福祉協議会から各施設へ郵送による留め置き調査法を用い、後に調査票を送り返してもらった。

調査期間は、平成 28 年 1 月 25 日～平成 28 年 2 月 15 日であり、162 施設から回答があった（回収率 14.5%）。

調査項目については、添付にある調査票の通りであるが、施設種別、設置主体、設立年月、利用定員数、職員数などの基本事項、退職状況と採用状況、欠員状況などの人材確保の現状に関する項目、人材確保対策に関する項目などである。その他、いくつかの自由記述の項目がある。

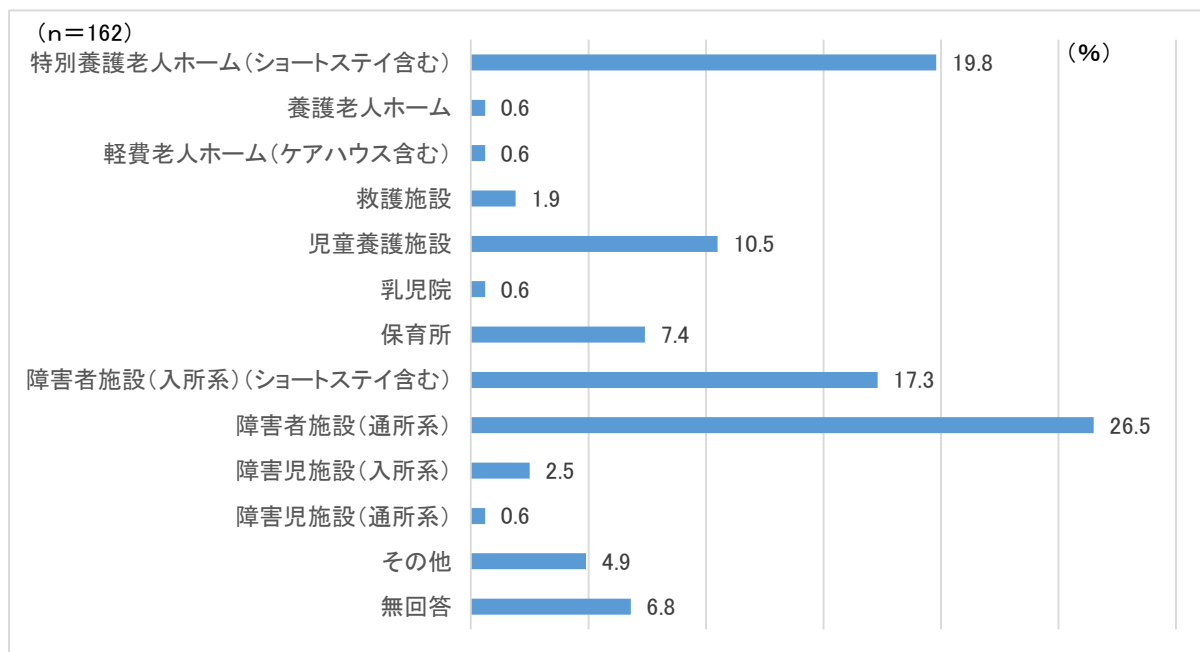
5－2．単純集計及び自由記述の結果

調査結果についてであるが、各質問項目に対する単純集計の結果は以下の通りである。

【基本事項】

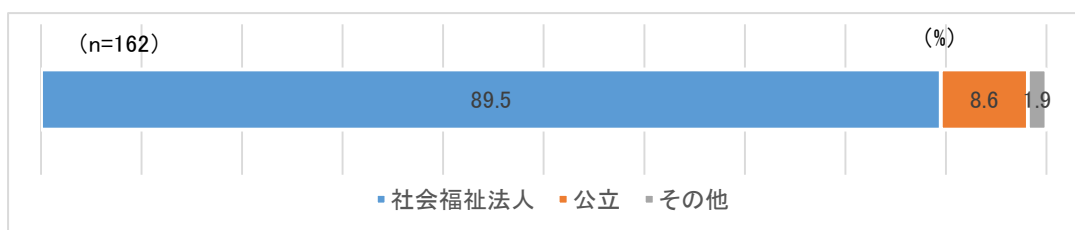
1) 「施設種別」調査の回答施設は障害者施設（通所系）が最も多く 26.5%、次いで特別養護老人ホームが 20% 近くあるものの、第 3 番目に多いのも障害者施設（入所系）となっており、4 割以上を障害者施設が占めていた（図表 5-1）。

図表 5-1 施設種別



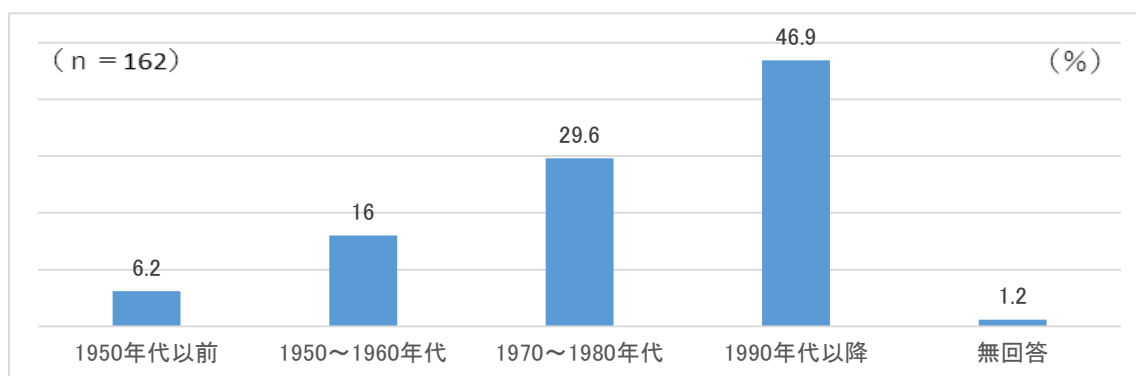
2) 「設置主体」調査対象である施設の設置主体についてであるが、図表 5-2 の通り、回答施設のほぼ 9 割が社会福祉法人で、約 9.0% で公立となっていた。

図表 5-2 設置主体

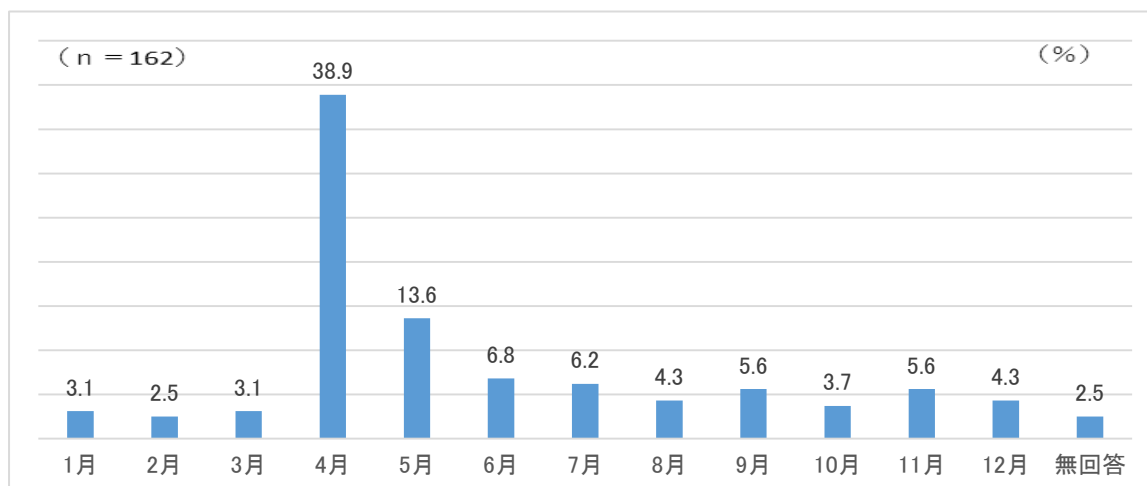


3) 次に、「施設の設立年月」に関する質問であるが、図表 5-3-1 の通り、回答施設の 5 割近くが 1990 年代以降に設立されており、開設の時期は 4 月が最も多い（図表 5-3-2）。一方で、1950 年代以前および 60 年代までに設立された 50 年以上の歴史をもつ施設も 2 割を超えていた。

図表 5-3-1 設立年

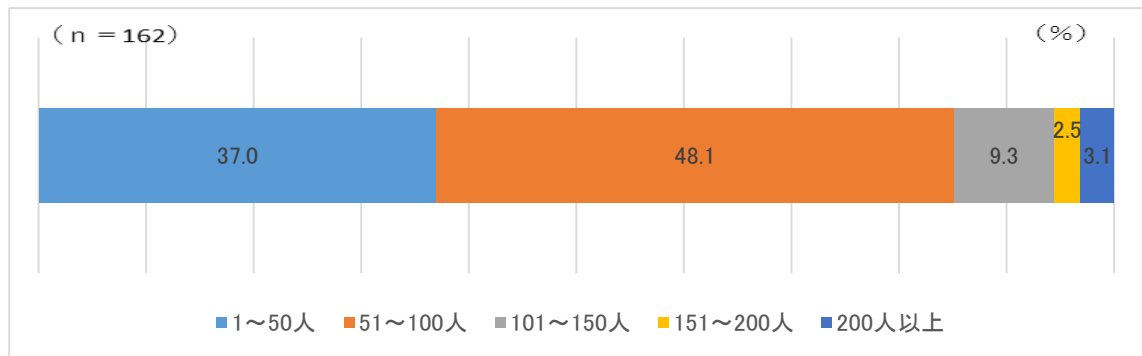


図表 5-3-2 設立月



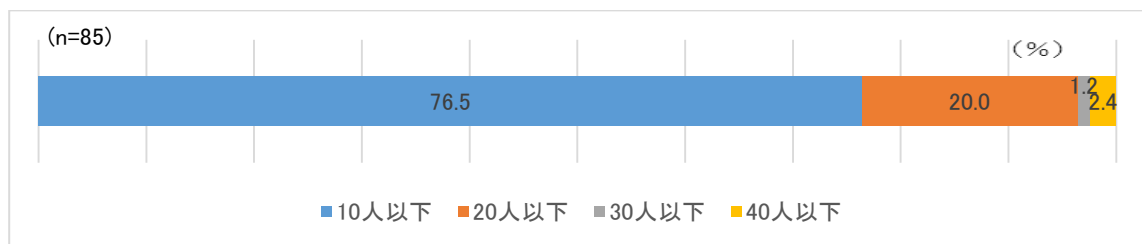
4) 各「施設の利用者の定員」については、図表 5-4-1 の通り、「51 人から 100 人」が最も多く 5 割近くを占めている。全体としてみると、利用者数が 100 人までの施設がほとんどで、8 割を超えていた。

図表 5-4-1 利用者定員



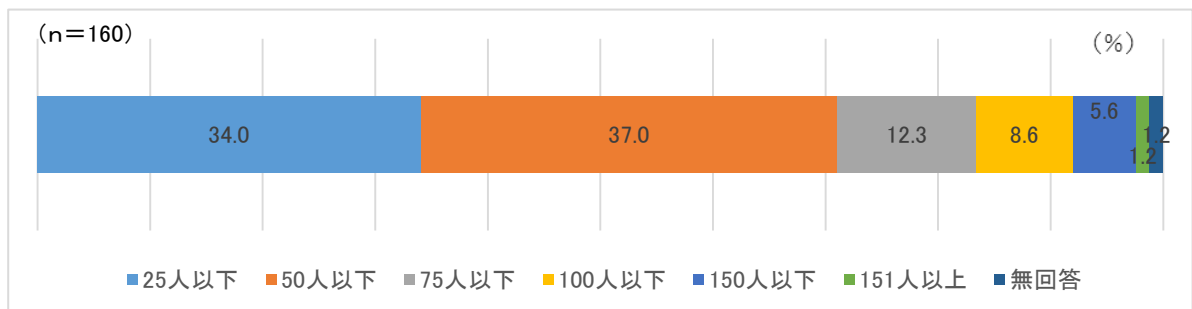
利用者定員のうち、ショートステイの利用者の定員を尋ねたが、結果は図表 5-4-2 の通りであった。「10 人以下」が 8 割近くとなっており、ショートステイは 10 人までの規模という施設が多くみられることがわかった。

図表 5-4-2 ショートステイの定員



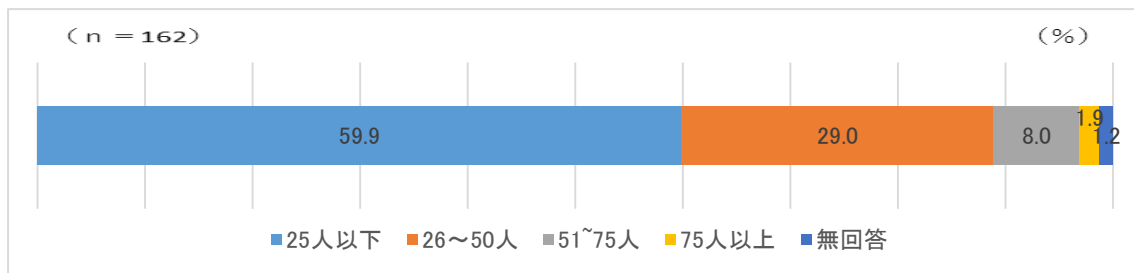
5) 次の質問項目は職員に関することである。「全体の職員数」については、図表 5-5-1 の通り、「50 人以下」が 37.0%で最も多く、次いで「25 人以下」が 34.0%となっており、50 人以下の比較的小規模な施設が全体の 7 割を占めていた。

図表 5-5-1 職員数



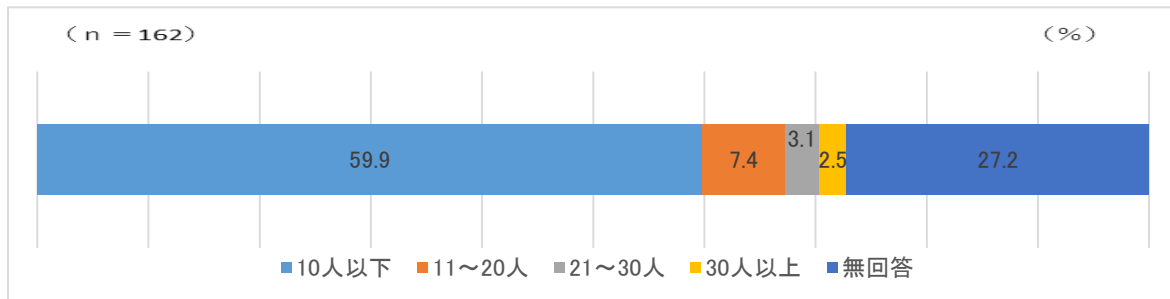
職員に関する副問として、正規職員数を尋ねたが、図表 5-5-2 の通り、「25 人以下」の施設が 6 割を占め、「50 人以下」を合わせると全体の 9 割近くとなっていることから、ここからも比較的小規模な施設がほとんどであることがわかった。

図表 5-5-2 正規職員

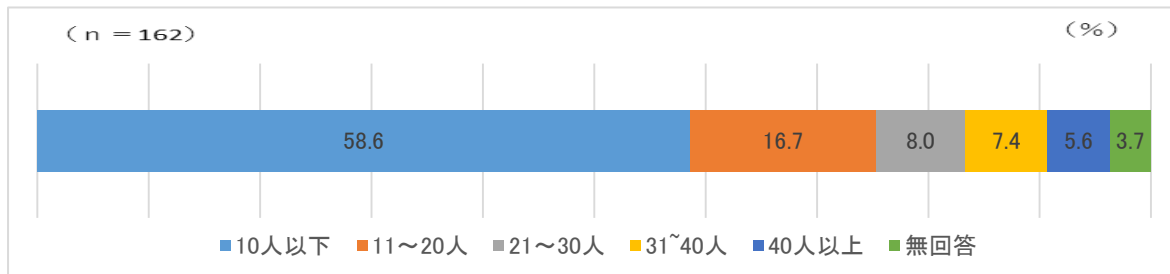


さらに、正規以外の常勤および非常勤・パートを尋ねたが、図表 5-5-3 と図表 5-5-4 のように、どちらも 10 人以下が 6 割近くを占めていた。

図表 5-5-3 常勤（正規外）



図表 5-5-4 非常勤・パート

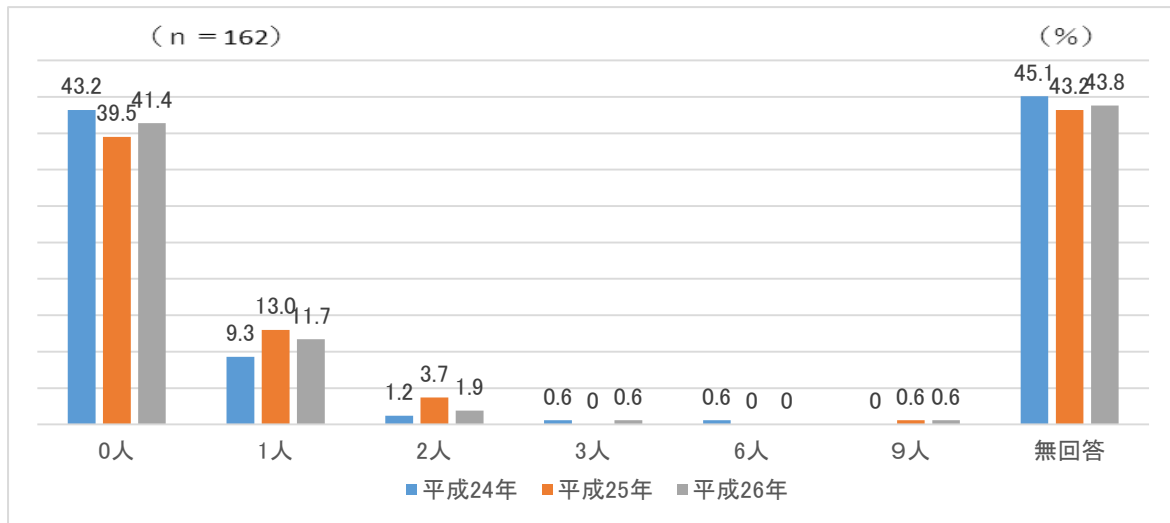


【人材確保の現状】

調査対象となった福祉施設に対して、人材確保に関する質問をいくつか尋ね、現場サイドの人材確保の現状を明らかにすることとした。

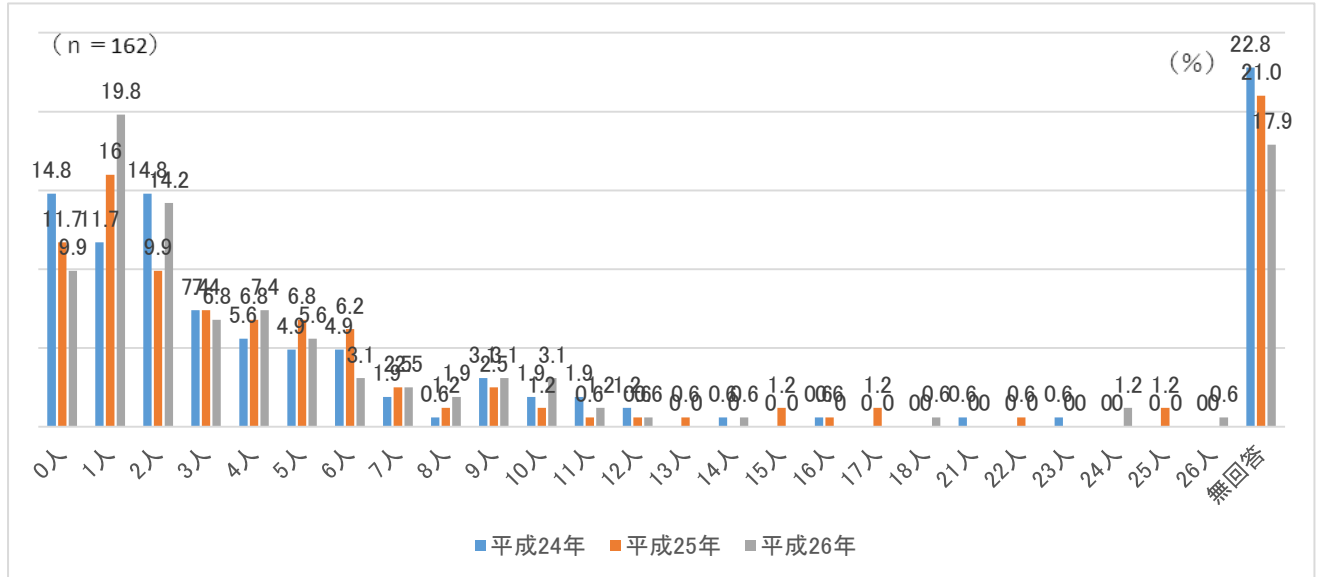
6)「退職状況と採用状況」についてであるが、平成 24 年度～26 年度の 3 年間に退職並びに採用した正規職員の人数を記入してもらった。まず、定年退職者の数については、図表 5-6-1 の通りであり、過去 3 年の間に定年退職者がいない施設が 4 割を占めていた。なお、本項目については、無回答の施設も 4 割近くあった。

図表 5-6-1 定年退職



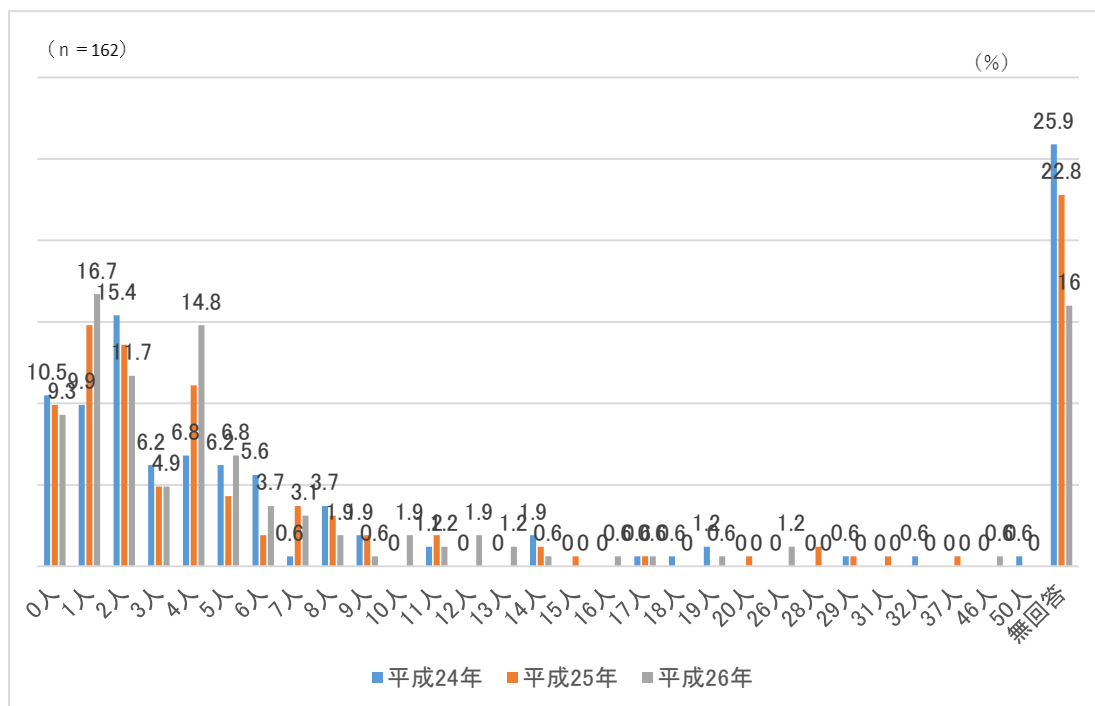
次に、定年以外の退職について尋ねた。結果は、図表 5-6-2 の通り、過去 3 年間をみると、各年平均 3 ～ 4 人が定年以外の理由で退職しているが、最小 0 人から最大 20 人を超える施設が存在していることがわかった。毎年 20 人を超える定年以外の退職者がいる施設は 2 % 前後となっていた。無回答は、2 割近くあった。

図表 5-6-2 定年以外の退職



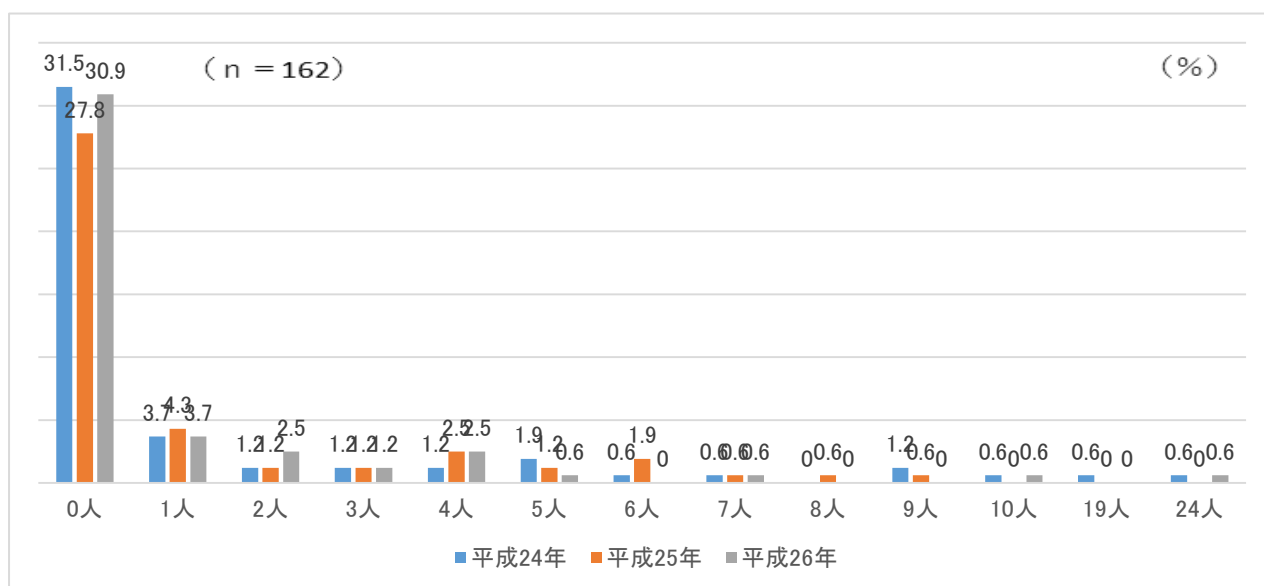
さらに、ここ3年間の新規の採用状況について尋ねたが、結果は、図表 5-6-3 の通りである。職員退職者の補充として毎年平均4～5人の職員を補充している実態がわかった。

図表 5-6-3 新規採用（退職の補充）



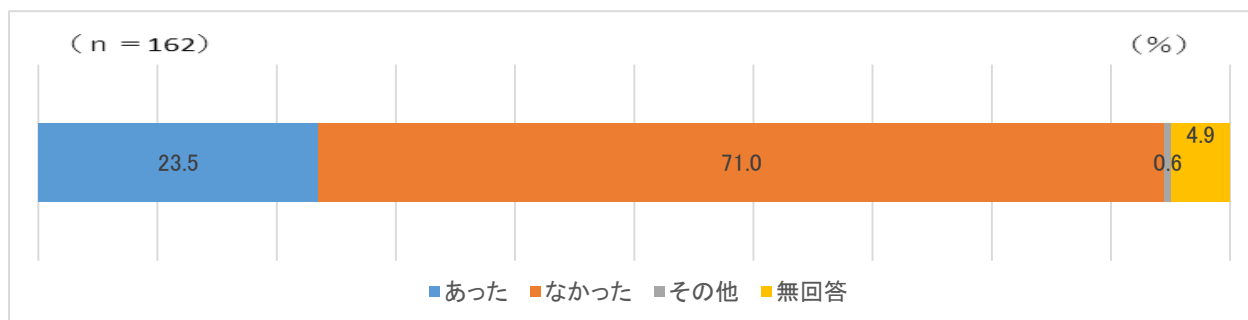
また、新規事業実施のため1人以上の職員を採用した施設について尋ねたが、図表 5-6-4 の通り、過去3年間のうち毎年3割程度を占めていた。

図表 5-6-4 新規採用（新規事業実施）



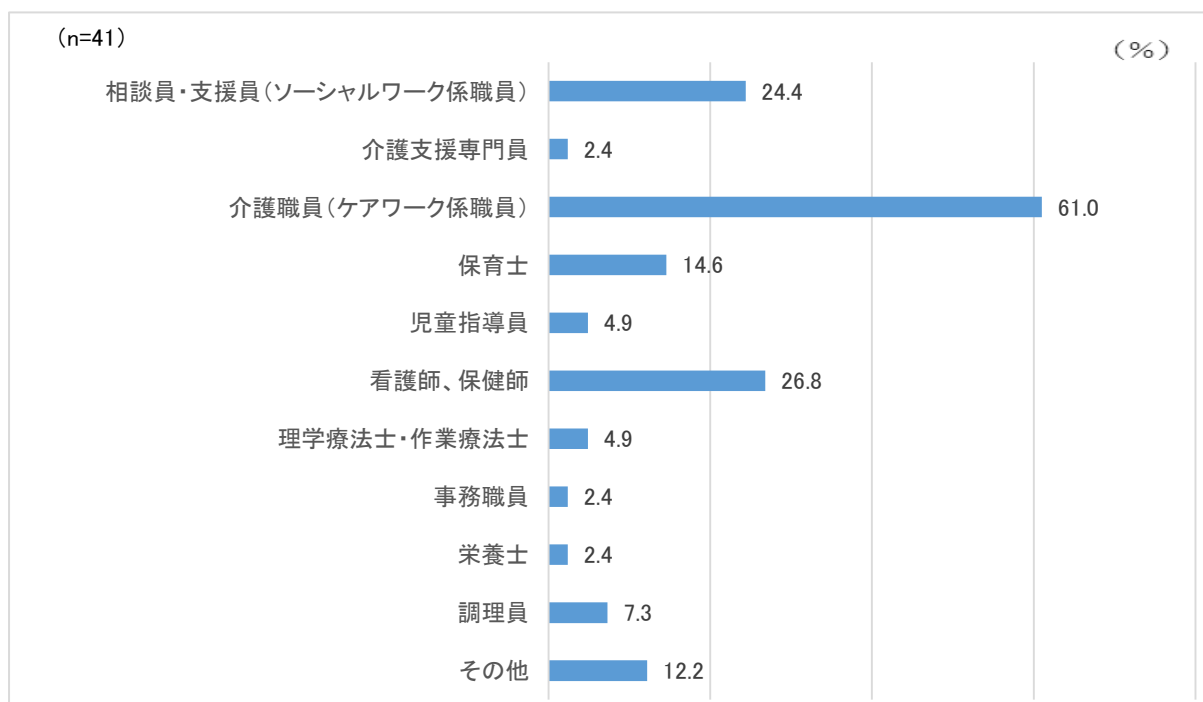
7) 福祉施設にとって人材は必要不可欠なものであるが、平成 27 年 4 月 1 日現在の欠員状況について尋ねた。結果は、図表 5-7-1 の通り、昨年 4 月 1 日現在で職員の欠員があった施設は 23.5%と約 4 分の 1 の施設が職員の欠員をかかえていることがわかった。

図表 5-7-1 昨年 4 月 1 日現在の職員の欠員状況



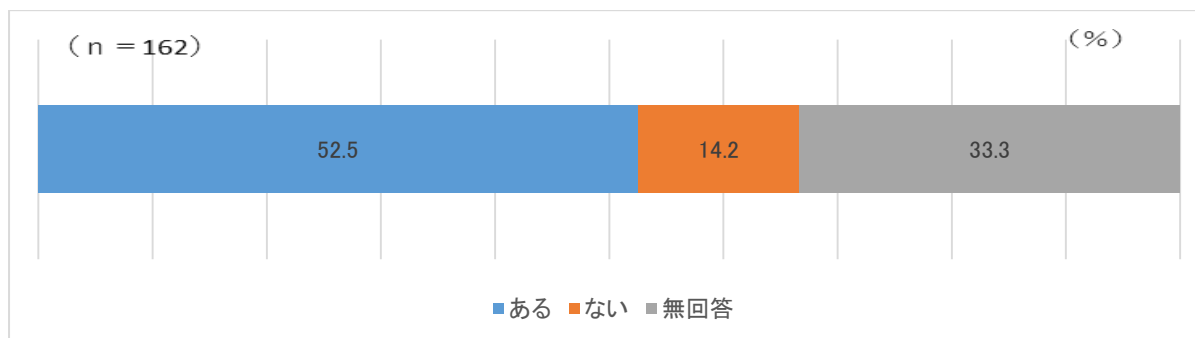
次に、欠員があった場合に欠員のある職種すべてを答えてもらった。結果は、図表 5-7-2 の通り、欠員のある職種は、介護職員が最も多く 61.0%を占め、次いで看護師・保健師が 26.8%、3 番目に相談員・支援員といったソーシャルワーク系職員 24.4%となっていた。

図表 5-7-2 欠員のある職種



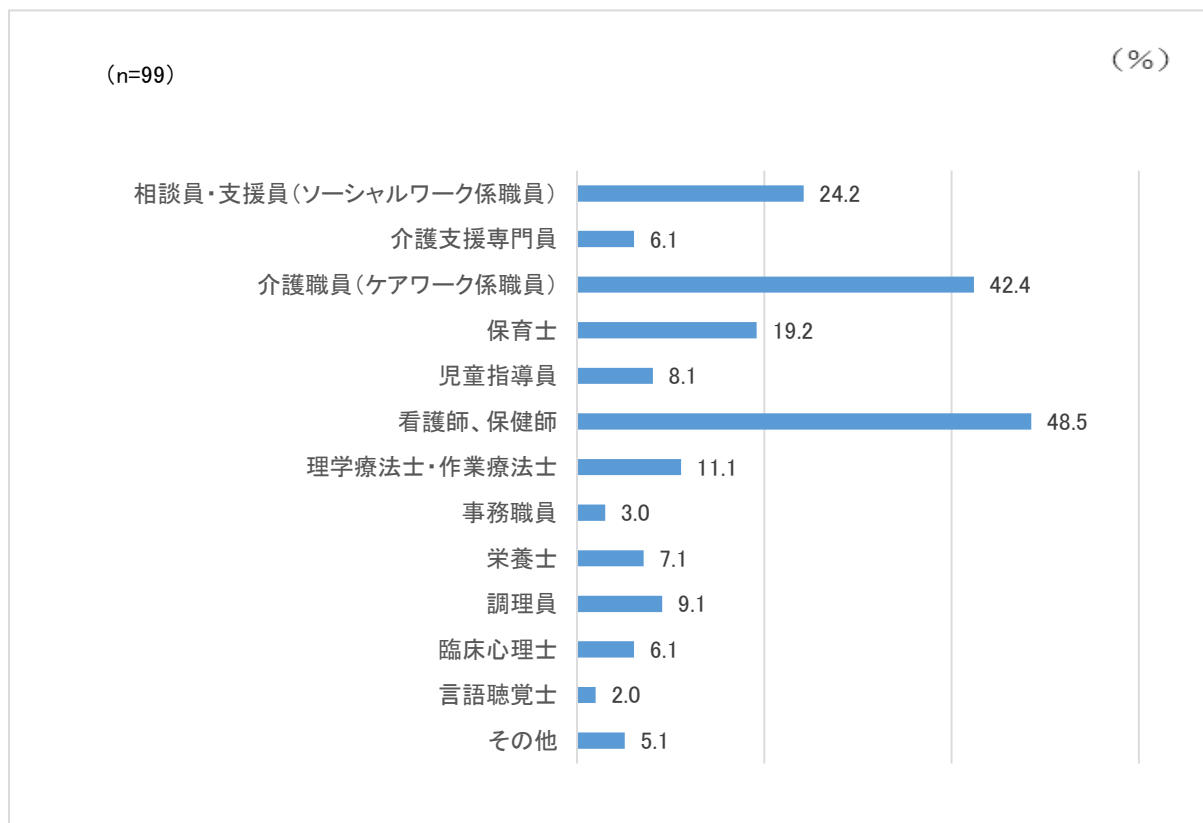
欠員補充が円滑に行えない職種があるかどうか、その有無を尋ねたが、「ある」と答えた施設は、図表 5-7-3 の通り、5 割を超えており、欠員があるだけでなく、その補充も困難な人材確保の課題をかかえている施設が半数以上であることがわかった。

図表 5-7-3 欠員補充の困難な職種の有無



欠員補充が円滑に行えない、あるいは困難な職種をすべてあげてもらったが、結果は図表 5-7-4 の通りであった。欠員補充の困難な職種で最も多いのが看護師・保健師（48.5%）で、次いで介護職員（ケアワーク系職員）（42.4%）とそれぞれ 4 割を超える施設がこれらを欠員補充困難な職種と回答している。

図表 5-7-4 欠員補充が円滑に行えない職種

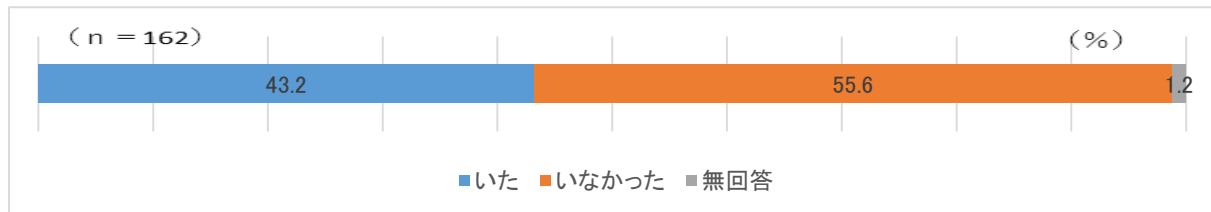


【人材確保対策について】

8) 次の項目は、「施設における人材確保対策の現状」を尋ねたものであるが、まず、休暇等の現状を尋ねた。平成 26 年度の有給休暇の取得率の平均は 36.9%、最頻値は 20.0%となっていた。

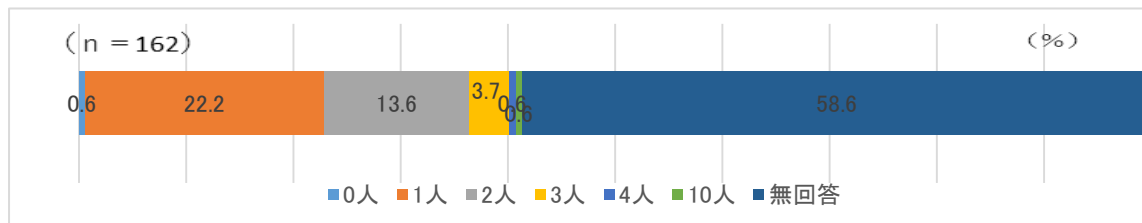
次に、平成 26 年度の施設全体の有給休暇の取得率を尋ねたが、結果は図表 5-8-1 の通り、有給休暇を取得した職員は 4 割を超えてはいたが、職員全体としてみると、十分な有給休暇の取得率とは言えず、今後、取得率を高めていく努力が必要だと思われる。

図表 5-8-1 有給休暇の取得率



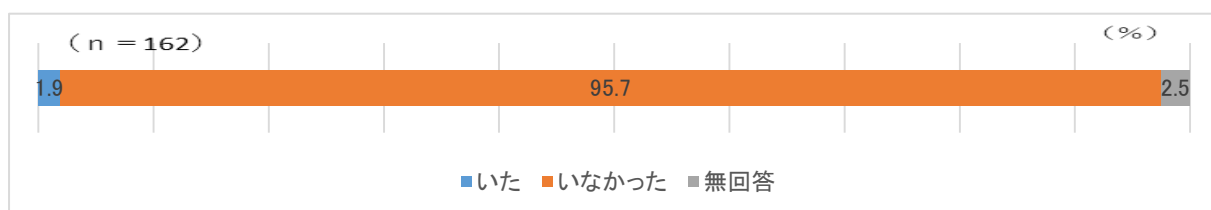
平成 26 年度に育児休業を取得した職員がいたかどうかを尋ね、「いる」と答えた場合は、その人数を記入してもらった。結果は、図表 5-8-2 の通り、回答のあった施設全体でみると、取得した人数が 1 人（22.2%）、2 人（13.6%）となっていた。その一方で、無回答が 6 割近くであった。これは子どもの有無とも関係するので、一概に取得率が高いあるいは低いなど評価することはできない。しかし、一般論として無回答が多いことにより、施設における育児休業の取得率を客観的に評価することは難しいのが現状であるが、施設としては、このような基本的なデータを公表することが求められる。

図表 5-8-2 育児休業の取得状況

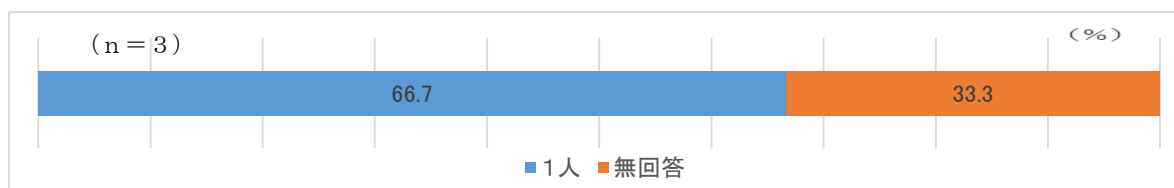


さらに、介護休業を取得した職員がいたかどうかを尋ね、いた場合は、その人数を記入してもらった。図表 5-8-3 の通り、介護休業を取得した施設は、わずか 1.9%（3 施設）のみであった。

図表 5-8-3 介護休業の取得した状況

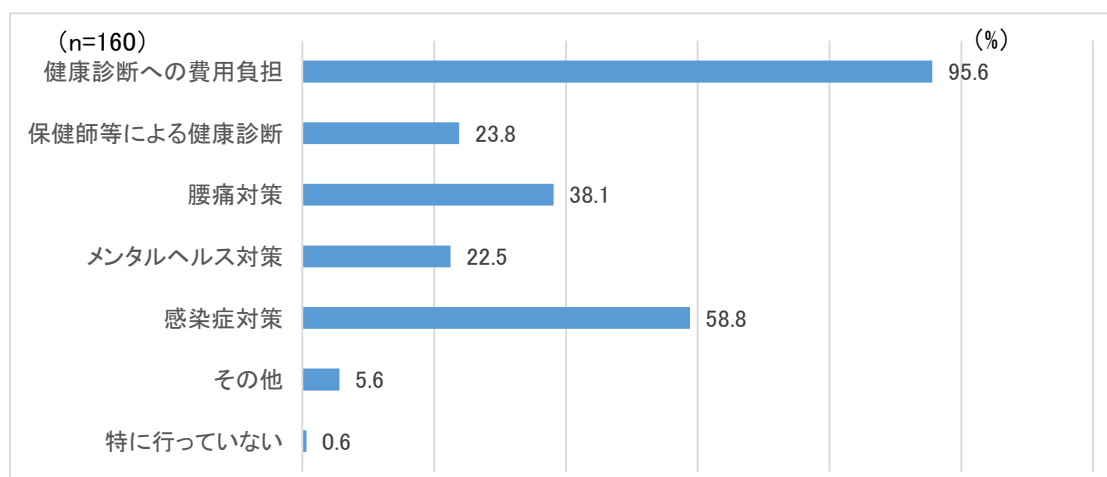


介護休業を取得した人数は2施設でそれぞれ1人であった。



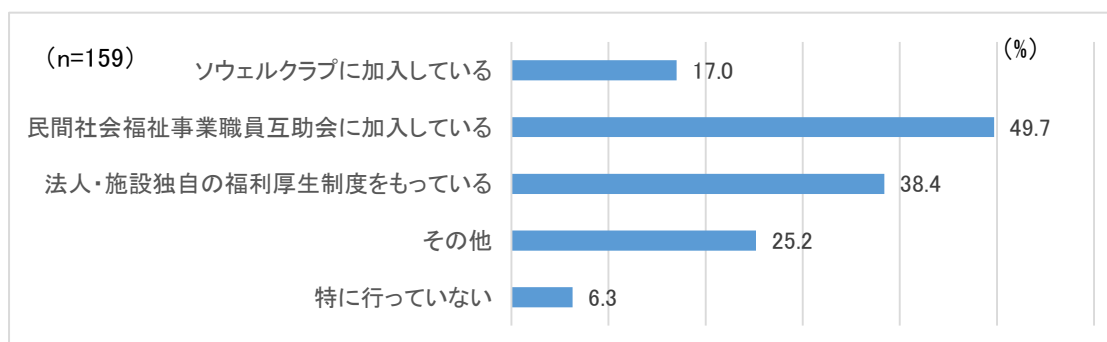
9) 施設における職員の退職や欠員状況に影響を与える要因として、雇用している福祉施設等が組織として「職員の健康管理対策等」をしっかりと行っていることがあげられる。そこで、どのような健康管理対策を行っているのか、複数回答で答えてもらった。結果は、図表 5-9 の通り、職員の健康管理対策で最も多かったは健康診断への費用負担で、95.6%とほとんどの施設が実施していることがわかった。また感染症対策は6割近く、さらに腰痛対策も4割近くの施設で行っている。一方、特に行っていない施設もあることがわかった。

図表 5-9 職員の健康管理対策の状況（複数回答）



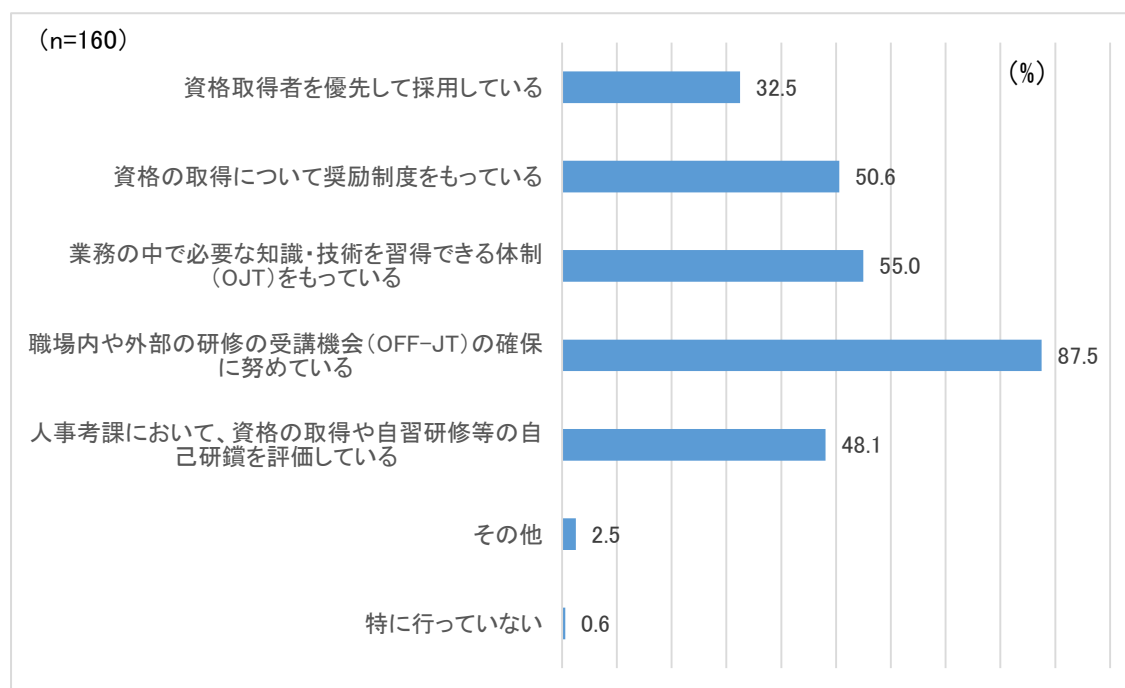
10) 健康管理対策と同様に、職員の労働 QOL を高める別のもう一つの要因として、職員の福利厚生をあげることができる。職員の福利厚生事業について複数回答で答えてもらったが(図表 5-10)、最も多かったのは民間社会福祉事業職員互助会に加入している施設で5割に上っていた。また4割近くの施設が独自の制度をもっていた。福利厚生事業についてはそれなりに取り組んでいることがわかった。

図表 5-10 職員の福利厚生事業



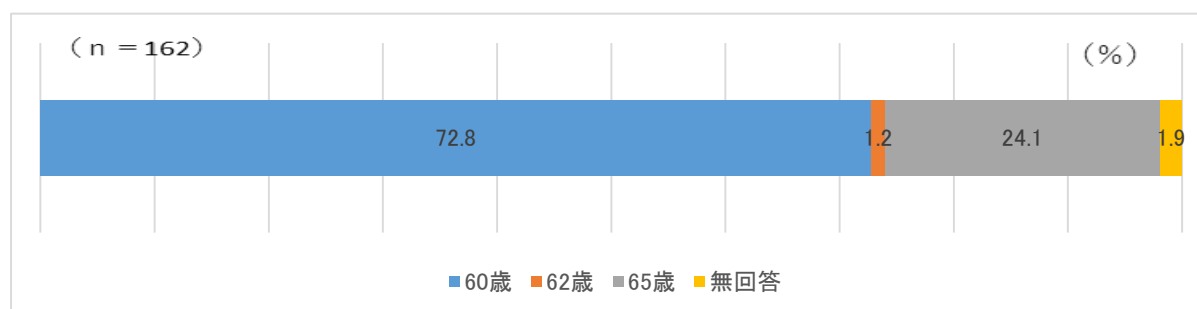
1 1) 若者たちが就職を考える際の一つの指標として、自身の職業のキャリアアップがあるが、調査対象となった各施設に「キャリアアップの仕組みの取り組み」について、複数回答で尋ねた。その結果は、図表 5-11 の通り、キャリアアップの仕組みとして最も多いのは「職場内や外部の研修の機会を確保に努めている」でほぼ 9 割を占めていた。次いで OJT が 55.0%となっていた。なお、研修や講習への参加は、社会福祉法人等の評価項目となっており、研修に参加しているからといってキャリアアップに取り組んでいるかは一概に判断できないところがある。

図表 5-11 職員のキャリアアップの取り組み



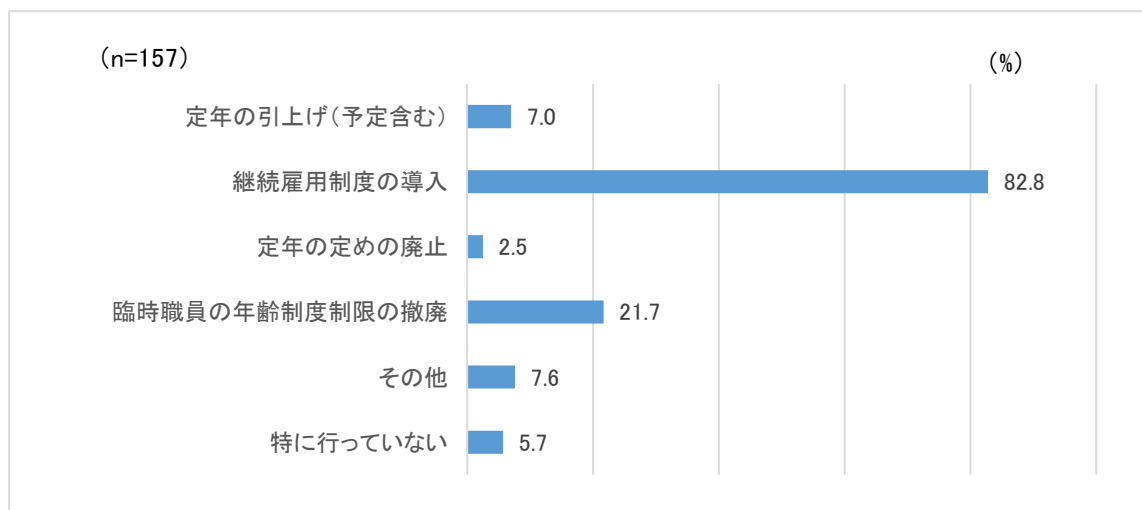
1 2) 各施設の多様な人材の参入・参画の促進について、まず「定年退職の年齢」を尋ねてみた。結果は図表 5-12-1 の通り、60 歳が 7 割以上を占めており、その次が 65 歳の 24.1%であり、この 2 つの年齢が全体の 97.0%を占めていた。

図表 5-12-1 定年の年齢



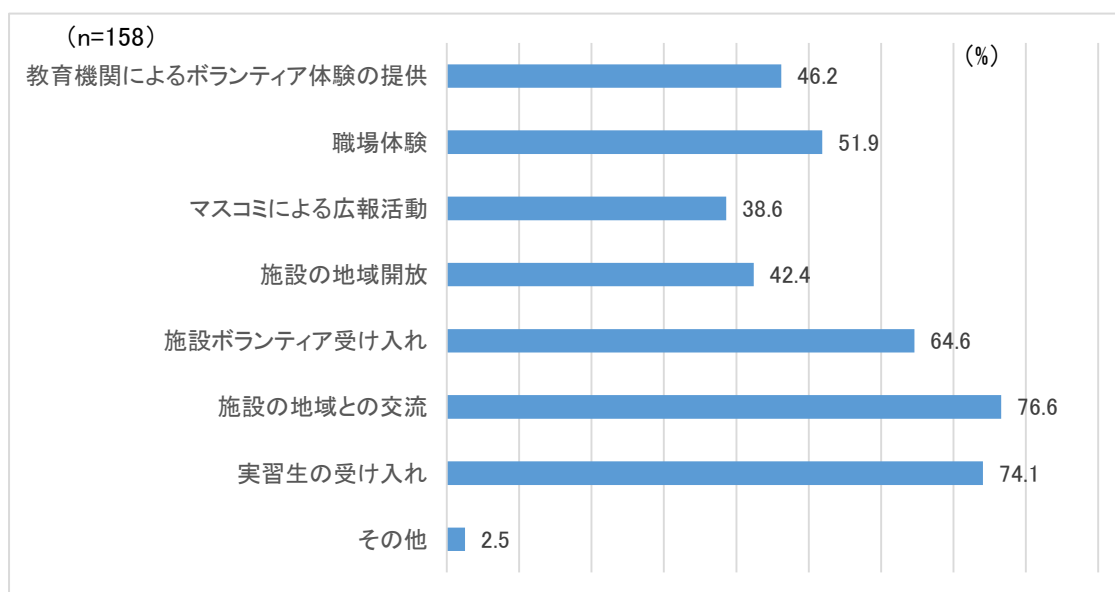
次に、高齢者等の雇用を促進するための取り組みについて、複数回答で答えてもらった。結果は、図表 5-12-2 の通り、高齢者等の雇用を進めるために取り組んでいることは、継続雇用制度の導入が 8 割を超えていた。あとは、臨時職員の年齢制限制度の撤廃であった。

図表 5-12-2 高齢者等の雇用の取り組み



1 3) 最後の質問項目は、対象となった福祉施設が「福祉・介護サービスの周知・理解を図るための取り組みに」関するものである。当てはまるものすべてを選んでもらったが、結果は、図表 5-13 の通りであった。福祉・介護サービスの周知・理解には施設の地域との交流が最も必要と思う施設が 76.6%であり、次いで実習生の受け入れが 74.1%となっている。また 3 番目に多いのは施設ボランティアの受け入れで 64.6%となっており、福祉や介護サービスの周知や理解には地域との交流や学生およびボランティアの受け入れなど、地域と交流を持ち、施設外の人々を受け入れることで一般への周知・理解が進むと考えている施設が多いことがわかった。

図表 5-13 福祉・介護サービスの周知・理解の取り組み



5－3．調査Ⅴのまとめ

介護・福祉の人材確保・定着の実態を把握するための最後の調査として、本調査Ⅴは、兵庫県内の福祉施設を対象として、施設の種別、設置主体、利用者の定員、職員数等の基本的な属性の項目以外に、退職状況や採用状況、欠員状況、欠員補充の現状など、施設の人材に関する項目、さらに、有給休暇、育児休業、介護休業、健康管理対策、福利厚生、キャリアアップの取り組み、福祉・介護サービスの周知・理解の取り組み、などの人材確保対策に関する項目を中心に調査を行った。

調査Ⅴの結果を簡単に要約すると、まず、施設における人材の現状については、過去3年間の退職状況や新規採用も含めた採用状況は、定年退職を迎えた職員をかかえる施設が4割程度であった。一方、中途退職者は1年あたり4～5人程度であり、それを補充する形で年に4～5人の新規職員を採用している施設が多いことがわかった。ただし、これらの項目については、無回答が多かったために、度数や比率を用いて結果を示すことはできても、それを一般化することには無理があることを断っておきたい。

次に、昨年4月1日現在で職員の欠員があった施設は約4分の1あったが、そのうちの半数の施設では、欠員補充が難しいとしており、人材確保の困難な現状がうかがえる。欠員が多い職種としては、施設での職員数の多さと関連しているので当然の結果とはいえ、介護職(ケアワーカー)が一番であり、介護職の補充が困難であるという結果もみられた。これらのことから、介護職の人材不足の問題は、兵庫県内の福祉施設でもある程度みられることがわかった。

施設における人材確保対策について何点か尋ねてみた。有給休暇を取得した職員は4割程度であったが、これでは十分な有給休暇の取得率とは言えず、「休暇が少ない」と言われても仕方のない面がある。今後、取得率を高めていく努力も必要だと思われる。その他、健康管理、福利厚生、キャリアアップなどの労働環境関係の項目の結果をみると、ある程度、各施設が取り組もうとしている姿勢はうかがえるが、福祉施設が積極的に労働環境の改善に取り組んでいることを示す就職情報の一環として広く公表できるレベルに達しているかどうかは疑問である。

8. 全体の結果のまとめと考察

調査Ⅰから調査Ⅴまでの結果のまとめ

まず、調査Ⅰから調査Ⅴまでの結果をまとめてみたい。

- 本調査は、兵庫県内にある公立・私立高校、専門学校、短大・4年制大学の学生・生徒、それらの学校で就職進路担当の教職員、兵庫県内の社会福祉施設を対象として、人材確保・定着に関する実態調査を行った。
- 高校生を対象とした調査Ⅰは、3,208人からの回答を得ることができたが、高校生の場合、専門学校や大学等とは異なり、専門分野が明確ではないので、本調査Ⅰの対象者は、社会福祉を進学先・就職先と決定する段階にある若者と推察される。
- 従って、福祉関連の行事等に参加したことがあると答えた人がほぼ半数いたが、実際に福祉への就職を考えると、「希望しない」と答えた人が8割近くであった。その一方で、残りの2割の高校生は、福祉への就職の可能性やその意向を示しており、福祉への就職意向がそれほど低くはなかった。
- 「福祉の仕事」のイメージに関する項目の結果をみると、介護を含む福祉職の仕事の必要性、重要性、将来性を実感しており、福祉の仕事そのもののイメージも決して悪いわけではなかった。その一方で、給与や休日などの労働条件に関する項目では、9割程度の高校生が否定的に観ていることがわかった。
- これから進学や就職を考える高校生あるいはその保護者にとっては、福祉の仕事における労働条件や負担感、雇用形態、安定性などの福祉の仕事に関するイメージは非常に悪いという結果であった。
- 専門学校生を調査対象とした調査Ⅱであるが、対象者の属性からわかるように、回答者のほとんどが福祉・介護系の専門学校生であった。
- 周りに福祉の仕事に就いた人がいる、あるいは福祉関連の行事等に参加したことがあると答えた人がそれぞれ約7割、9割5分以上と、高校生たちの結果より、非常に割合が高いという結果であった。
- 福祉への就職を身近なこととして考えている専門学生は、本調査においても福祉現場の現実をしっかりと見つめ、シビアで厳しい目でみていた。特に、賃金、労働条件、職場の人間関係など、労働環境に関連する項目については、厳しい指摘がなされていた。
- 「福祉の仕事のイメージ」については、身体的負担や精神的負担、給与や休日などの労働条件に関する項目については否定的な回答が数多くみられた。
- このような学生たちに対して、福祉現場サイドから情報公開を積極的に行うなど、受け入れの姿勢やアピールを示すことが必要かもしれない。
- 兵庫県内の短大・4年制大学の学生全般を調査対象とした調査Ⅲであるが、7割が福祉系を専門としていた。
- 高校生や専門学校生の結果と同様に、周りに福祉の仕事に就いた人がいる、あるいは福祉関連の行事等に参加したことがあると答えた人の方が、将来の福祉職への就職希望をする割合が有意に高かった。
- これら3つの若者を対象とした調査の結果、社会福祉協議会や各社会福祉施設・機関等で実施している様々な行事に若者が参加することは決して無駄にはなっていなかった。

- 「福祉の仕事」のイメージの回答をみると、福祉の仕事は専門的な知識や技術が求められる仕事であると答えた者がほとんどであり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持っていることがわかった。
- その一方、福祉労働の現実を非常にシビアに考えている面もあった。
- 短大・4年制大学の場合、一般企業の就職活動という大きな社会的な流れがすでに構築されている中で、まだ確立されていない福祉系のキャリアアップ体制の構築は急務であろう。
- 調査Ⅳは、調査ⅠからⅢまでの対象となった兵庫県内の公立・私立高校、専門学校、そして短大・4年制大学の就職進路担当の教職員を対象としたものであった。
- 担当教職員が持っている「福祉の仕事のイメージ」については、概ね学生・生徒たちと大きく変わらなかった。
- ただし、教職員の場合、学生・生徒たちよりも、福祉の仕事は専門性が必要な仕事であると同時に尊い仕事としても受けとめられる傾向が強いことがわかった。
- さらに、福祉の仕事は、精神的な負担や身体的な負担が多く、途中で退職する者が多いというイメージを持っている教職員の割合も高かった。
- 学生・生徒らに福祉の仕事を勧めるかという質問については、本人が学生・生徒が望めば勧めてもよいとする者が9割を超えており、福祉分野の就職や仕事への理解が進めば、進路指導の教職員からの後押しも期待できる結果であった。
- 自由記述で最も多かった意見は、学生・生徒らと同様、就職先となる社会福祉関係の諸施設・機関に対して、詳しい勤務条件、離職率、優良事業所等の具体的情報、平均給与、勤続年数、離職率、生涯年収基礎データなど、就職の際に選択の基準となる職場の様々な情報提供があげられていた。
- 学生の進路を考える上で、重要なのが保護者の存在であり、調査結果からは、様々な情報に熱心な保護者に対してもしっかりとした就職情報を提供することが必要である。
- 調査Ⅳにおいては、自由記述の欄で本当に数多くの意見、要望、提言、提案が出されていて、就職進路担当教職員の意識の高さ、進路指導の熱心さを改めて感じた。
- 調査Ⅴは、兵庫県内の福祉施設を対象として、福祉人材確保の現状、定着のための対策の現状を調査した。
- なお、福祉人材の確保と定着の取り組み、福祉人材センターへの要望や意見、潜在的有資格者等の参入の促進、欠員補充の取り組みや欠員補充の困難な点、人事戦略などについて、自由記述による回答を求めたが、ほとんどなかった。
- 過去3年間の退職状況や新規採用も含めた採用状況は、定年退職を迎えた職員をかかえる施設が4割程度であった。一方、中途退職者は1年あたり4～5人程度であり、それを補充する形で年に4～5人の新規職員を採用している施設が多かった。
- 欠員があった施設のうち、半数の施設では、欠員補充が難しいとしており、人材確保の困難な現状がわかった。
- 職員の労働環境に関連する様々な職場内の休業制度、健康管理対策、福利厚生事業、キャリアアップへの取り組みなどについては、ある程度、取り組んでいる姿勢はうかがえるが、福祉施設が積極的に労働環境の改善に取り組んでいることを示す就職情報の一環として広く公表できるレベルに達しているかどうかは疑問である。

9. 添付資料：各調査票

調査Ⅰ：若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査（高校生）

以下の質問項目は、皆様の福祉の仕事や職場に対してどのように考えておられるのか、その意識に関する項目です。すべての項目にできる限りお答えいただければ幸いです。なお、調査は、無記名で行われ、結果は統計的に処理されますので、個人のお名前やお答えが外部に漏れるようなことはありません。

I 【福祉の仕事・進路について】

(1) 周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか。

- ①いる ②いない

(2) 福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学(社会見学)などに参加した経験がありますか。

- ①ある ②ない

(3) (2) で「ある」と回答した中で、いつ参加しましたか。(複数回答可)

- ①小学生 ②中学生 ③高校生

(4) (2) で「ある」と回答した中で、どのような経験をしましたか。(複数回答可)

- ①職場・仕事体験・インターンシップ ②ボランティア体験
③職場見学（社会見学）・施設行事への参加・利用者との交流体験
④資格取得のための実習
⑤その他（ ）

(5) (2)で「ある」と回答した中で、参加を決めた理由でふさわしいものをすべて選んでください。(複数回答)

- ①以前から福祉に興味があった
②近所に福祉施設があった
③身内に福祉施設で働く人がいた
④先生・教員にすすめられた
⑤家族や友人などにすすめられた
⑥授業や実習のためやむなく参加した
⑦その他()

(6) (2) で「ある」と回答した中で、参加した後の福祉施設への印象の変化はありましたか。また、そう感じた理由を記入してください。

- ①よい印象を得た ②悪い印象を得た ③参加前とあまり変わらなかった
(上記を選択した理由：)

(7)(2)で「ある」と回答した中で、これからの就職選択に影響すると思いますか。また その理由 について記入してください。

- ①する（可能性がある） ②しない ③今のところわからない

（上記を選択した理由： _____）

(8) 将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか。

- ①希望する ②少し希望する ③あまり希望していない ④希望していない

(9) (8)で「希望している」「少し希望している」と回答した中で、どのような分野（仕事）を希望していますか。

- ①高齢者福祉 ②障害者・障害児福祉
③児童福祉（保育所や児童養護施設等） ④その他（_____）

(10) (8)で「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますか。また、そう思う理由を記入してください。

- ①考えると思う ②考えないと思う ③わからない

（上記を選択した理由： _____）

(11) あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～⑦のそれぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。

注）以下の項目でいう「福祉の仕事」には「介護の仕事」も含まれます。

項目	非常に そう思う	まあ そう思う	どちらとも 言えない	あまり そう思わない	まったく そう思わない
①福祉の仕事は、誰にでもできる仕事ではない	1	2	3	4	5
②福祉の仕事は、私にとって尊い仕事である	1	2	3	4	5
③福祉の仕事は、他の人から尊敬される仕事である	1	2	3	4	5
④福祉の仕事は、給与の条件がよい	1	2	3	4	5
⑤福祉の仕事は、休日がとりやすい	1	2	3	4	5
⑥福祉の仕事は、家賃補助といった手当や子育て支援なども含めた福利厚生制度が充実している	1	2	3	4	5
⑦福祉の仕事は、身体的な負担が少ない	1	2	3	4	5

⑧福祉の仕事は、精神的な負担が少ない	1	2	3	4	5
⑨福祉の仕事は、やりがいがある	1	2	3	4	5
⑩福祉の仕事は、自分の個性・適性を活かすことができる	1	2	3	4	5
⑪福祉の仕事は、取得した資格が活かせる	1	2	3	4	5
⑫福祉の仕事は、専門的な知識や技術が求められる	1	2	3	4	5
⑬福祉の仕事は、未経験で就職してもスキルアップができる	1	2	3	4	5
⑭福祉の仕事は、正社員での雇用が多い	1	2	3	4	5
⑮福祉の仕事は、身近な地域にあるため、希望地域で働ける	1	2	3	4	5
⑯福祉の仕事は、安定している	1	2	3	4	5
⑰福祉の仕事は、途中で退職する人が少ない	1	2	3	4	5
⑱福祉の仕事は、今後必要性が高まるので将来性がある	1	2	3	4	5
⑲福祉の仕事は、就職希望者が年々増えていく	1	2	3	4	5
⑳保護者は、福祉の仕事へ就職することを賛成してくれる	1	2	3	4	5

II 就職活動について

(12) 仕事(就職先)を決めるにあたり重視することは何ですか。以下のうち当てはまるものに3つまで○をつけてください。

項目	○印を記入
① 仕事の内容・やりがい	
② 給料・賃金	
③ 労働時間・休日等の労働条件	
④ 能力に応じた昇進・昇給制度	
⑤ 勤務場所(所在地)	
⑥ 転勤の有無	
⑦ 職場の環境(建物・照明・空調・騒音)	
⑧ 職場の人間関係・コミュニケーション	
⑨ 雇用の安定性	
⑩ 福利厚生制度	
⑪ 教育訓練・能力開発などのキャリアアップ制度	
⑫ 仕事の社会的評価	

(13) 就職に関する情報について、どこから情報を得ていますか(得ようと思いますか)。以下の当てはまるものにすべて○をつけてください。(複数回答)

- | | |
|-------------------|--------------|
| ①家族 | ②親戚 |
| ③先輩・友人・知人 | ④学校(担任・進路指導) |
| ⑤インターネット(就職サイト含む) | ⑥ハローワーク |
| ⑦福祉人材センター | ⑧その他(_____) |

(14) 希望する勤務地はどこですか。以下の当てはまるものに○をつけてください。

- | | | |
|----------------|-------------|---------------|
| ①住んでいる市町村かその近辺 | ②兵庫県内 | ③大阪など近畿圏 |
| ④西日本 | ⑤東京近辺 | ⑥東日本(東京近辺を除く) |
| ⑦全国どこでもよい | ⑧その他(_____) | |

Ⅲ 【基本的属性】いずれかに○をつけてください

(15) あなたの年齢は? _____歳

(16) あなたの性別は? ①男 ②女

以上です。

ご協力ありがとうございました。

調査Ⅱ・Ⅲ：若者の福祉の仕事や職場に対する意識調査

(専門学校生、短大・4年制大学生)

以下の質問項目は、皆様の福祉の仕事や職場に対してどのように考えておられるのか、その意識に関する項目です。すべての項目にできる限りお答えいただければ幸いです。なお、調査は、無記名で行われ、結果は統計的に処理されますので、個人のお名前やお答えが外に漏れるようなことはありません。

I 【福祉の仕事・進路について】

(1) 周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか。

- ①いる ②いない

(2) 福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学(社会見学)などに参加した経験がありますか。

- ①ある ②ない

(3) (2) で「ある」と回答した中で、いつ参加しましたか。(複数回答可)

- ①小学生 ②中学生 ③高校生 ④専門学校生 ⑤大学生

(4) (2) で「ある」と回答した中で、どのような経験をしましたか。(複数回答可)

- ①職場・仕事体験・インターンシップ ②ボランティア体験
③職場見学（社会見学）・施設行事への参加・利用者との交流体験
④資格取得のための実習 ⑤教職員免許取得のための介護等体験
⑥その他（ ）

(5) (2)で「ある」と回答した中で、参加を決めた理由でふさわしいものをすべて選んでください。(複数回答)

- ①以前から福祉に興味があった
②近所に福祉施設があった
③身内に福祉施設で働く人がいた
④先生・教員にすすめられた
⑤家族や友人などにすすめられた
⑥授業や実習のためやむなく参加した
⑦その他()

(6) (2) で「ある」と回答した中で、参加した後の福祉施設への印象の変化はありましたか。また、そう感じた理由を記入してください。

- ①よい印象を得た ②悪い印象を得た ③参加前とあまり変わらなかった
(上記を選択した理由：)

(7)(2)で「ある」と回答した中で、これからの就職選択に影響すると思いますか。また その理由 について記入してください。

- ①する（可能性がある） ②しない ③今のところわからない

（上記を選択した理由： _____）

(8) 将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか。

- ①希望する ②少し希望する ③あまり希望していない ④希望していない

(9) (8)で「希望している」「少し希望している」と回答した中で、どのような分野（仕事）を希望していますか。

- ①高齢者福祉 ②障害者・障害児福祉
③児童福祉（保育所や児童養護施設等） ④その他（_____）

(10) (8)で「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますか。また、そう思う理由を記入してください。

- ①考えると思う ②考えないと思う ③わからない

（上記を選択した理由： _____）

(11) あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～⑥のそれぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。

注）以下の項目でいう「福祉の仕事」には「介護の仕事」も含まれます。

項目	非常に そう思う	まあ そう思う	どちらとも 言えない	あまり そう思わない	まったく そう思わない
①福祉の仕事は、誰にでもできる仕事ではない	1	2	3	4	5
②福祉の仕事は、私にとって尊い仕事である	1	2	3	4	5
③福祉の仕事は、他の人から尊敬される仕事である	1	2	3	4	5
④福祉の仕事は、給与の条件がよい	1	2	3	4	5
⑤福祉の仕事は、休日がとりやすい	1	2	3	4	5
⑥福祉の仕事は、家賃補助といった手当や子育て支援なども含めた福利厚生制度が充実している	1	2	3	4	5

⑦福祉の仕事は、身体的な負担が少ない	1	2	3	4	5
⑧福祉の仕事は、精神的な負担が少ない	1	2	3	4	5
⑨福祉の仕事は、やりがいがある	1	2	3	4	5
⑩福祉の仕事は、自分の個性・適性を活かすことができる	1	2	3	4	5
⑪福祉の仕事は、取得した資格が活かせる	1	2	3	4	5
⑫福祉の仕事は、専門的な知識や技術が求められる	1	2	3	4	5
⑬福祉の仕事は、未経験で就職してもスキルアップができる	1	2	3	4	5
⑭福祉の仕事は、正社員での雇用が多い	1	2	3	4	5
⑮福祉の仕事は、身近な地域にあるため、希望地域で働ける	1	2	3	4	5
⑯福祉の仕事は、安定している	1	2	3	4	5
⑰福祉の仕事は、途中で退職する人が少ない	1	2	3	4	5
⑱福祉の仕事は、今後必要性が高まるので将来性がある	1	2	3	4	5
⑲福祉の仕事は、就職希望者が年々増えていく	1	2	3	4	5
⑳保護者は、福祉の仕事へ就職することを賛成してくれる	1	2	3	4	5

Ⅱ 就職活動について

(12) 仕事（就職先）を決めるにあたり重視することは何ですか。以下のうち当てはまるものに3つまで○をつけてください。

項目	○印を記入
⑬ 仕事の内容・やりがい	
⑭ 給料・賃金	
⑮ 労働時間・休日等の労働条件	
⑯ 能力に応じた昇進・昇給制度	
⑰ 勤務場所（所在地）	
⑱ 転勤の有無	
⑲ 職場の環境（建物・照明・空調・騒音）	
⑳ 職場の人間関係・コミュニケーション	
21 雇用の安定性	
22 福利厚生制度	
23 教育訓練・能力開発などのキャリアアップ制度	
24 仕事の社会的評価	

(13) 就職に関する情報について、どこから情報を得ていますか(得ようと思いますか)。以下の当てはまるものにすべて○をつけてください。(複数回答)

- | | |
|-------------------|--------------|
| ①家族 | ②親戚 |
| ③先輩・友人・知人 | ④学校(担任・進路指導) |
| ⑤インターネット(就職サイト含む) | ⑥ハローワーク |
| ⑦福祉人材センター | ⑧その他(_____) |

(14) 希望する勤務地はどこですか。以下の当てはまるものに○をつけてください。

- | | | |
|----------------|-------------|---------------|
| ①住んでいる市町村かその近辺 | ②兵庫県内 | ③大阪など近畿圏 |
| ④西日本 | ⑤東京近辺 | ⑥東日本(東京近辺を除く) |
| ⑦全国どこでもよい | ⑧その他(_____) | |

(15) 就職活動をするうえで困っていること(困ったこと)は何ですか。(自由記述)

●あなたが大学生の場合、次の問に答えてください。

(16) 就職に向けて活動を開始した時期、開始しようとする時期はいつごろですか。数字を記入してください。

平成_____年_____月ごろ

(17) 採用試験を受ける時期として望ましいと思う時期はいつごろですか。数字を記入してください。また、あわせてその理由を下記から選択してください。

平成_____年_____月ごろ

(その理由)

- | | |
|-------------------|----------------|
| ①実習時期と重ならない | ②授業や学内試験と重ならない |
| ③就職先を検討する時間が確保できる | ④その他(_____) |

Ⅲ 【基本的属性】いずれかに○をつけてください

(18) あなたの年齢は? _____歳

(19) あなたの性別は? ①男 ②女

(20) あなたの専攻は? ①福祉 ②福祉以外

(2 1) あなたは今？ ①専門学校生 ②短大生 ③4 年制大学生

(2 2) あなたの学年は？ ①1 年生 ②2 年生 ③3 年生 ④4 年生

以上です。

ご協力ありがとうございました。

調査Ⅳ：若者の福祉の仕事や職場に対する進路指導担当教職員の意識調査

以下の質問項目は、皆様が所属する高校・専門学校・短大・大学における進路指導担当の教職員の皆様が、皆様の高校生や大学生などの若者が福祉の仕事や職場に就職することや、福祉職に対してどのように考えておられるのか、教職員・進路指導担当者の皆様の意識に関する項目です。すべての項目にできる限りお答えいただければ幸いです。なお、調査は、無記名で行われ、結果は統計的に処理されますので、個人のお名前やお答えが外部に漏れるようなことはありません。

I 【福祉の仕事・進路について】

(1) あなたの「福祉に関する資格や職種」に対する認知状況として、次の①～⑪それぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。

項目	名称も具体的な業務内容も知っている	名称は知っているが、具体的な業務内容は知らない	名称も具体的な業務内容も知らない
① 介護福祉士	1	2	3
② 保育士	1	2	3
③ 社会福祉士	1	2	3
④ 精神保健福祉士	1	2	3
⑤ 社会福祉主事	1	2	3
⑥ 介護支援専門員（ケアマネジャー）	1	2	3
⑦ 訪問介護員（ホームヘルパー）	1	2	3
⑧ ソーシャルワーカー	1	2	3
⑨ スクールソーシャルワーカー	1	2	3
⑩ スクールカウンセラー	1	2	3
⑪ 医療ソーシャルワーカー	1	2	3

(2) あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～⑳それぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。

注) 以下の項目でいう「福祉の仕事」には「介護の仕事」も含まれます。

項目	非常に そう思う	まあ そう思う	どちら とも言 えない	あまり そう思 わない	い ま つ た く そ う 思 わ な い
①福祉の仕事は、誰にでもできる仕事ではない	1	2	3	4	5
②福祉の仕事は、私にとって尊い仕事である	1	2	3	4	5
③福祉の仕事は、他の人から尊敬される仕事である	1	2	3	4	5
④福祉の仕事は、給与の条件がよい	1	2	3	4	5
⑤福祉の仕事は、休日がとりやすい	1	2	3	4	5
⑥福祉の仕事は、家賃補助といった手当や子育て支援なども含めた福利厚生制度が充実している	1	2	3	4	5
⑦福祉の仕事は、身体的な負担が少ない	1	2	3	4	5
⑧福祉の仕事は、精神的な負担が少ない	1	2	3	4	5
⑨福祉の仕事は、やりがいがある	1	2	3	4	5
⑩福祉の仕事は、自分の個性・適性を活かすことができる	1	2	3	4	5
⑪福祉の仕事は、取得した資格が活かせる	1	2	3	4	5
⑫福祉の仕事は、専門的な知識や技術が求められる	1	2	3	4	5
⑬福祉の仕事は、未経験で就職してもスキルアップができる	1	2	3	4	5
⑭福祉の仕事は、正社員での雇用が多い	1	2	3	4	5
⑮福祉の仕事は、身近な地域にあるため、希望地域で働ける	1	2	3	4	5
⑯福祉の仕事は、安定している	1	2	3	4	5
⑰福祉の仕事は、途中で退職する人が少ない	1	2	3	4	5
⑱福祉の仕事は、今後必要性が高まるので将来性がある	1	2	3	4	5
⑲福祉の仕事は、生徒の就職希望者が年々増えていく	1	2	3	4	5
⑳生徒の保護者は、福祉の仕事へ就職することを賛成する	1	2	3	4	5

(3) 学生・生徒に福祉分野への就職・進学を勧めたいと思いますか。

- ①勧めたい ②学生・生徒が希望すれば勧めてもよい ③あまり勧めたくない

(4) (3) で「あまり勧めたくない」と回答した中で、その理由として当てはまるものを 3つ 選んでください。

- ①給料・手当が比較的低い
- ②精神的、体力的に仕事がきびしそう
- ③将来のキャリアアップが見込めない
- ④休暇や育児休業などを含めた福利厚生面が整備されていない
- ⑤福祉・介護業界全体のイメージがよくない
- ⑥法人の経営状況が公開されていないため、法人の実態がわかりにくい
- ⑦学生・生徒本人の適性に合わない
- ⑧保護者からの反対がある（予想される）
- ⑨学生・生徒が福祉施設等で実習（体験）を行い、その印象がよくないと感じている
- ⑩卒業生で福祉施設へ就職した学生・生徒からの不満をよく聞く
- ⑪その他（ ）

(5) (3) で「勧めたい」と回答した中で、その理由を記入してください。(自由記述)

--

(6) あなたが進路指導において福祉の仕事を勧める際、どのようなツール・支援が必要ですか。(自由記述)

--

(7) 学生・生徒に福祉の仕事に対する興味・関心をもってもらうにはどのようなことが有効だと思いますか(複数回答)。

- ①福祉施設の見学・体験
②福祉施設職員等による講義や交流機会
③福祉系の職業ガイダンス
④資格や職場に関する情報提供
⑤進学雑誌や情報誌等への福祉の啓発広告・情報掲載
⑥保護者への情報提供や説明会
⑦その他

--

①活用したい ②どちらでもない ③活用は考えていない
④その他（ ）

項目	学生・生徒 ○印を記入	保護者 ○印を記入
① 仕事の内容・やりがい		
② 給料・賃金		
③ 労働時間・休日等の労働条件		
④ 能力に応じた昇進・昇給制度		
⑤ 勤務場所（所在地）		
⑥ 転勤の有無		
⑦ 職場の環境（建物・照明・空調・騒音）		
⑧ 職場の人間関係・コミュニケーション		
⑨ 雇用の安定性		
⑩ 福利厚生制度		
⑪ 教育訓練・能力開発などのキャリアアップ制度		
⑫ 仕事の社会的評価		

--

Ⅱ 【基本的属性】いずれかに○をつけてください

(12) 所属 ①高校 ②専門学校 ③短大 ④4年制大学

(13) 進路指導の経験年数 ①0～3年未満 ②3～5年未満
 ③5～10年未満 ④10年以上

(14) 最後に、現在の福祉業界、福祉施設に期待することがあれば記入してください。(自由記述)

--

以上です。

ご協力ありがとうございました。

調査Ⅴ：福祉人材の確保と定着に関する実態調査

基本事項

1. 施設種別 あてはまるものの 番号に○をつけて ください。	1. 特別養護老人ホーム（ショートステイ含む） 2. 養護老人ホーム 3. 軽費老人ホーム（ケアハウス含む） 4. 救護施設 5. 児童養護施設 6. 母子生活支援施設 7. 乳児院 8. 保育所 9. 障害者施設（入所系）（ショートステイ含む） 10. 障害者施設（通所系） 11. 障害児施設（入所系） 12. 障害児施設（通所系） 13. その他（ ）
2. 設置主体	1. 社会福祉法人（法人名： ） 2. 公立（ ）市・町立 3. その他（ ）
3. 施設名称	
4. 所在地	（ ）市・町
5. 施設設立年月	（明治・大正・昭和・平成） 年 月
6. 利用者定員	名（うちショートステイ 名） ※ ショートステイを行っている施設はその定員も含める。
7. 職員について	職員数 名 内訳 1. 正 規 : 名 2. 常勤（正規外）： 名 3. 非常勤・パート： 名

※ 本調査につきましては、施設名、法人名等を出して情報公開することはありません。
 ※ この調査で得られたデータは、調査以外の目的で用いることはありません。また調査票の保管は兵庫県社会福祉協議会・福祉人材センターが責任を持って行います。

施設向け調査票

人材確保の現状

1. 退職状況と採用状況

平成 24 年度～26 年度に退職並びに採用した正規職員の人数を記入してください。

	定年退職	定年以外の退職	新規採用 (退職の補充)	新規採用 (新規事業実施)
平成 24 年度	名	名	名	名
平成 25 年度	名	名	名	名
平成 26 年度	名	名	名	名

2. 欠員状況について

※この場合の欠員とは、施設の設定した職員定数に対して、退職、休職、育児休業、介護休業等により生じた欠員を意味します。

- (1) 昨年 4 月 1 日現在で、「職員の欠員」はありましたか？(該当するものの番号 1 つに○を記入)
- あった⇒(2) へ
 - なかった
 - その他(具体的に)

- (2) 職員の欠員が「あった」場合、該当する全ての職種に○を記入してください。

No.	職 種	○を記入
1	相談員・支援員(ソーシャルワーク系職員)	
2	介護支援専門員	
3	介護職員(ケアワーク系職員)	
4	保育士	
5	児童指導員	
6	看護師・保健師	
7	理学療法士・作業療法士	
8	事務職員	
9	栄養士	
10	調理員	
11	臨床心理士	
12	言語聴覚士	
13	その他(具体的に)	

- (3) 欠員補充が円滑に行えない職種はありますか？(該当するものの番号 1 つに○を記入)
- ある⇒(4) へ
 - ない

施設向け調査票

(4) 欠員補充が円滑に行えない職種に○を記入してください。(当てはまるもの全てに○)。

No.	職 種	○を記入
1	相談員・支援員（ソーシャルワーク系職員）	
2	介護支援専門員	
3	介護職員（ケアワーク系職員）	
4	保育士	
5	児童指導員	
6	看護師・保健師	
7	理学療法士・作業療法士	
8	事務職員	
9	栄養士	
10	調理員	
11	臨床心理士	
12	言語聴覚士	
13	その他（具体的に	

人材確保対策について

1. 休暇等について

(1) 平成 26 年度の施設全体の有給休暇の取得率をお答えください。

有給休暇取得率 %

(職員全員の取得日数の合計／職員全員の有給休暇所持日数の合計)

(2) 平成 26 年度、育児休業を取得した職員はいましたか？（時間休業の取得者も含む）
(該当するものの番号 1 つに○を記入)また、いた場合は、その人数を記入してください。

1. いた () 人
2. いなかった

(3) 平成 26 年度、介護休業を取得した職員はいましたか？（該当するものの番号 1 つに○を記入)また、いた場合は、その人数を記入してください。

1. いた () 人
2. いなかった

2. 健康管理対策等について

職員の健康管理対策としてどのような取組みを実施していますか。当てはまるものの番号全てに○をつけてください。

1. 健康診断への費用負担
2. 保健師等による健康相談
3. 腰痛対策
4. メンタルヘルス対策
5. 感染症対策
6. その他（具体的に
7. 特に行っていない。

3. 福利厚生等について

職員の福利厚生事業としてどのようなことを行っていますか。当てはまるものの番号全てに○をつけてください。

1. ソウエルクラブに加入している
2. 民間社会福祉事業職員互助会に加入している
3. 法人・施設独自の福利厚生制度をもっている
4. その他（具体的に
5. 特に行っていない

4. キャリアアップの仕組みの構築

従事者のキャリアアップのために、貴施設ではどのような取組みを行っていますか。
当てはまるものの番号全てに○をつけてください。

1. 資格取得者を優先して採用している。
2. 資格の取得について奨励制度をもっている。
3. 業務の中で必要な知識・技術を習得できる体制（OJT）をもっている。
4. 職場内や外部の研修の受講機会（OFF-JT）の確保に努めている。
5. 人事考課において、資格の取得や自主研修等の自己研鑽を評価している。
6. その他（ ）
7. 特に行っていない。

5. 多様な人材の参入・参画の促進について

(1) 平成 26 年 4 月 1 日現在、定年は、何歳に設定していますか。

定年： 歳

(2) 高齢者等の雇用を進めるために、どのような取組みを行っていますか？当てはまるものの番号全てに○をつけてください。

1. 定年の引上げ（予定含む）（ 歳⇒ 歳）
2. 継続雇用制度の導入
3. 定年の定め廃止
4. 臨時職員の年齢制限の撤廃
5. その他（具体的に ）
6. 特に行っていない。

6. 福祉・介護サービスの周知・理解

福祉・介護サービスの周知・理解を図るために、社会全般として、どのような取組みが必要と思われますか？当てはまるものの番号全てに○をつけてください。

1. 教育機関によるボランティア体験の提供
2. 職場体験
3. マスコミによる広報活動
4. 施設の地域開放
5. 施設のボランティア受け入れ
6. 施設の地域との交流
7. 実習生の受け入れ
8. その他（具体的に ）

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。